

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(48)

一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う発掘調査報告書(Ⅱ)

中ノ丸遺跡・川ノ上遺跡

(第3分冊)

1989. 3

鹿児島県教育委員会

例 言

1. この報告書は、一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う大浦・郷之原地区の発掘調査の「中ノ丸遺跡」の調査報告書である。
2. この報告書は、鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(48)の第3分冊「中ノ丸遺跡」である。
3. 中ノ丸遺跡は、鹿屋市大浦町(旧字名中ノ丸)に所在する。
4. 発掘調査は、建設省九州建設局大隅工事事務所からの受託事業として鹿児島県教育委員会が実施した。
5. 発掘調査は、中ノ丸遺跡は昭和60年2月12日～3月17日間と昭和61年7月18日～10月8日に実施した。整理作業は、昭和62年度と昭和63年度に実施した。
6. 発掘調査において、鹿屋市教育委員会や大浦町振興会の協力・援助を得た。
7. 本書で用いたレベル数値は、すべて海拔高である。
8. 現地調査に関する実測及び写真撮影は、調査担当者(新東晃一・井ノ上秀文・前迫亮一)で行った。
本書の執筆は、主として新東がこれにあたり、一部を前迫亮一(第Ⅱ章第2節・第Ⅲ章第2節)と梅北浩一(第Ⅱ章第2節)と井ノ上秀文(第Ⅲ章第2節)が担当した。
9. 本書の編集は、鹿児島県教育庁文化課で行い、新東が担当した。

本文目次

第 I 章 中ノ丸遺跡の調査	1
第 1 節 発掘調査の概要	1
第 2 節 遺跡の層位	3
第 II 章 縄文時代の調査	8
第 1 節 調査の概要	8
第 2 節 出土遺物	8
第 III 章 弥生時代の調査	16
第 1 節 調査の概要	16
第 2 節 遺構	16
第 3 節 出土遺物	44
第 IV 章 中世・近世の調査	60
第 1 節 調査の概要	60
第 2 節 近世の遺構	60
第 3 節 出土遺物	68
第 V 章 発掘調査のまとめ	71

表目次

第 1 表 石器一覧表	14
第 2 表 土器一覧表 (1)	55
第 3 表 土器一覧表 (2)	56
第 4 表 土器一覧表 (3)	57
第 5 表 土器一覧表 (4)	58
第 6 表 土器一覧表 (5)	59

挿 図 目 次

第1図	中ノ丸遺跡の地形図とグリッド配置図	2
第2図	中ノ丸遺跡の層位と基本的層位	4
第3図	中ノ丸遺跡断面実測指示図	5
第4図	中ノ丸遺跡断面実測図(1)	6
第5図	中ノ丸遺跡断面実測図(2)	6
第6図	遺構配置図及び遺物分布図	9~10
第7図	縄文土器実測図(1)	11
第8図	石器実測図(1)	12
第9図	石器実測図(2)	13
第10図	縄文土器実測図(2)	15
第11図	縄文土器出土分布図	15
第12図	縄文土器実測図(3)	15
第13図	弥生時代遺構配置図及び遺物分布図	17~18
第14図	弥生土器出土状態図	19
第15図	住居址1号実測図	21~22
第16図	住居址1号内の遺物分布図(1)	24
第17図	住居址1号内の遺物分布図(2)	25
第18図	住居址1号出土遺物実測図(1)	26
第19図	住居址1号出土遺物実測図(2)	27
第20図	住居址1号出土遺物実測図(3)	28
第21図	住居址1号出土遺物実測図(4)	28
第22図	住居址1号出土遺物実測図(5)	29
第23図	住居址2号実測図	30
第24図	住居址3号実測図	32
第25図	住居址3号内の遺物分布図(1)	33
第26図	住居址3号内の遺物分布図(2)	34
第27図	住居址3号出土遺物実測図(1)	35
第28図	住居址3号出土遺物実測図(2)	36
第29図	住居址4号実測図	37
第30図	円形周溝1号実測図	38
第31図	円形周溝2号実測図	39

第32図	円形周溝 1号・2号出土遺物実測図	39
第33図	土壙 1号(上)・2号(下)実測図	40
第34図	土壙 3号～6号実測図	41
第35図	土壙 3号～6号出土遺物	41
第36図	土壙 7号実測図	42
第37図	掘立柱建物跡 1号実測図	42
第38図	柱穴出土遺物	43
第39図	弥生土器実測図(1)	45
第40図	弥生土器実測図(2)	46
第41図	弥生土器実測図(3)	47
第42図	弥生土器実測図(4)	48
第43図	弥生土器実測図(5)	49
第44図	弥生土器実測図(6)	50
第45図	弥生土器実測図(7)	51
第46図	弥生時代石器実測図	54
第47図	掘立柱建物跡 1	60
第48図	掘立柱建物跡 2	61
第49図	土壙 1号・2号(I)	62
第50図	土壙 1号・2号(II)	62
第51図	土壙 1号出土遺物	62
第52図	土壙 4号	64
第53図	土壙 4号集石内出土遺物	64
第54図	土壙 4号出土の筭	65
第55図	土壙 5号・6号	65
第56図	土壙 5号・6号出土遺物	66
第57図	旧道	67
第58図	須恵器	68
第59図	土師器・土師質土器	68
第60図	青磁	69
第61図	硯	70

図 版 目 次

図版 1	1. 中ノ丸遺跡全形 (西から)	2. 中ノ丸遺跡全形 (東から)	77	
図版 2	1. 住居址 1 号検出状況 (南から)	2. 住居址 1 号 (南から)	78	
図版 3	1. 住居址 1 号の中央ピット検出状況	2. 同 軽石製品出土状況		
	3. 同 柱穴と土器の検出状況	4. 同 住居址切開状況	79	
図版 4	1. 住居址 1 号出土遺物 (1)		80	
図版 5	1. 住居址 1 号出土遺物 (2)		81	
図版 6	1. 住居址 3 号 (南から)	2. 住居址 3 号 (南から)	82	
図版 7	1. 住居址 4 号検出状況 (西から)	2. 住居址 4 号 (西から)		
	3. 住居址 2 号 (北から)	4. 円形周溝 2 号溝埋土断面 (南から)	83	
図版 8	1. 住居址 3 号出土遺物		84	
図版 9	1. 円形周溝 1 号 (北から)	2. 円形周溝 2 号 (北から)	85	
図版 10	1. 土壙 3 号～6 号	2. 土壙 1 号	86	
図版 11	1. 円形周溝出土遺物 (83～93)	2. 土壙出土遺物 (94～100)	87	
図版 12	1. 縄文土器 (1) (1～8)	2. 縄文石器 (1) (9～18)	88	
図版 13	1. 縄文石器 (2)	2. 縄文土器 (2) (21～24)	89	
図版 14	1. 弥生土器 (1) (101～115)	2. 弥生土器 (2)	90	
図版 15	1. 弥生土器 (3) (116～128)	2. 弥生土器 (4) (129～142)	91	
図版 16	1. 弥生土器 (5) (143～161)	2. 弥生土器 (6)	92	
図版 17	1. 弥生土器 (7)		93	
図版 18	1. 近世土壙 2 号 (集石)	2. 近世土壙 1 号 (左)・2 号 (右) (南西から)	94	
図版 19	1. 近世土壙 3 号 (集石)	2. 近世土壙 3 号	95	
図版 20	1. 側道拡張区遠景 (南から)	2. 掘立柱建物跡 2 全景 (南から)	96	
図版 21	1. 掘立柱建物跡 2 (東から)	2. 近世土壙 5 号		
	3. 土壙 5 号遺物出土状態	4. 土壙 6 号	5. 土壙 6 号埋土状況	97
図版 22	1. 土壙 1 号・2 号出土遺物	2. 土壙 4 号出土遺物		
	3. 土壙 5 号・6 号出土遺物			98
図版 23	1. 中世・近世出土遺物			99

第 I 章 中ノ丸遺跡の調査

第 1 節 中ノ丸遺跡の概要

1 調査の経緯

中ノ丸遺跡は、大浦町の南側の広い台地上で中ノ原遺跡の西側と向かい合う位置にあたる。昭和59年度の分布調査の結果、この部分を第2地点とした。建設省大隅工事事務所と鹿児島県教育委員会との協議の結果、昭和60年4月確認調査を実施し、その後昭和60年10月以降本調査を実施することになった。確認調査の結果、5トレンチ付近まで近世及び弥生時代中期の遺跡の拡がり確認された。本調査は、この範囲を中心に行うことになった。

2 発掘調査の経過

発掘調査は、昭和60年度と昭和61年度の二年次にわたって実施した。

昭和60年度は、昭和61年2月12日から3月17日の間に実施した。昭和60年度の発掘調査は、橋梁部分の工事が早く発注されるためその部分にあたる台地東側部分を中心に行った。

昭和61年度は、昭和61年7月18日から10月8日の間に実施し、昭和60年度の引き続きの分を行い中ノ丸遺跡の調査は完了した。

発掘調査は、工事用センター杭No371とNo373を基準に10m×10mのグリッド網を調査対象区域に被せ実施した。そして、グリッドは、東端から1～10区と南からA～B区として、各グリッドはA1区——A10区、B1区——B10区などと呼称することにした。

発掘調査の成果

昭和60年度の発掘調査は、台地東端部のA B 1～10区を行った。その結果、近世と弥生時代中期末～後期初頭にかけての遺構・遺物が多量に出土した。

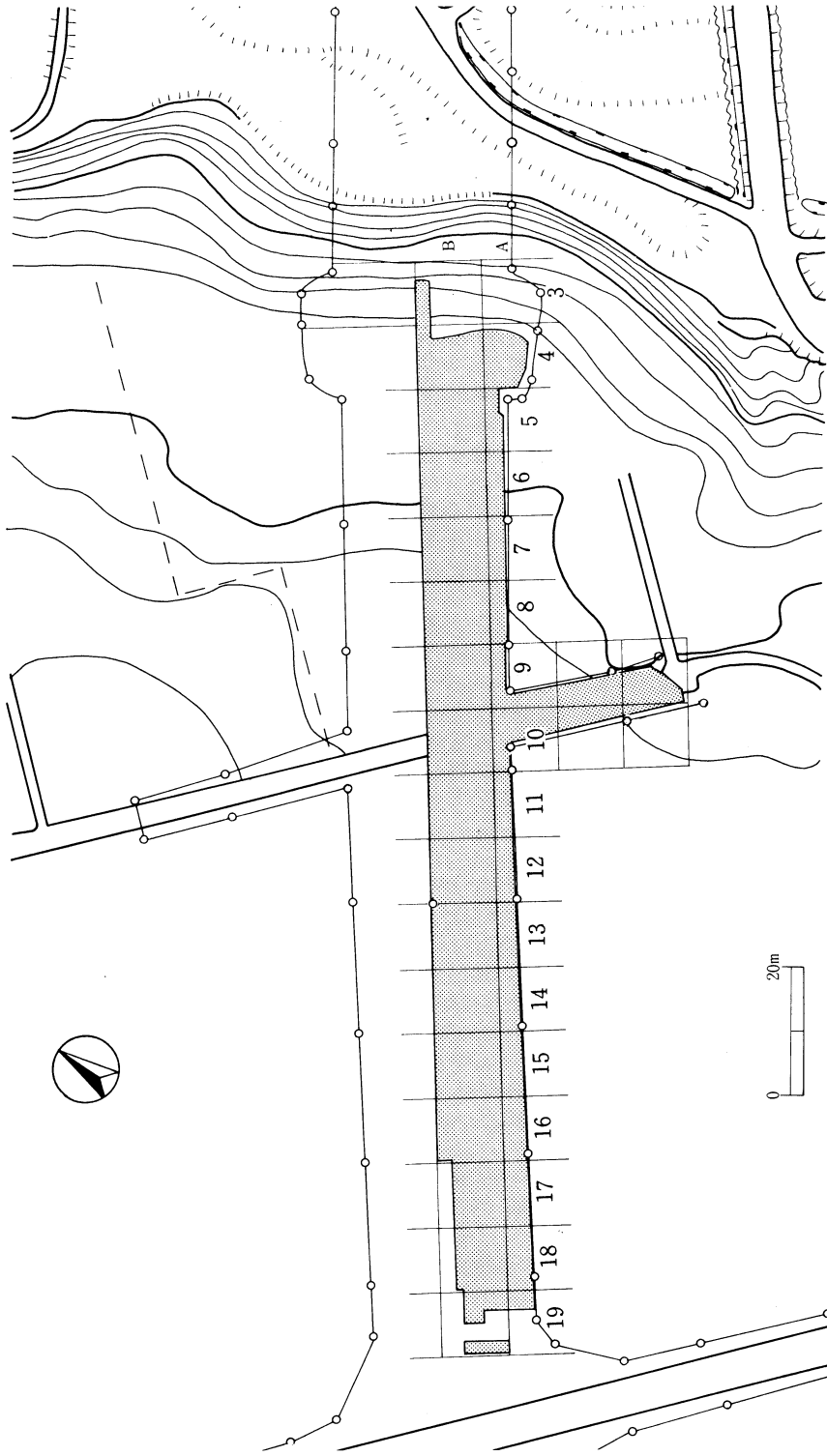
近世の遺構は、集石土壇2基や土壇1基のほか溝や柱穴が検出された。

集石土壇1号は、B7区に検出され長さ4.3m×幅1.2mである。土壇の両隅の炭化木の上面に集石を配置させる特異な遺構である。中央の凹地には焼土が厚く堆積し、近世陶磁器等の遺物も出土している。

集石土壇2号は、B4区に検出された円形プランのものである。下面に焼土と木炭が詰まり上面に集石が配置され、集石土壇1号の両隅に類似する構造を備えている。隣接して径約2mの焼土を充填させた土壇1号が存在するが、これらは相互に関連する性格の遺構であることが想定される。確認調査では2トレンチで近世墓が検出されたが、この区域は緑地帯となり調査の対象にはならなかった。

そのほか溝や柱穴が多数検出されている。

弥生時代中期末～後期初頭の遺構は、竪穴住居址3基と円形周溝2基や柱穴等が検出されている。住居址1号はB9区に全形が、住居址2号はA8区に一部が、住居址3号はA B 6区に半分ほどが検出された。住居址数は少なく、また平面の一部のものもある。これは発掘調査区



第1図 中ノ丸遺跡の地形図とグリッド配置図

域の幅員が12mと狭いためであり、用地外の周辺の地形を考えると大集落が想定できる。

住居址1号は、北・西・南側の3辺に張り出し部分を設けたものである。張り出し部分を含めて東西5.5m×南北6.1mを測る住居址で、張り出し部分はベッド状に一段高くなる。中央に二本の主柱と炉穴状のピットを持つタイプである。

住居址2号は、1号に類似するタイプであるが、用地外へ延びるため形態は不明である。

住居址3号は、検出された直径約7mの円形プランで間仕切りとベッド状遺構を配したタイプのものである。

住居址1号・3号の形態はこれまで、鹿屋市王子遺跡などで発見されており類例を補強する貴重な資料である。

円形周溝は、B7区に2基検出された。いずれも径約4m程度の大きさを呈するが、1号は幅25cm～30cmと幅狭な周溝で、2号は幅45cm～50cmと広い周溝である。中央部分には施設も認められなく、その性格は不明である。

そのほか、土壌や柱穴等も検出されている。

出土遺物は、土器の他、石鏃や凹石などの石器、軽石製垂飾、土製勾玉など比較的豊富に出土している。

昭和61年度の発掘調査は、昭和60年度の延長部の確認調査と発掘調査を行った。

まず、A B15区～19区にかけての確認調査を行った結果、A B18区付近までに弥生時代中期末～後期初頭と縄文時代晩期の包含層が存在することが確認された。協議の結果、A B15区～18区付近まで本調査を延長して行うことになった。その結果、中・近世の溝や古道、弥生時代の土壌等の遺構のほか土器・石器などが出土した。

さらに、A Z Y 9～10区の取り付け道路部分については住居址付近であるため、協議の結果、調査を行うこととなった。その結果、弥生時代の住居址（4号）や土壌のほかに近世の掘立柱建物跡や土壌等も検出された。また、昭和60年度調査分のA～B4～10区については、精査や下層調査などを行って中ノ丸遺跡の発掘調査を完了した。

第2節 遺跡の層位

中ノ丸遺跡の層位は、発掘調査対象区が約200mに及びしかも平坦地から傾斜地へ向かうため大きな変化がみれる。提示した層位柱状図は平坦地のB16区付近であるが、B4区付近の傾斜地に向かうと上層の層が増え基本的層序に近くなる。

挿図の第2図から第3図は、中ノ丸遺跡の層位断面図である。層位断面図は、発掘調査対象区が道路建設で横に長く延びるため地形を輪切りした形でB区列の北断面を1本通した。そして東側断面図は、2グリッド毎に提示した。

中ノ丸遺跡の層位をみると、ほぼ基本的層序に準じているが、Ⅷ層の砂礫層の前後が混在する部分がある。B4区付近の傾斜地には砂礫層の厚い堆積がみられるが、B17区付近の平坦地

では混土層となる。

I層は、傾斜地では厚く残りしかも農地整備盛土（b）や旧表土（c）も確認される。しかし平坦部では、現表土が一層でその下層はVIII層となり大きく削平を受けている。

II層は、黒色土層でB14区からB18区の平坦面に部分的に残存する。これに伴うと考えられる溝状遺構も検出されている。

III層は、黒褐色土層でB4区やB5区の傾斜面に残存し、弥生時代中期末～後期初頭の遺物包含層となっている。

IV層は、中ノ丸遺跡では確認されない。一つには、平坦面でIII層とV層の区分が難しいことにもよる。III層・IV層・V層の混土層になっている可能性もある。

V層は、茶褐色土層であるが、B15区からB18区の平坦面にはこれに類する土層が確認されている。B18区付近には、縄文時代晩期の遺物包含層がわずかではあるが確認されている。

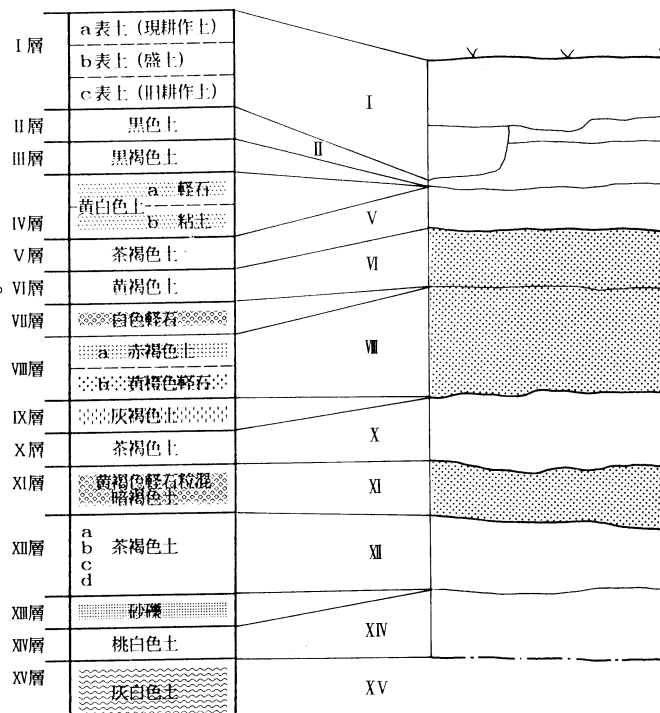
VI層は、黄褐色土層で下層VII層の白色軽石層でやっと区分される。VI層は調査区全体に見られるが、中ノ丸遺跡では遺物は包含していない。

VII層は、VI層とVIII層の間に白色軽石粒が浮遊して存在し、層形成は見られない。この白色軽石は、特にB8区から東の傾斜地にかけてはVI層に混在し浮遊が大きい。軽石は、池田降下軽石と呼ばれるものである。

VIII層は、アカホヤ火山灰層に相当する。VIII層はVIII a層の赤褐色土層が大部分を占めるが、これは幸屋火砕流に比定されるものである。これまでこの幸屋火砕流下の炭化木から得られた¹⁴C測定年代値は約6,400B. P. yでこれがアカホヤ火山灰の降灰年代とされている。

IX層は、中ノ丸遺跡では部分的に確認され、全体的にはみられない。権現山火山灰と呼ばれるものに相当する。

X層は、茶褐色土層の粘土層である。一般的には縄文時代早期包含層を形成するが、中ノ丸遺跡では遺物は確認されていない。



第2図 中ノ丸遺跡の層位と基本的層位

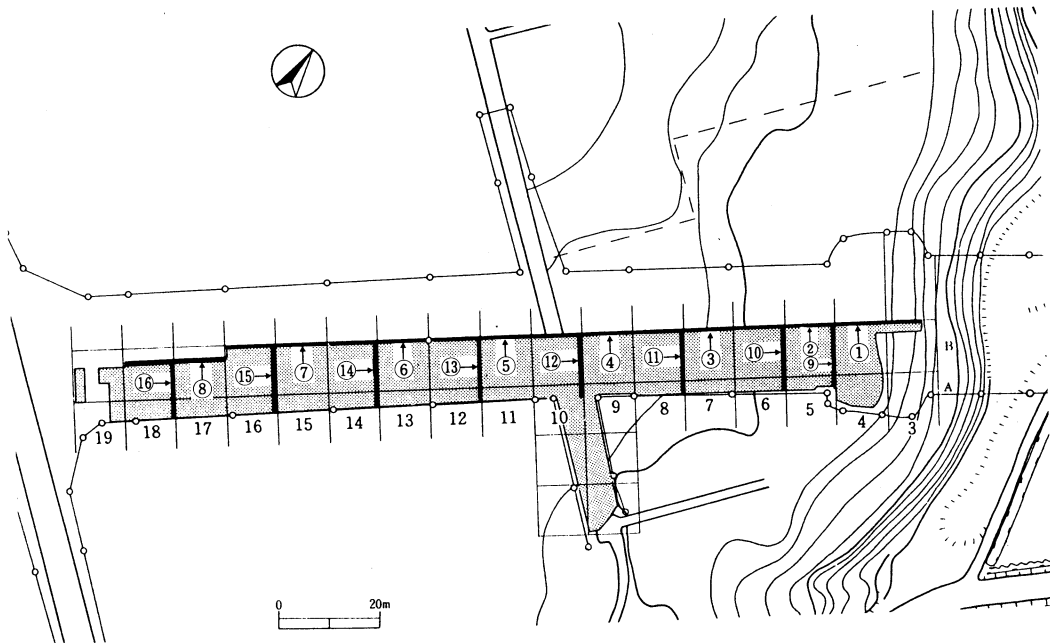
XI層は、黄褐色軽石粒混暗褐色土層で薩摩火山灰と呼ばれる火山灰堆積物である。中ノ丸遺跡では、部分的にブロック状に止切れる部分もあるがほとんどが層形成されて残存している。この薩摩火山灰層は、 ^{14}C 測定年代値によって約11,000B. P. y の降灰とされている。

XII層は、茶褐色土層の粘質土層で一般的には細石器が包含されるが、中ノ丸遺跡では確認されなかった。

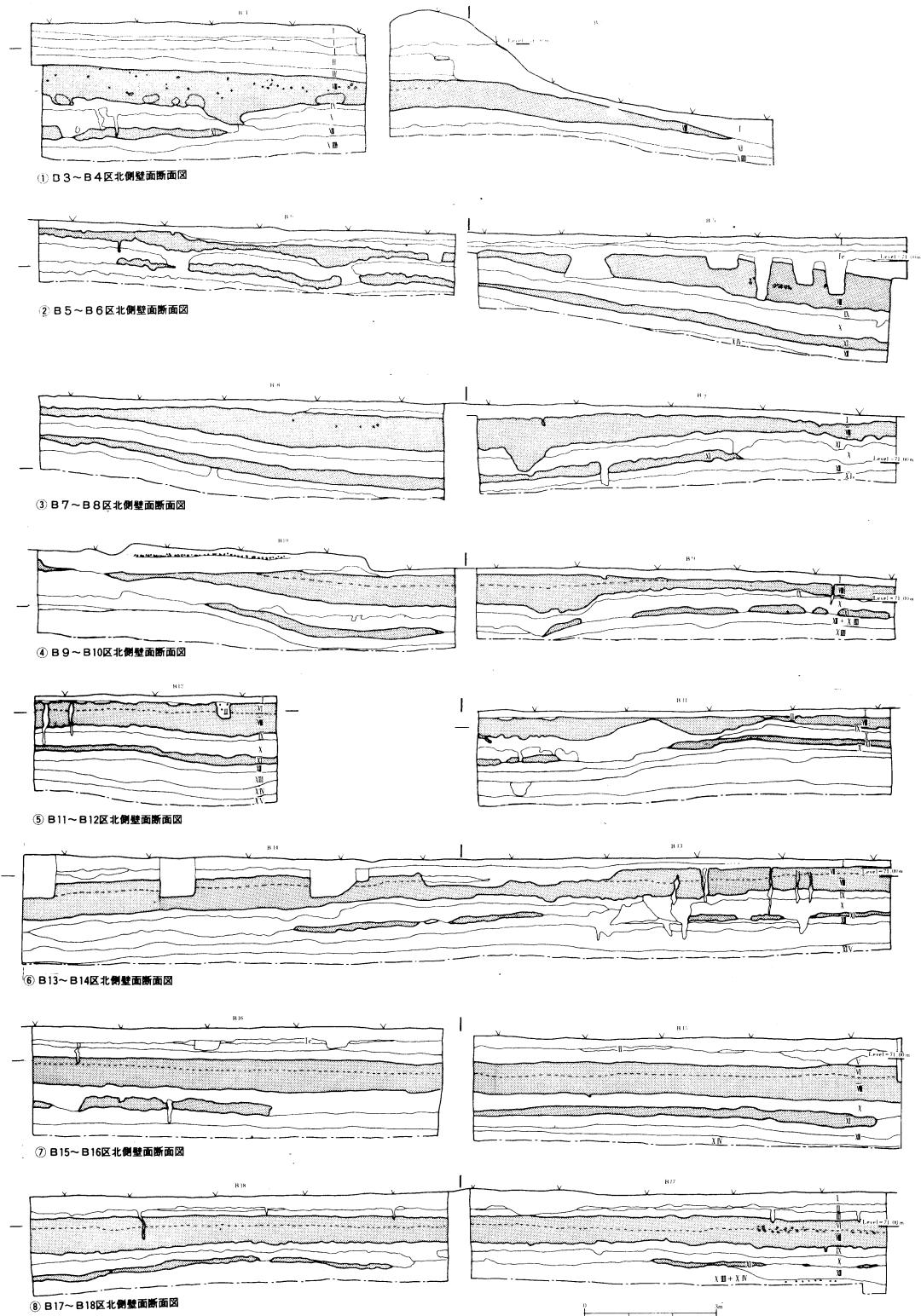
XIII層は、砂礫層で形成される。中ノ丸遺跡では、砂礫混土層を含めて各区でみられる。榎田下遺跡や中原山野遺跡など東向きの台地の先端で同様な状態がみられるが、地層形成状の地理的な現象ともみられる。

XIV層は、桃白色土層の通称ヌレシラスと呼ばれる入戸火砕流の二次堆積物である。

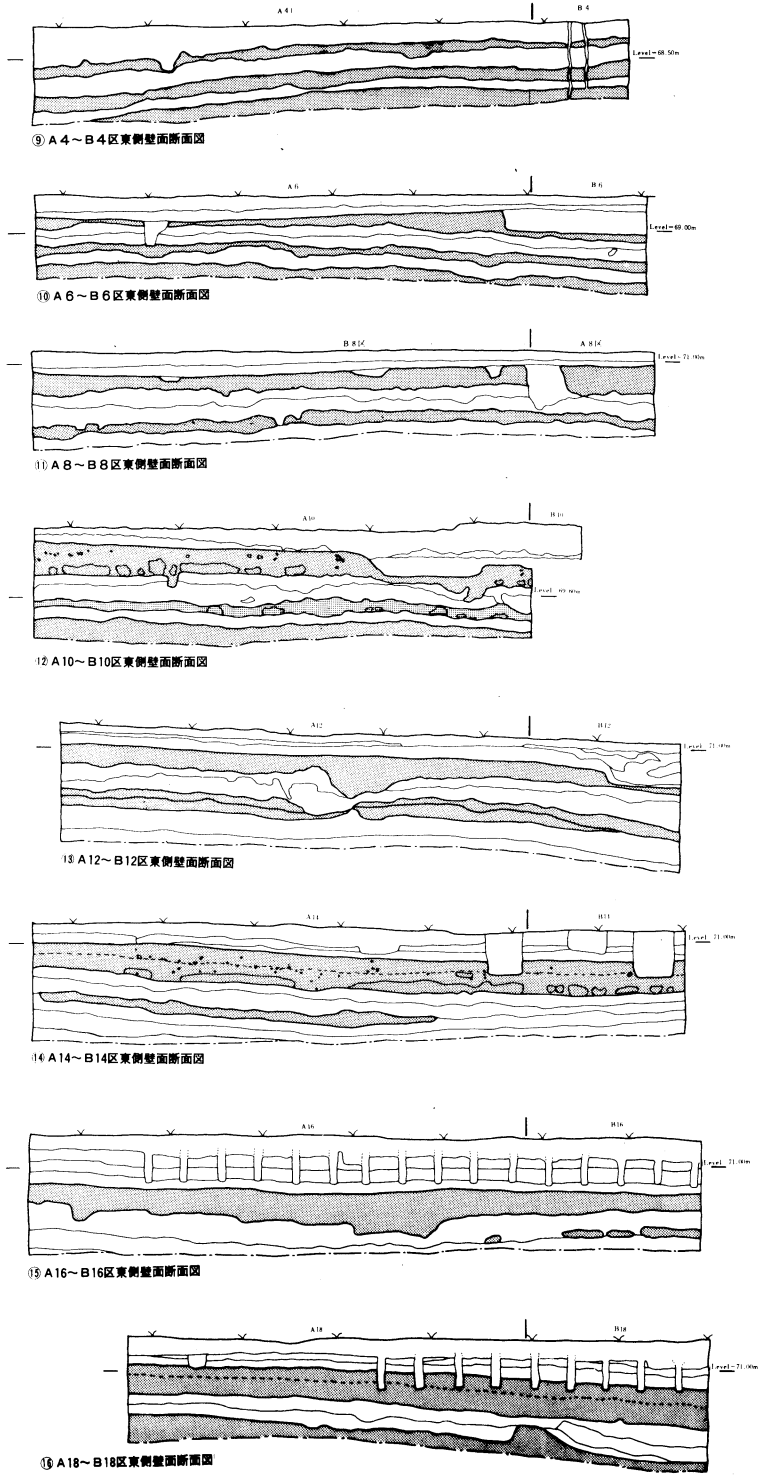
XV層は、入戸火砕流堆積物で通称シラスと呼ばれている。本県では、通常数m～数十mの厚い堆積がみられる。本遺跡の基盤層となっている。



第3図 中ノ丸遺跡断面実測指示図



第4図 中ノ丸遺跡断面実測図(1)



第5図 中ノ丸遺跡断面実測図(2)

第Ⅱ章 縄文時代の調査

第1節 調査の概要

中ノ丸遺跡においては、縄文時代の土器の出土は若干みられたものの縄文時代の遺構は皆無であった。

中ノ丸遺跡の縄文土器は、前期と後期と晩期に該当する。前期と後期土器はA3～A4区とA9区とA12区に散在し、晩期の土器はB19区に集中している。

第2節 出土土器

1. 前期該当土器 (第7図-1～8)

前期に該当する土器が2点出土している。1は、A9区出土のもので条痕文系土器の口縁部片である。口縁部は、若干肥厚し内面で屈曲して口縁部は細くおさめる。表裏とも条痕文が施され、口縁部には微隆突帯文を巡らせている。その突帯文の上から縦位の細い刻目が施されている。器壁厚は、0.7～1.0mmを測る。色調は灰褐色を呈し、胎土には長石や石英の細粒を混入する。轟式土器に近いタイプと考えられる。

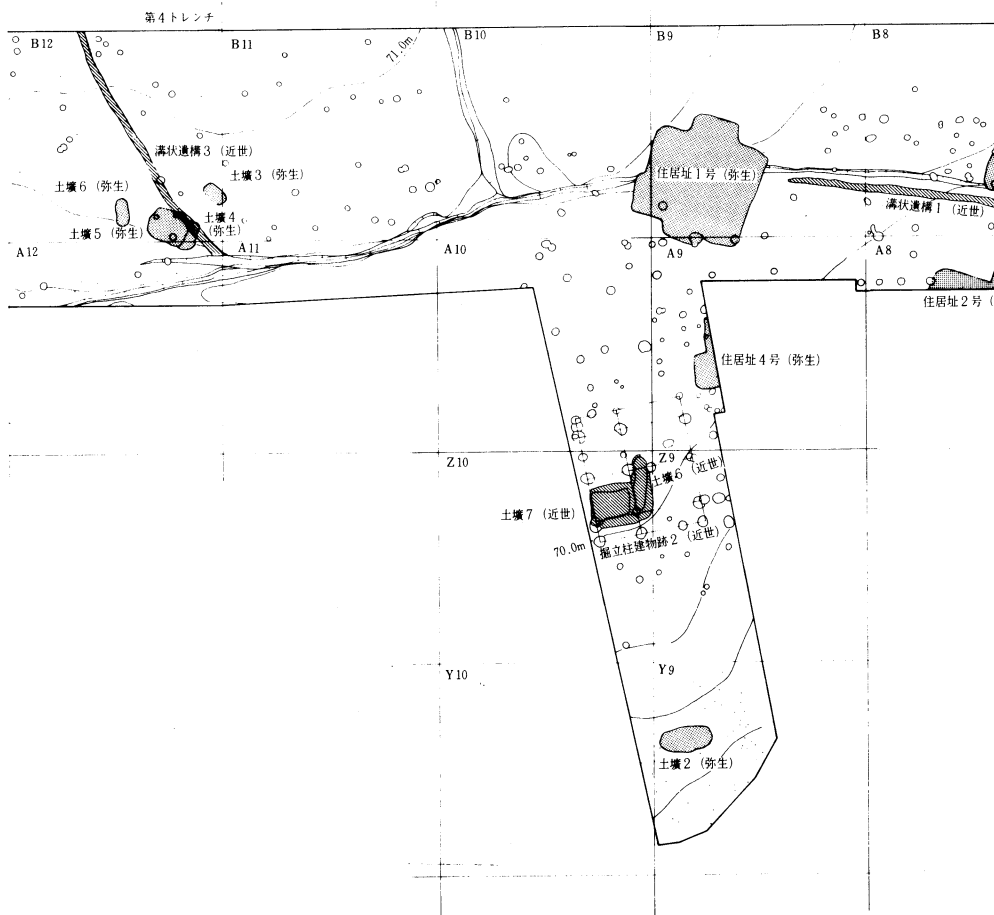
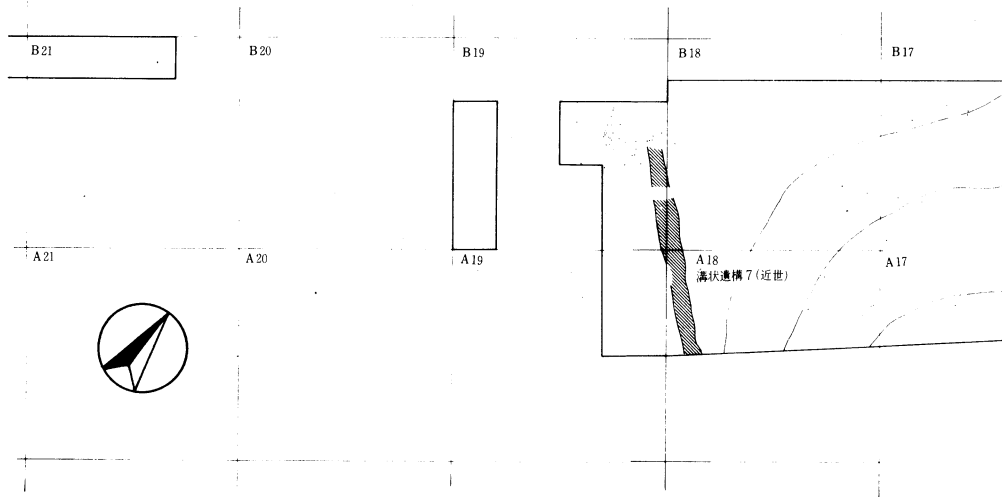
2は、B3区出土で沈線文を幾何学的に施文した胴部片である。沈線文は、シャープさが無く文様構成も若干乱れている。器壁厚は、0.7mmの薄手である。胎土は長石や石英の細粒を含むが、滑石は含まない。色調は赤褐色を呈する。曾畑式土器に該当する。

2. 後期該当の土器 (第7図-3～8)

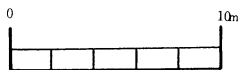
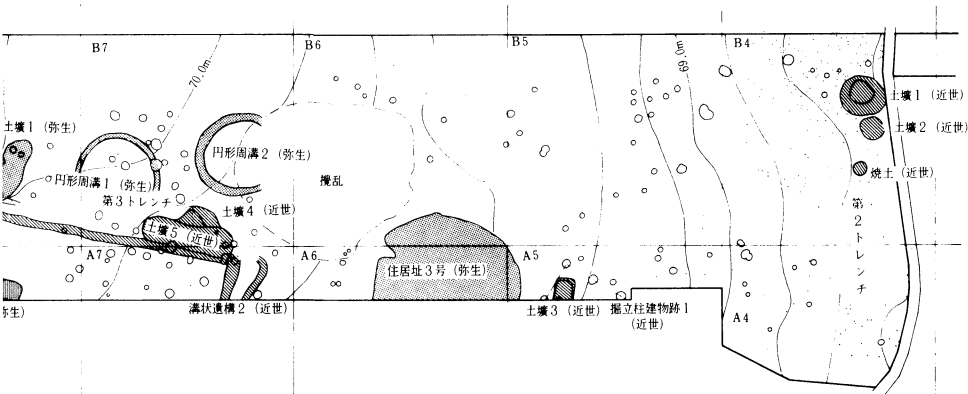
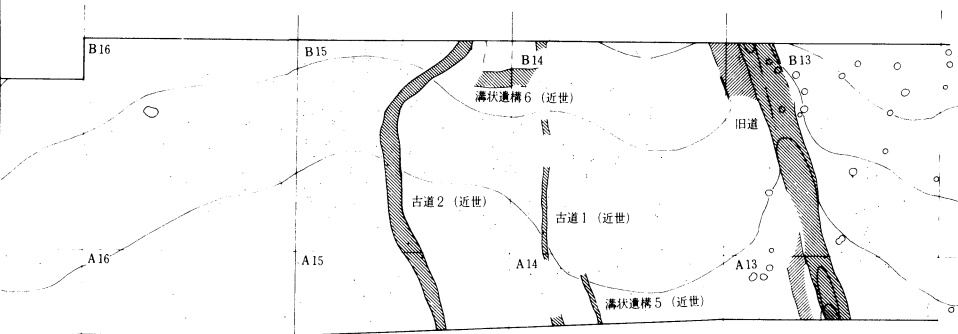
3・4は、B12区出土で同一個体の口縁部片と胴部片である。3は、ほぼ直行する口縁部で口唇部は平坦におさめる。平坦な口唇部には、0.5～0.6mm程度の凹線文が1条巡っている。3の口縁部外面には同幅の凹線文が縦位に平行して施文され、その凹線文は4の胴部片まで続いている。口唇部直下には、凹線文と同施文具での刺突文が横位に連続して施文されている。内面は、口縁部付近が斜位で胴部付近が横位の条痕文で整形され、その上からナデ調整で仕上げられている。色調は茶褐色を呈し、胎土には長石や石英のほか金雲母を混入する。

5は表採であるが、「く」字状の肥厚口縁部で市来式土器に該当する。口唇部や口縁部などのほとんどは欠損しているが、肥厚口縁部の文様は凹線文とヘラ刺突文が確認される。内面は条痕整形が施され、外面はナデ整形で仕上げられている。色調は茶褐色を呈し、胎土には長石や石英のほか金雲母を混入する。

6は、B3区出土で「く」字状に屈曲し波状の山形口縁を呈する口縁部片である。外面の文様は、屈曲部の下端に貝殻腹縁の刺突文が横位に施されるものである。器壁厚は、0.9mm程度の厚さである。内面は条痕整形が施され、外面はナデ整形で仕上げられている。色調は茶褐色を



第6図

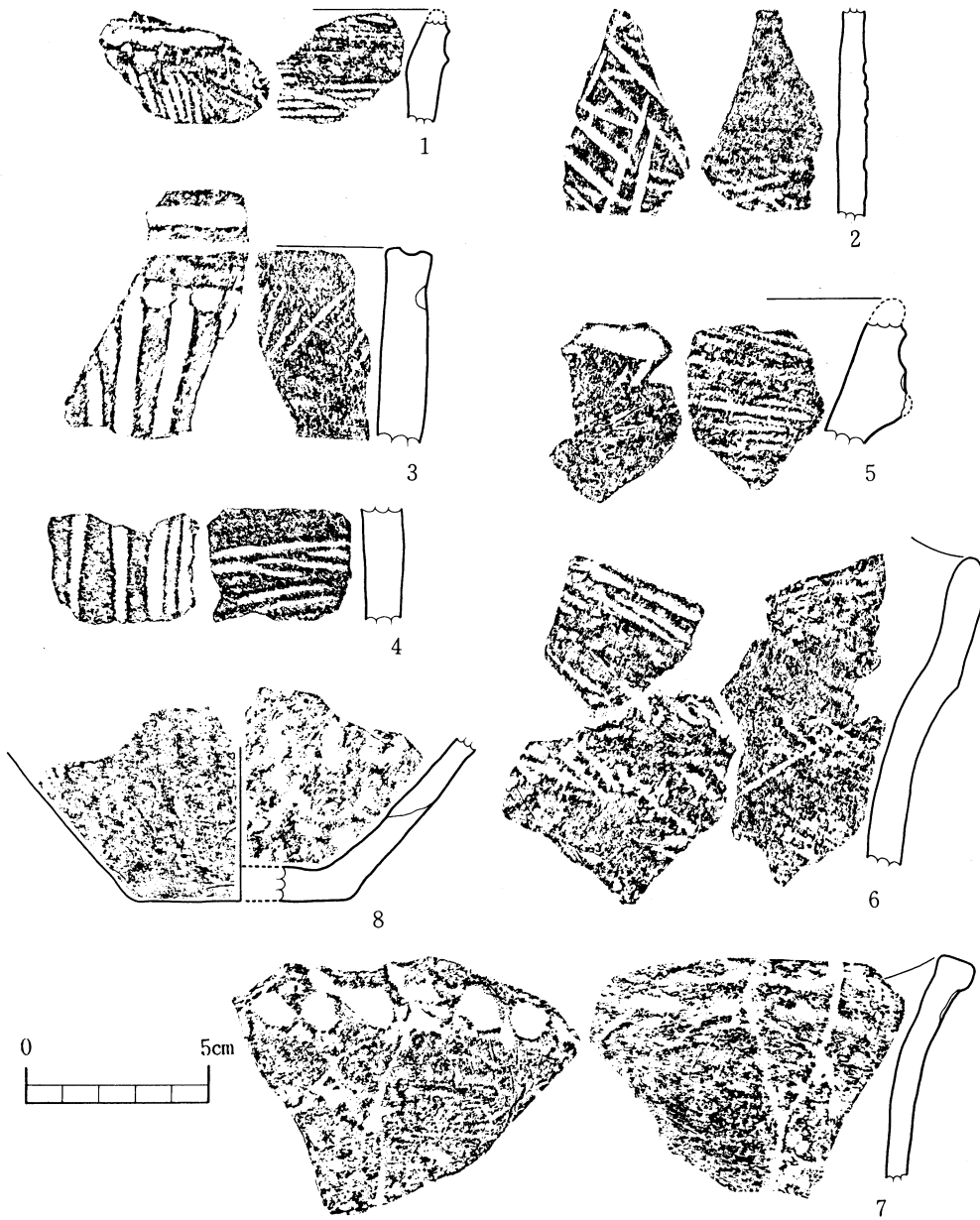


遺構配置図及び遺物分布図

呈し、胎土には長石や石英のほか金雲母を混入している。市来式土器の範ちゅうに属するものである。

7は、A7区出土である。口縁部が若干外反して口唇部は僅かに肥厚して平坦におさめる。口縁部は波状の山形口縁を呈し、口縁外面には凹点文が巡る。色調は暗茶褐色を呈し、胎土には長石や石英などの細粒を比較的多く含む。類例の無いタイプである。

8は、A4区出土の底部片である。底径約6cmほどの平底から、直線的に胴部へ拡がるものである。



第7図 縄文土器実測図(1)

第3節 出土石器 (第8図～第9図-9～20)

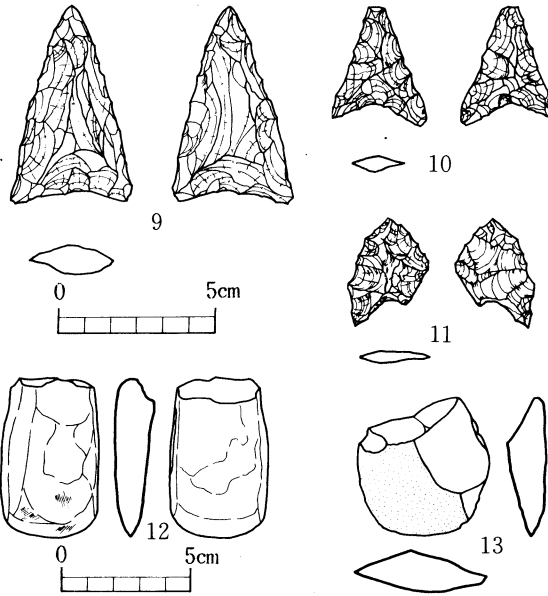
縄文時代の石器として、総数12点の石器が出土している。その内訳は、打製石鏃3点、石斧1点(磨製石斧)、磨石1点、敲石2点、凹石2点、石皿2点、その他石器1点である。

1) 打製石鏃

9は、基部に介入(凹基無茎族)をもつ完形品である。側辺は、先端に向かって直線状である。剥離面は、風化のため確認しにくい。

10は、基部に介入(凹基無茎族)を持つ完形品である。側辺は、先端に向かって直線状である。

11は、基部に深い介入(凹基無茎族)を持つ片脚破損品である。側辺2ヶ所に張り出しを持っている。先端部は、剥離調整によって鋭く加工してある。



第8図 石器実測図(1)

2) 石斧

12は、基端部が破損した扁平磨製石斧である。全体的に丁寧な研磨が施されている。刃は、数ヶ所鈍く摩滅しており形態は、円陣で両凸刃である。風化のため研磨による擦痕は明瞭には観察することが出来ない。

3) 磨石

14は、磨石の破損品である。両面磨られており側面は全周にわたり敲打による敲打痕が残されている。したがって、磨石と敲石の用途を兼ねたものである。

4) 敲石

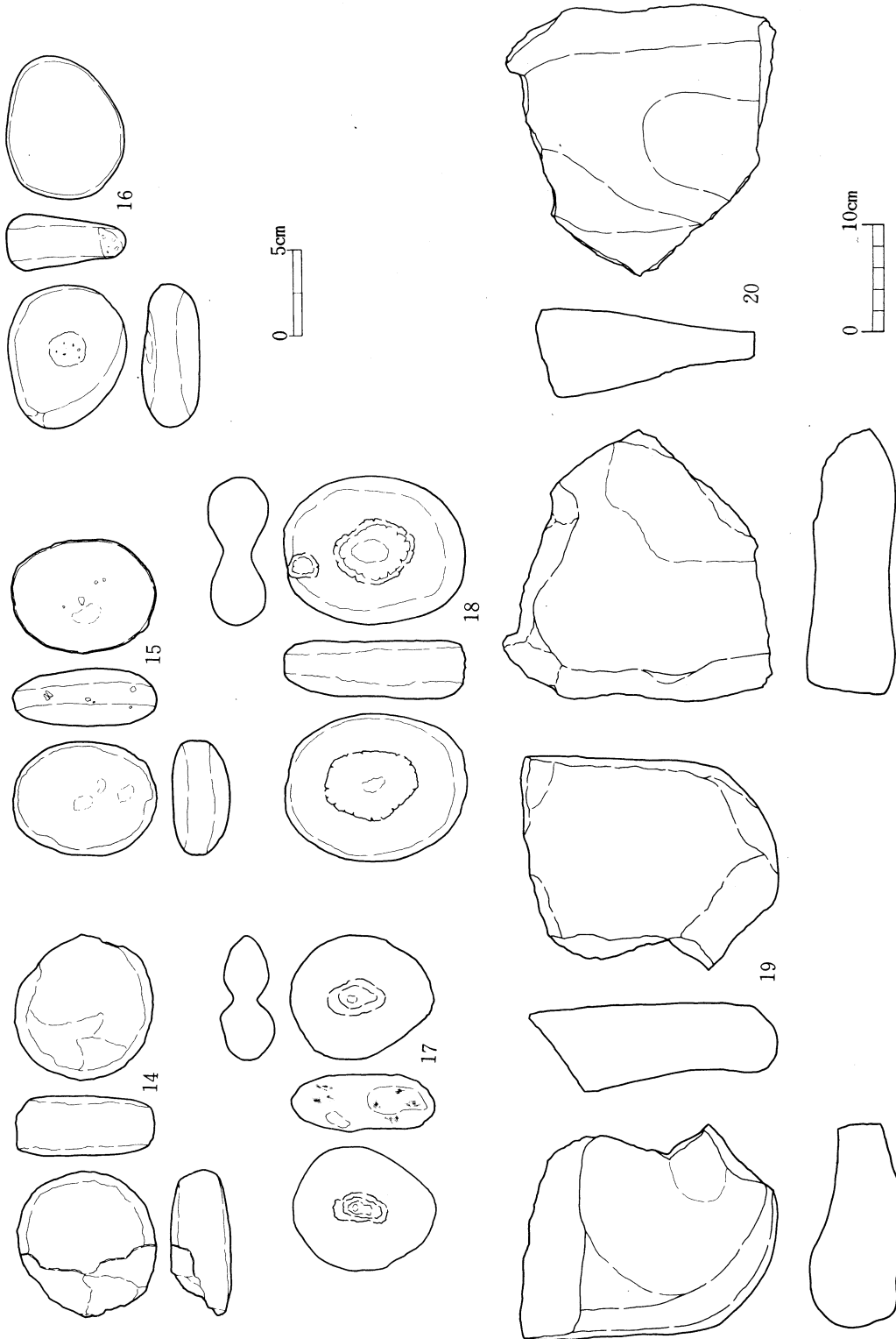
15は、側面全周にわたり敲打痕が観察出来る。表裏両面には磨痕がわずかではあるが観察出来る。

16は、側面全周にわたり敲打痕が観察出来る。特に下端部は、集中して使われていたようである。また、表面中央部にも敲打痕が観察出来る。

5) 凹石

17は、敲打による凹みが両面に観察出来る。側面には、磨面が形成されており擦痕も観察出来る。この凹石の機能としては、下石として、磨石、敲石と3つの機能を持ちあわしていると考えられる。

18は、敲打による凹みが両面に観察出来る。側面には、全周にわたり敲打痕が観察出来る。



第9图 石器实测图(2)

第1表 石器一覧表

番号	器種	出土区	層	石材	重量(g)	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)
200	磨製石鏃	B 10	表	千枚岩	2.68	3.7	2.2	0.4
201	〃 半成品	表 採	/	〃	34.38	8.5	4.5	0.7
202	〃 〃	〃	/	〃	25.43	6.3	3.9	0.7
203	〃 〃	B 9	表	〃	7.93	5.5	3.5	0.3
204	砥石	B 6	〃	砂岩		(4.3)	(4.7)	0.6
205	〃	C 19	〃	〃		(6.3)	(4.7)	0.6
206	〃	表 採	/	〃		(10.1)	7.2	4.5
207	〃	B 10	表	〃		(5.7)	5.3	1.1
208	〃	B 6	〃	〃		22.6	6.5	3.3

特に上端と下端には、敲打痕の集中部が見られる。この凹石の機能は、凹石、敲石の2つの機能を持ちあわせていると考えられる。

6) 石皿

19は、破損品のため形態は不明である。縁辺部を作りだし、皿部が小さくまとまっている。裏面右上隅に、脚と思われる高まりが見られる。

20は、両面に皿部が形成されている石皿である。表面は、扁平であり縁片部がさほど形成されていない。皿部は一面敲打されており、たんに磨られるばかりでなく〔敲击〕・〔押し潰〕された形跡も見られる。一方、裏面は縁片部が形成され皿部が丹念に研磨されており、細粉具としての石皿と推定出来る。

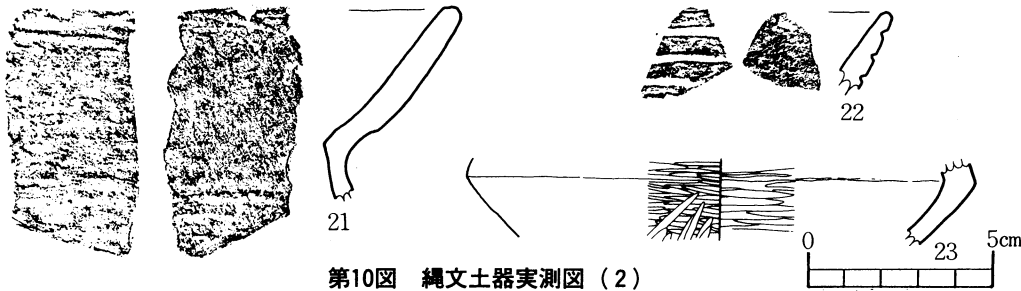
7) その他の石器

13は、形態状は磨製石斧の刃面かあるいはスクレイパーとも推定されるが破損のため形態はまったく不明である。側縁は、鋭利に剥離され一部に使用痕らしきものがある。

第4節 縄文晩期該当土器

縄文晩期該当の土器は、深鉢および浅鉢がそれぞれ2個体出土した。これらはすべて南九州縄文晩期前半に位置づけられている入佐式土器に比定できる。

21は頸部が「く」の字に大きく外反する深鉢の口縁部片である。屈曲部内面には明瞭な稜が残っている。器厚はその屈曲部から口唇部にかけて次第に肥厚してある。なお、口縁部外面に



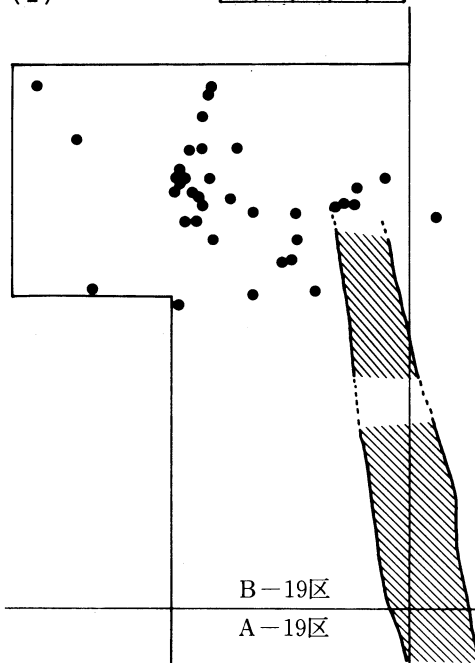
第10図 縄文土器実測図(2)

文様は見られない。内外面共に丁寧なナデ調整で、焼成も良好である。Y-9区より出土した。

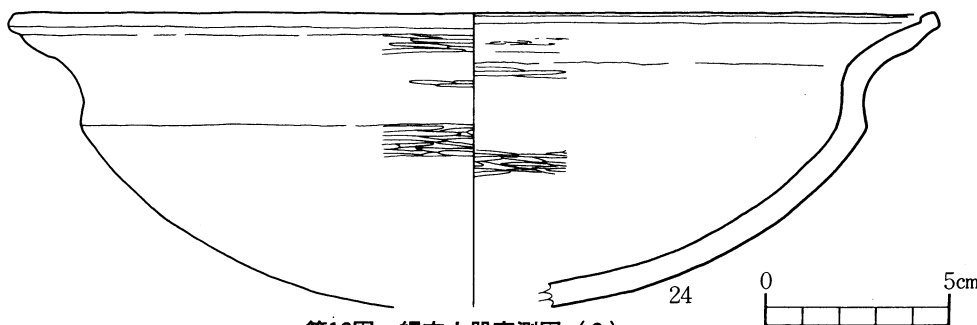
22も深鉢の口縁部片である。小片のために詳細は不明であるが、外面に先端の鋭利な施文具による三本の沈線がみられる。内外面とも丁寧なナデ調整で焼成は良好である。B-6区表層より出土した。

23は浅鉢の胴部片である。大きく「く」の字に屈曲し、外面に明瞭な稜が見られる。小片のため推定であるが、胴部最大径は13.8cmを測る。内外面共に丁寧なヘラによる横位のミガキがみられる。A-7区出土。

24は本遺跡出土の晩期土器のうち、唯一図面上で完形近くに復元できたもので、口径25.4cmを測る浅鉢である。これは第11図のようにB-19区で集中出土したもので、内外面共に丁寧なヘラミガキが見られ、色調は明褐色を呈している。



第11図 縄文土器出土分布図



第12図 縄文土器実測図(3)

第 Ⅲ 章 弥生時代の調査

第 1 節 調査の概要

中ノ丸遺跡においては、弥生時代の遺構・遺物が中心に出土した。特に弥生土器は、A 4 区～B 4 区の傾斜地に多量出土し、次に竪穴住居址 1 号の検出された B 9 区付近に多く、続いて B 14 区付近や Y 9 区付近に集中する。このまだらに集中して出土する状況は、この中ノ丸遺跡の所在する平坦な台地は後年の削平に因るもので、遺跡は比較的凹地部分に残存していることが窺えられる。

中ノ丸遺跡では、A B 4 区～A B 17 区までの間のわずか 12m 幅の用地内に竪穴住居址 4 基、掘立柱建物 1 棟、円形周溝 2 基、土壇 5 基などが検出され、弥生集落の一端を知る貴重な資料が得られた。

第 2 節 遺 構

弥生時代の遺構は、A 5 区～A B 12 区と取り付け道路部分の Y 9 区にかけて検出された。そのなかに、竪穴住居址 4 基、掘立柱建物 1 棟、円形周溝 2 基、土壇 5 基が検出された。

1 竪穴住居址

竪穴住居址は、A B 5 区～A B 10 区間に 4 基検出された。発掘調査対象区の用地幅が 12m と狭いため全形を知る住居址は 1 号のみであるが、断片的に検出された住居址を併せ考えると、この周辺にはかなりの住居址が存在することが想定される。

1) 住居址 1 号

住居址 1 号は、B 9 区に位置し全形が検出された唯一の竪穴住居址である。住居址の発掘調査の結果、住居址の内部構造は次のようである。

〔住居址のプランと規模〕 基本的には南北方向 4.40～4.80m × 東西方向 5.10～5.40m の方形の竪穴住居址で北辺と西辺と南辺の 3 箇所に張出部をつくる。この張出部を含めた住居址の規模は、南北方向 6.10m × 東西方向 5.45m を測る大形住居址に属するものである。竪穴の深さは、削平の少ない北辺で 47cm を測り、削平の大きい東南部辺では約 10cm 程度である。

〔住居址流入埋土の遺物〕 住居址からは、Ⅵ～Ⅷ層のいわゆるアカホヤ火山灰層内に黒褐色土の流入埋土が検出された。流入埋土中から床面にかけては、約 330 点余の遺物が出土している。第 21 図の住居址内遺物出土分布図をみると、住居址の埋土上部が削平されているにも係わらず 26 や 43 は広い範囲での破片の接合するものが多く確認された。埋土中には他の時期の遺物は確認されないところから、住居址の使用・廃棄はほぼ短期間の時期に絞られる。

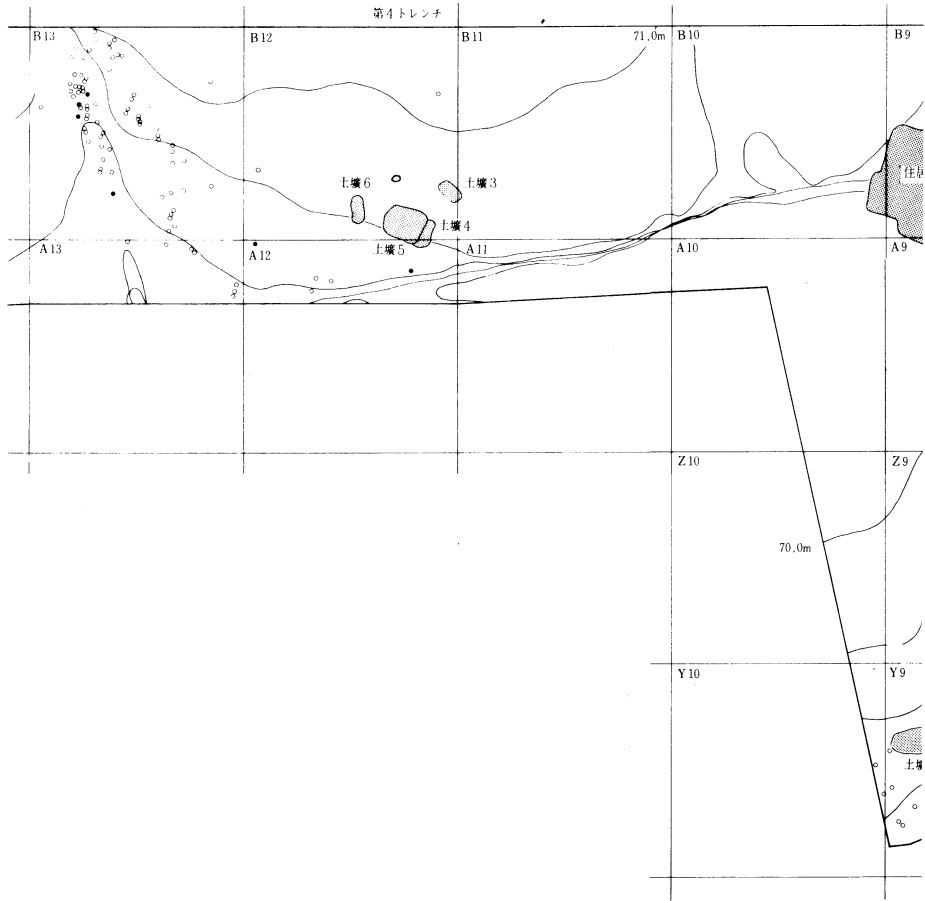
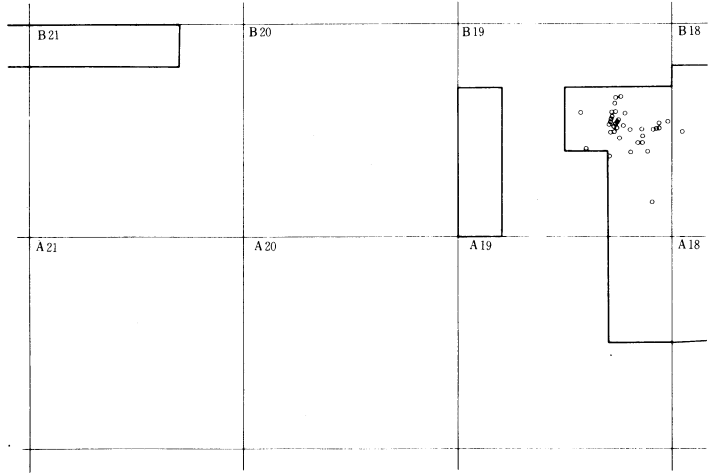
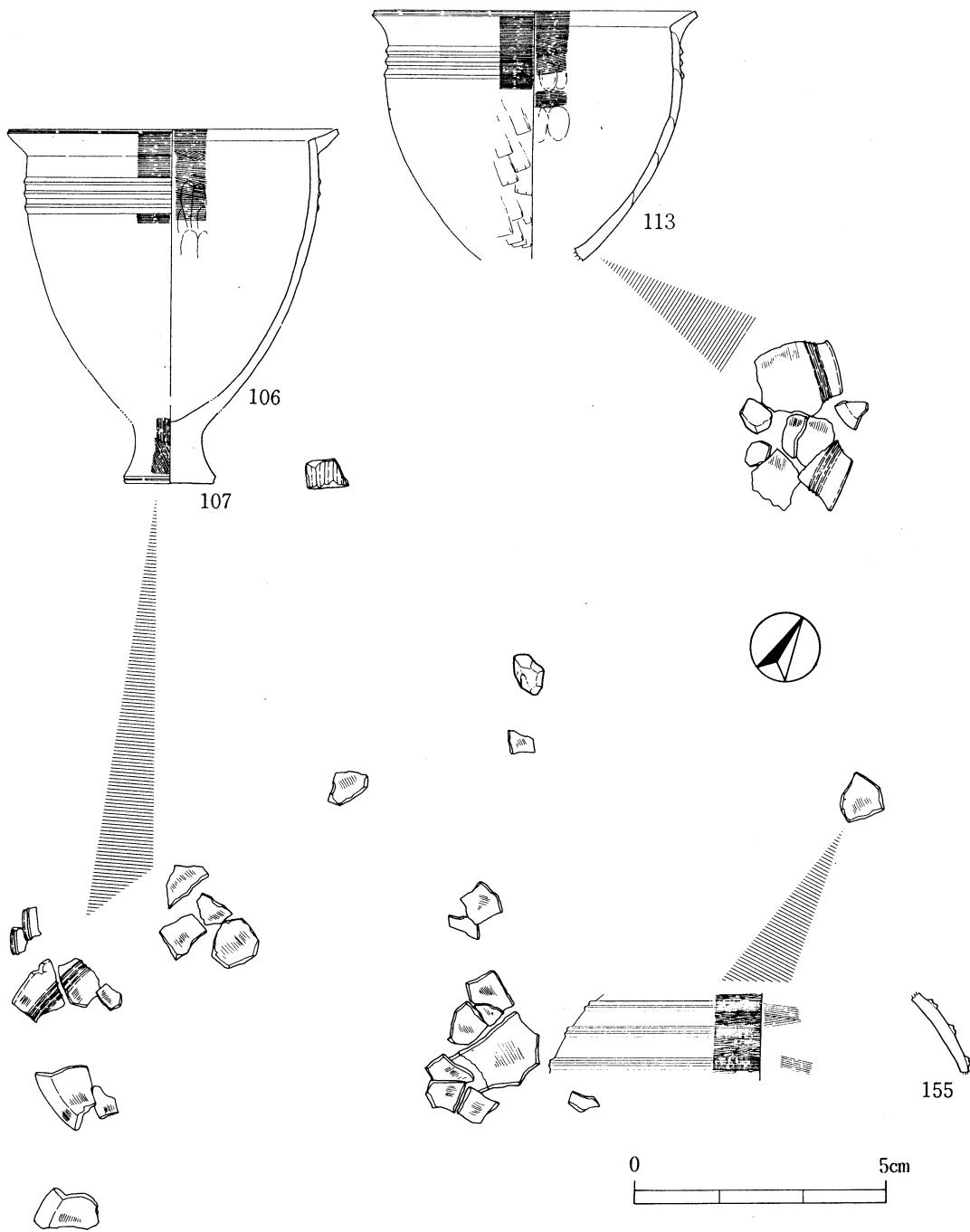




図 弥生時代遺構配置図及び遺物分布図



第14图 弥生土器出土状态图

〔張出部〕 住居址1号は、北辺と西辺と南辺の3箇所に張出部をつくる。

北辺の張出部は住居址の北壁面からは80～95cmの突出がみられるが、住居址内部への張り出し部分を含めた張出部のプランは、東西方向2.28m×南北方向1.35mの隅丸方形を呈する。張出部の床下面は、住居址内部の床面より8～10cm程度高く、いわゆるベッド状を呈している。特に、張出部の北辺の壁は、下方が袋状にえぐられた断面が観察される。張出部の形成上、注目すべき検出である。床面はⅧ層（アカホヤ火山灰層）の堅い部分を利用している。

西辺の張出部は、南壁よりに40～45cmのわずかな張り出しが確認された。床面は、住居址床面とは同じ高さである。張出部には、浅い柱穴が2本（柱5・柱6）配置されている。

南辺の張出部は住居址の南壁面からは60～65cmの突出がみられるが、住居址内部への張り出し部分を含めた張出部のプランは、北東隅は削平されているが東西方向1.70m×南北方向1.05mの隅丸方形を呈する。張出部の床面は、住居址内部の床面より10cm程度高く、いわゆるベッド状を呈している。

〔柱穴〕 床面には、住居址に伴う柱穴が8本検出されている。他に、近世の柱穴2本が住居址の壁面付近に切り合っている。

8本の柱穴のうち、柱1と柱2の2本は、その規模や柱の配置からこの住居址の主柱にあたる。西側の柱1は、径53cm×65cmの掘り方で深さは57cm。東側の柱2は、径53cm×75cmの掘り方で深さ65cmを測る。主柱はいずれも掘り方の底面に柱圧痕が観察され、柱の立て替えが想定される。

柱3～柱8は、いずれも浅い柱穴で添え柱の用途が考えられる。柱3は、径30cmで深さ25cm。柱4は、径26cmで深さ13cm。柱5は、径22cmで深さ6cm。柱6は、径23cmで深さ6cm。柱7は、径30cmで深さ11cm。柱8は、径28cmで深さ19cmを測る。

〔中央ピット〕 中央ピットは、住居址のほぼ中央の主柱にあたる柱1～柱2の南側に検出された。中央ピットは、東西93cm×南北80cmの楕円形のプランを呈し、深さは22cmでボール状に凹まっている。

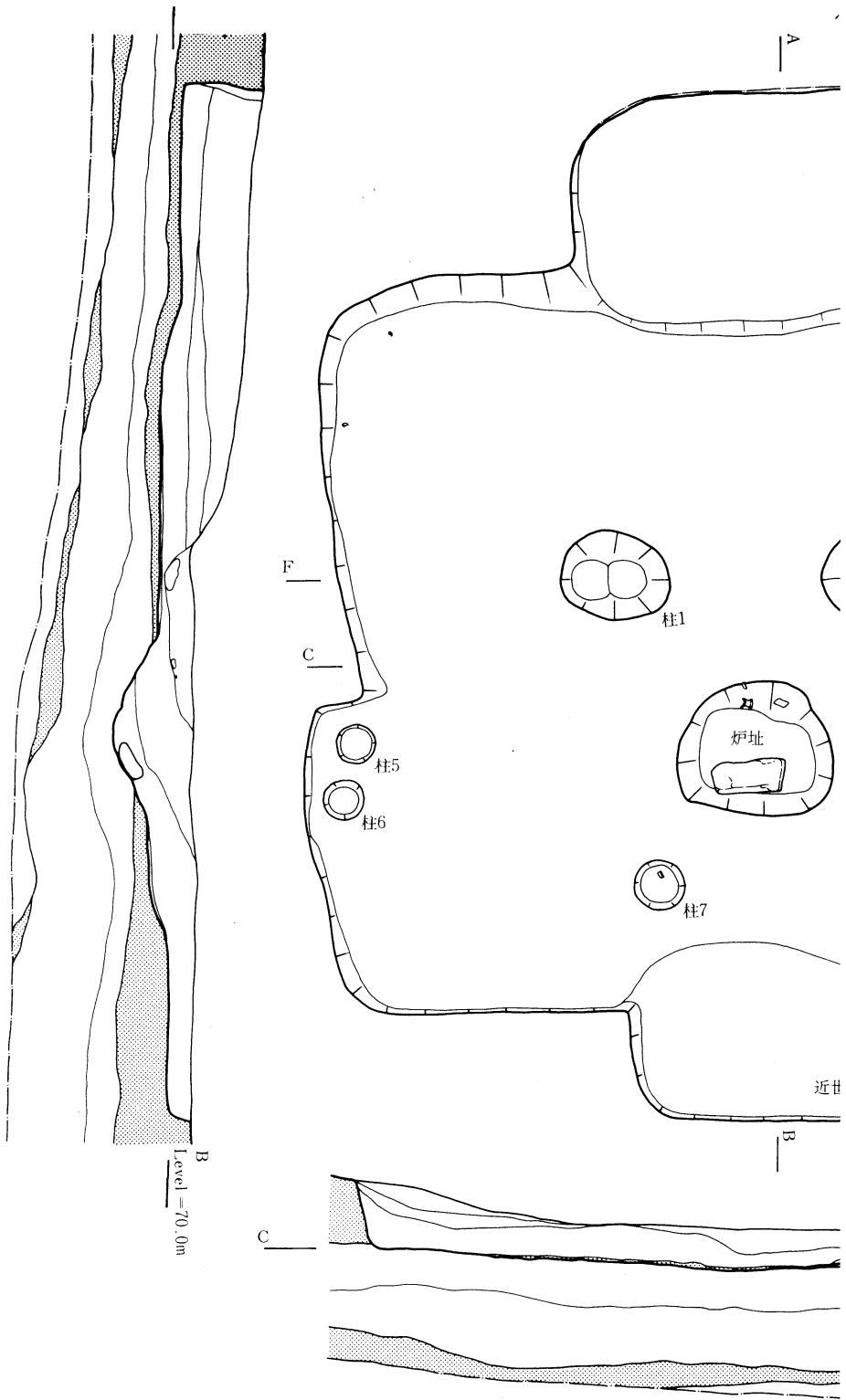
中央ピット内の流入埋土からは遺物等が出土しているが、ピットの下面には焼灰がみられ炉址として利用されたことが考えられる。

中央ピット内の南側には、長さ44cm×幅20cm×厚さ10cmの河原石が出土している。この石材には、加工痕等は認められない。

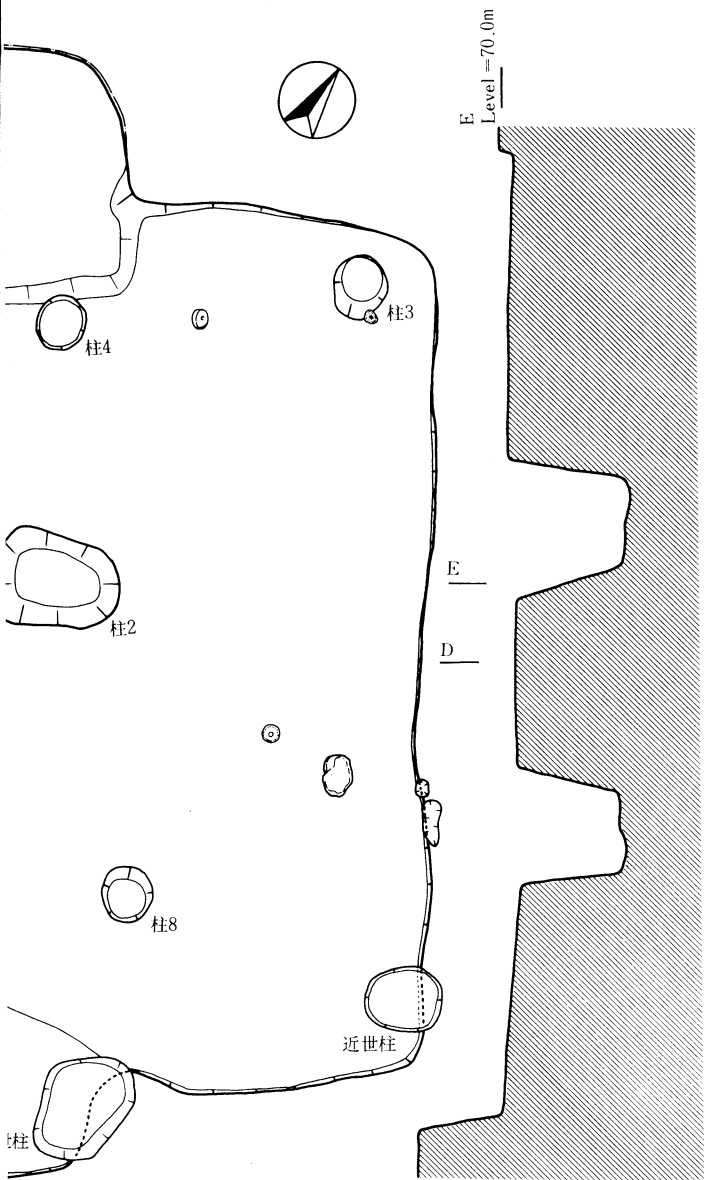
〔出土遺物〕 住居址1号からは、土器のほか石器（特殊石器・叩石）・石器素材・土製加工品（勾玉）・石製加工品（有孔軽石製品）などが出土している。

1) 土器 出土土器は、住居址の流入埋土中を含めて総数330余点出土しているが実測可能なものは25点である。住居址の床面着の土器は、34の甕の底部がある。

25～40は、甕のタイプに属するものである。そのうち、25～33及び37～40は、口縁部～胴部片である。25は、胴部は僅かに張り頸部は内湾して口縁部は「く」字状に外反する。口縁内側には僅かな張り出しを作る。胴部のやや上部に三条の断面三角形の貼付け突帯文を巡らす。



第15図 住居址1



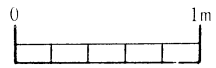
E
Level = 70.0m

E

D

E

D
Level = 70.0m



実測図

土器の法量は、口径25.4cm、器壁厚0.6～0.7cmを測る。器外面の調整は、口縁部下突帯文までが横位の刷毛などで仕上げがみられ、突帯文以下は粗い斜位の刷毛目仕上げがみられる。内面は、口縁部上面が丁寧な刷毛などで仕上げで、それ以下はヘラ削りの後刷毛などで調整が行なわれている。26は、一条の断面三角形の貼付け突帯文を巡らすものである。形態は25に類似するものがあるが、突帯文以下の器外面と胴部内面の調整がヘラなどで仕上げをおこなう。

27～33・37～39は、いずれも類似する口縁部破片である。口縁部断面は、いわゆる「く」字状口縁を呈し、逆「L」字状にはならない。口唇部は、僅かに凹面をもった平坦面をつくる。口縁部内面は稜をつくり、僅かに内側に突き出すのが特徴である。31は1条の突帯文を巡らし、32は1条以上の突帯文が確認される。

34～36は甕形土器の底部である。底部は、いわゆる充実した脚台である。脚台の底面は、原則として平底を呈するが、36のように中央部分が僅かに凹面状にあがるものもみられる。

40は、甕形土器の胴部である。細い脚部から丸みをもって大きく外反する胴部である。

41～43は、壺形土器の頸部から胴部片である。41・42の頸部には、3条以上の突帯文を巡らす。突帯文と突帯文間は、丁寧な刷毛目調整で仕上げられる。その上下はヘラミガキ整形で精緻な仕上げである。43は、胴部片で3条以上の突帯文を巡らすタイプである。

44～49は、壺形土器の平底の底部である。44・45は底部付近で、底部から大きく胴部へ外反する。外面は丁寧なヘラミガキ整形で仕上げられ、内面はヘラ削りの手法がみられる。46～49は、平底の底部片である。細片のため形態は不明である。

2) 土製品 (勾玉) (第20図-50～51)

住居址1号の西側壁面の床面近くから、土製品(勾玉)が2個出土している。勾玉は、小型のほぼ同じ形態のものである。いずれも尾部は僅かに欠損するが、ほぼ完形品に近い。形態は、いずれも頭部は誇張したように大きく丸くつくり、体部から尾部へは急に細くなる。

50は、現存長は2.70cmを測り、頭部直径は1.30cmを測る。重さは3.1gである。尾部の曲がる方の頭部側面には、細く薄い沈線を10本描き丁字頭をつくる。頭部中央には、片方から鋭利な施文具で穿孔が施される。突き入れ側は丁寧な円孔をつくるが、突き出側は若干膨らみ比較的雑な仕上げである。器面は、丁寧なナデ整形で仕上げられている。器面には赤色顔料が塗装され、色調は赤褐色を呈する。胎土には長石等の砂粒を多く含み、焼成は良好である。

51は、現存長は2.30cmを測り、頭部直径は1.20cmを測る。重さは2.3gである。頭部には、6本の細線を描き丁字頭をつくる。50と同様に片方から穿孔されている。形態も、51とほぼ同様である。

4) 石器 I (特殊石器) (第20図-52)

中央が膨らみ両端を鋭角の三角形に磨いた特殊な石器である。全長2.65cm、最大幅0.55cm、最大厚さ0.20cm、重さ 0.4g を測るもので、ほぼ完形品である。図 (52) の上部は断面は比較的厚く、三角形の表裏と側面は丁寧に磨いて仕上げている。下部は比較的薄く、断面三角状に

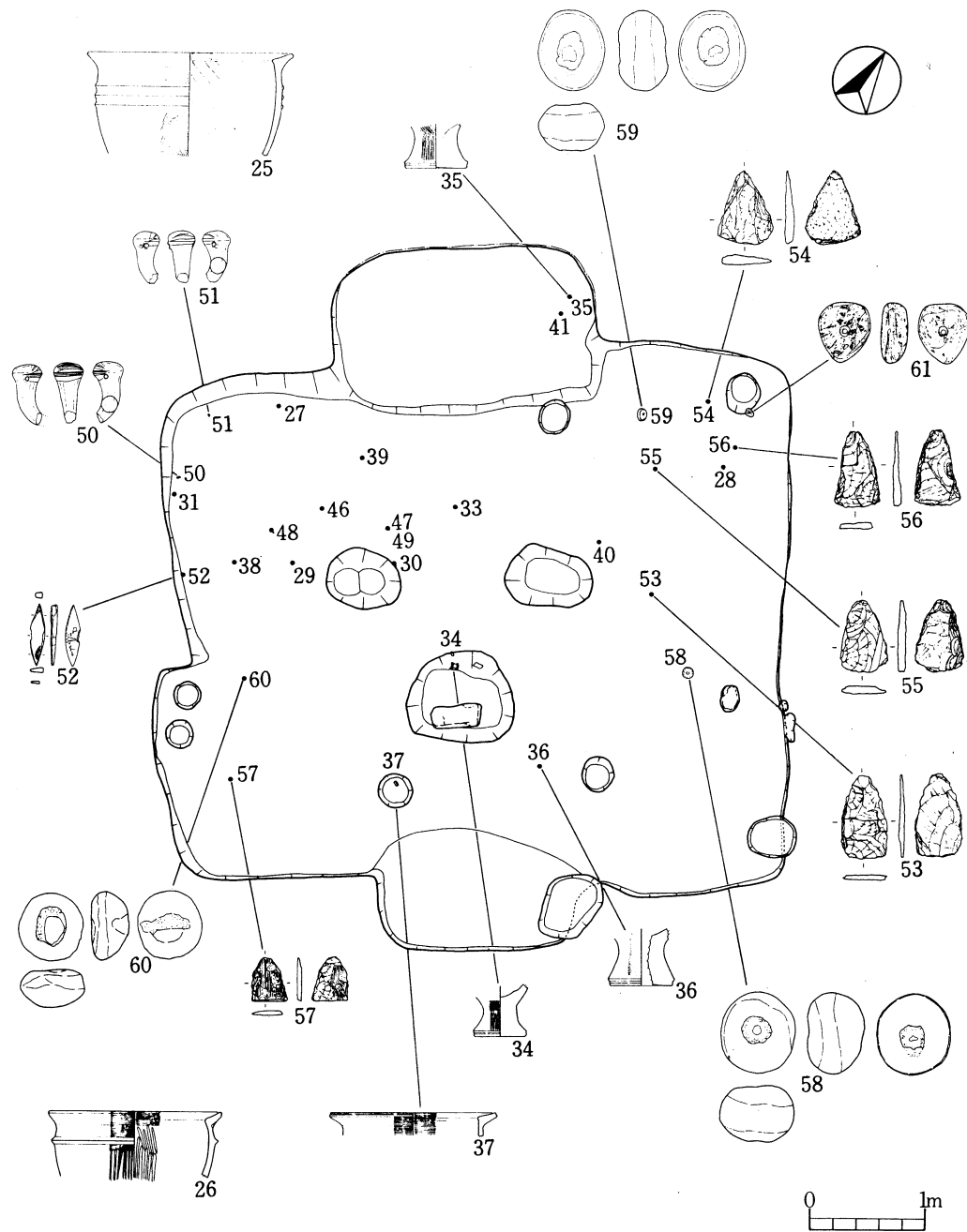


第16図 住居址1号内の遺物分布図(1)

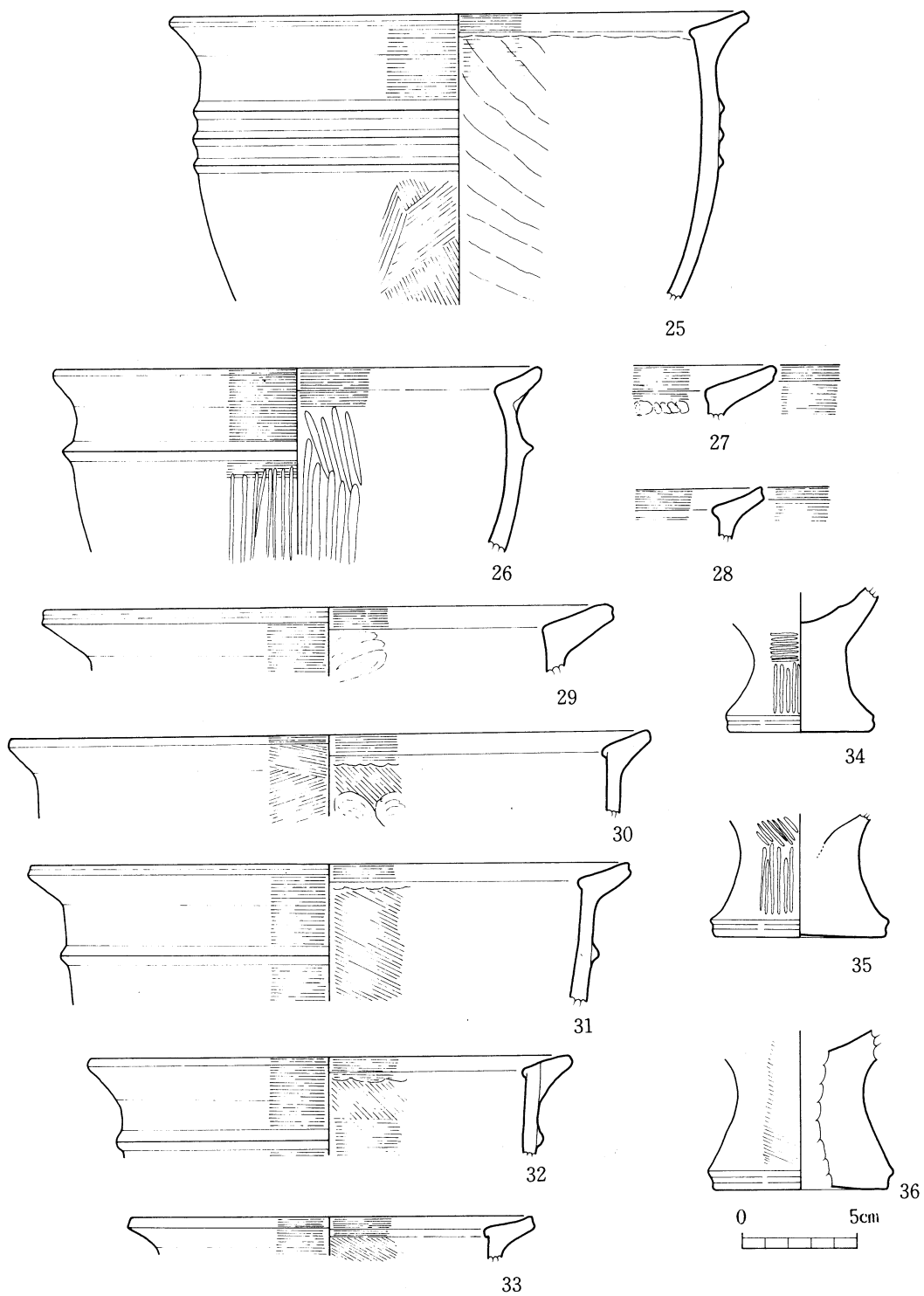
磨いて仕上げている。石材は千枚岩である。

5) 石器Ⅱ (素材) (第21図-53~57)

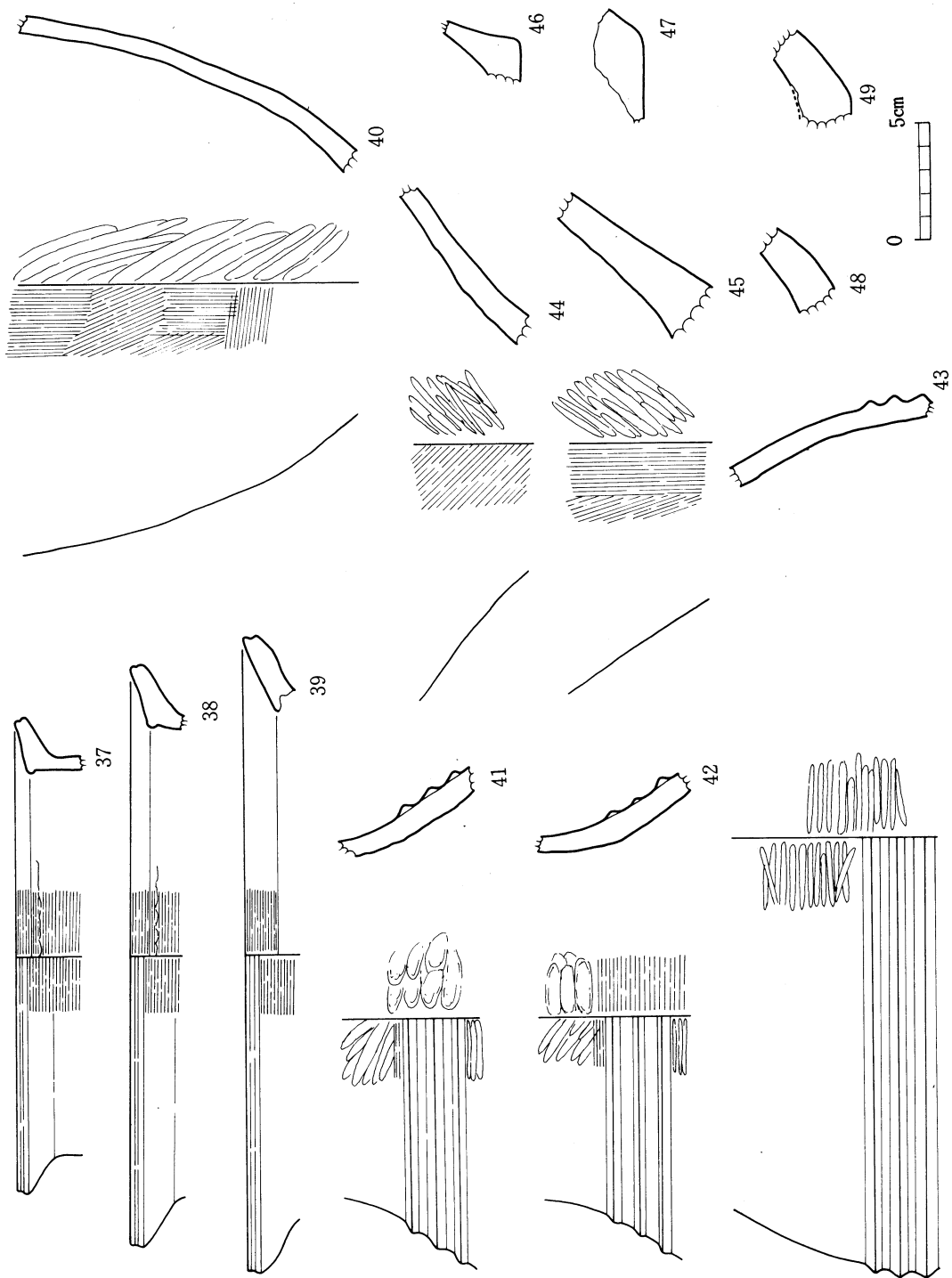
住居址1号からは、磨製石鏃を製作するための素材と考えられる石片が5点出土している。いずれも石材は千枚岩である。



第17図 住居址1号内の遺物分布図 (2)

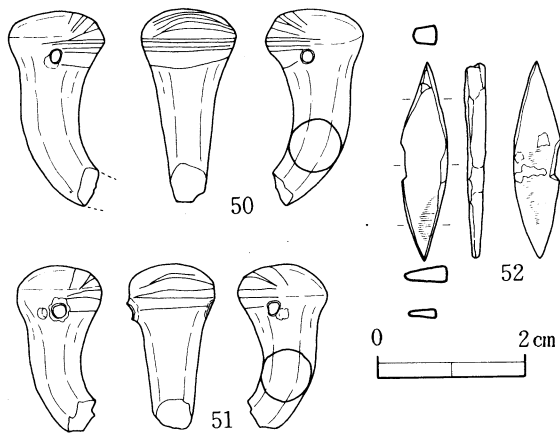


第18图 住居址1号出土遺物実測図(1)



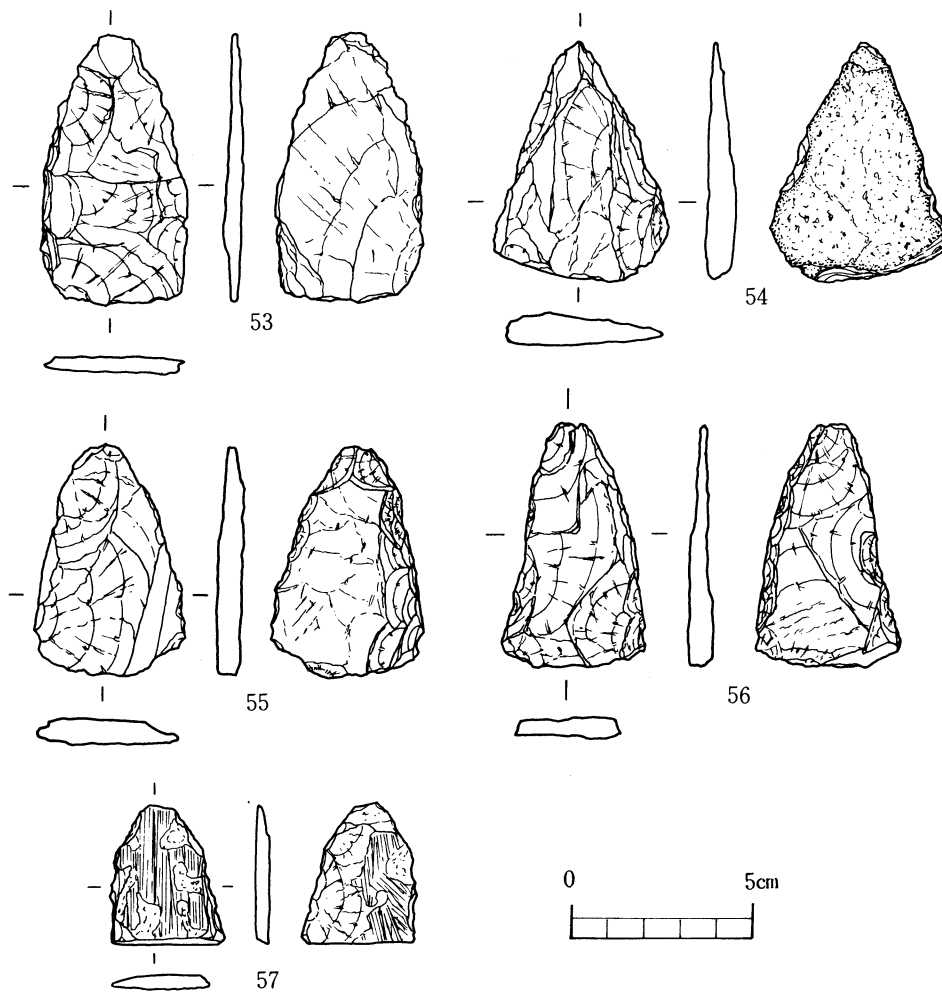
第19图 住居址1号出土遗物实测图(2)

53～56の4点は素材をほぼ三角形の形状に整形剥離している。ただしまだ研磨は施されない段階である。53は、最大長7.3cm、最大幅4cm、厚さ0.5cm、重さ19gを測る。54は、最大長6.6cm、最大幅4.8cm、厚さ0.8cm、重さ24gを測る。55は、最大長6.4cm、最大幅4.2cm、厚さ0.6cm、重さ20gを測る。56は、最大長6.7cm、最大幅4.0cm、厚さ0.6cm、重さ21gを測る。



第20図 住居址1号出土遺物実測図(3)

57は三角形に整形剥離した後、表裏に



第21図 住居址1号出土遺物実測図(4)

研磨を施す段階のものである。最大長3.8cm、最大幅3.1cm、厚さ0.3cm、重さ6.2g を測る。磨製石鏃の製作過程を知る貴重な資料である。

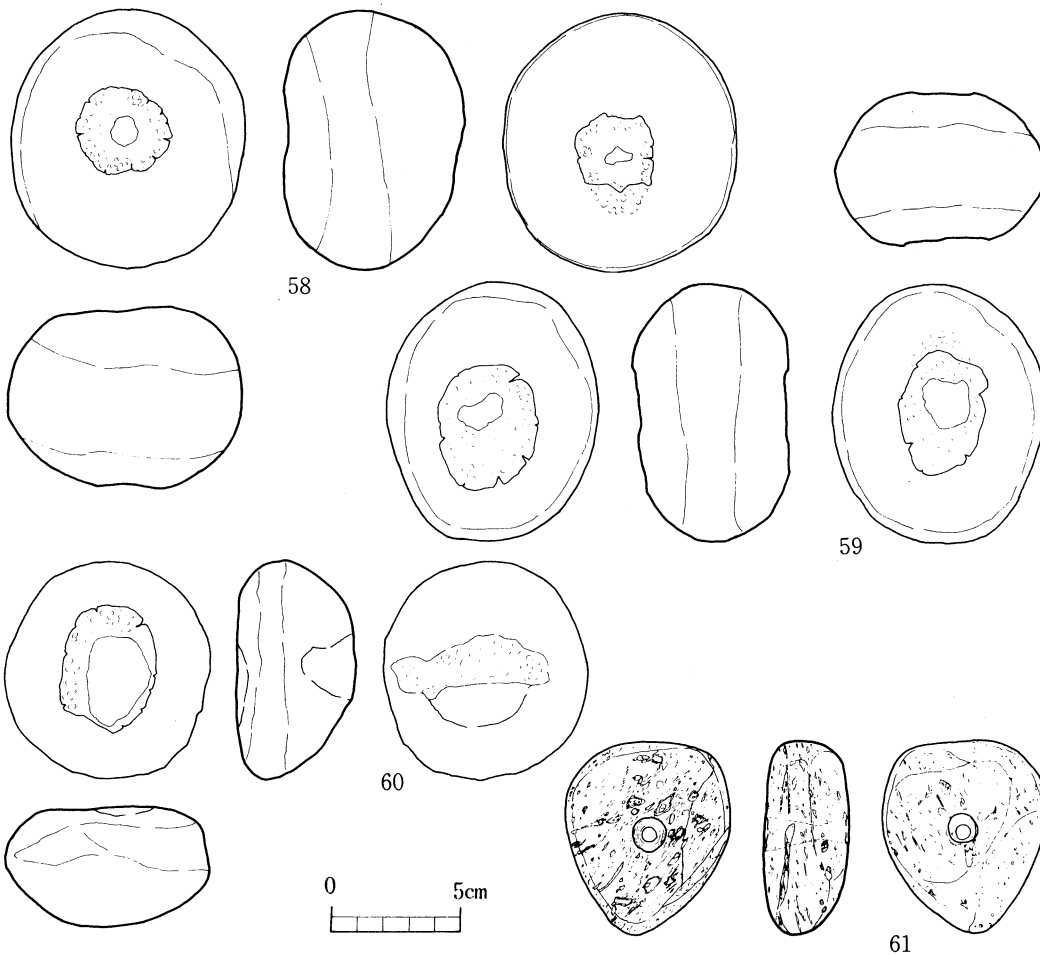
5) 石器Ⅲ (凹石) (第22図-58~60)

いずれも円礫を利用した凹石が3点出土している。いずれも敲打のために生じたと思える凹みである。

58は、長径10cm、短径 9.3cm、厚さ 6.9cm、重さ 900g を測る。石材は安山岩である。表面の中央付近には少し深い凹みが存在し、裏面には浅い凹みが確認される。

59は、長径10.1cm、短径 8.2cm、厚さ 6 cm、重さ 695g を測る。石材は安山岩である。表裏とも中央付近に浅い凹みが確認される。また、側片の上下は敲打に使用された痕跡を残す。

60は、長径 8.5 cm、短径 8.1cm、厚さ 4.7cm、重さ 475g を測る。石材は安山岩である。表



第22図 住居址1号出土遺物実測図(5)

面は平坦で中央付近に凹みをつくるが、裏面は丸みをもつため凹みはつくられない。しかし僅かに敲打の痕跡はついている。側片にも敲打痕跡を残す。

6) 石器Ⅳ (有孔軽石製品) (第22図-61)

略三角形の軽石の中央に丁寧な穿孔を施した製品である。軽石は、長径7.4cm、短径6.3cm、厚さ3.0cm、重さ32gを測る。穿孔は、まず表面から丁寧に穿ち、後に裏面から補てんして穿孔している。

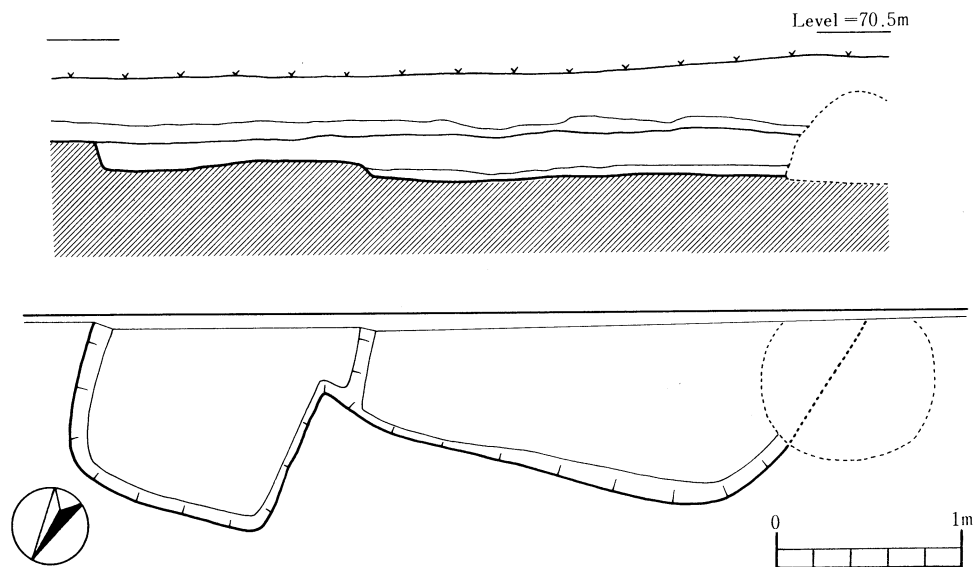
2) 住居址2号 (第23図)

住居址2号はA8区に位置して検出されたが、住居址のプランのほとんどは南側の用地外に拡がっている。住居址は北側の側辺しか検出されていないが、内部構造は次のようである。

〔住居址のプランと規模〕 住居址のほとんどは用地外に位置するため全容は不明であり、さらに2個の芋穴で側辺の一部は破壊されている。住居址は、検出された北側の側辺は略方形プランを呈している。側片は略3.5mを測る。さらに、この北側辺の北東隅には、略1.3m×0.8m程度の方形の張り出し部を付けている。張り出し部の床面は、ベッド状に高く作られている。埋土は、ベッド状の床面の高さまではアカホヤ火山灰がブロック状に混在した茶褐色土層が流入し、それ以下には暗褐色土が堆積している。

住居址はほとんどが削平を受けており、竪穴の深さは浅い。竪穴の深さは、東側の隅のベッド状の床面までが15cmを測り、西側の隅は芋穴で判明しない。また、ベッドは6cm程度の高さである。他の検出面では、張り出し部の北側で11cm、北側の側辺で10cm程度を測るように西側に行くに従って比較的浅くなり削平を受けていることが窺える。検出された床面からは、柱穴などの住居址に伴う付属の遺構は確認されていない。

住居址2号の埋土からは、弥生式土器の細片は出土したが実測可能なものは無かった。



第23図 住居址2号実測図

3) 住居址3号 (第24図)

住居址3号は、A、B-5、6区に位置しており、南側半分は路線外へ延びているため、全体構造は明らかにできなかった。発掘調査の結果、住居址の内部構造は次のとおりである。

〔住居址のプランと規模〕 住居址の全体を発掘できなかったため、その全容は明らかでないが、多角形の中央部のそれぞれの各辺にそって、いわゆるベッド状の張出部を持つものである。この張出部は、間仕切りを持つものも見られる。この張出部を含めた住居址の規模は、調査した部分で最大径約6.80mであり、比較的大型の住居址に属するものである。中央部の各辺は計測可能なもので、約1.90m、2.60mである。張出部の幅は1.10~2.00mで、深さは中央部分で0.55~0.70m、張出部は0.40~0.65mである。

〔住居址流入埋土の遺物〕 住居址はⅧ層のいわゆるアカホヤ層に掘り込まれており、埋土は褐色土あるいは黒褐色土の中に、アカホヤ層の混ざった流入土が検出された。流入土中には約300点余の遺物が出土している。第25図の住居址の遺物の出土分布図を見ると、全体に遺物は分布しており、土器片は広い範囲で接合するものも見られた。

〔張出部〕 住居址3号は、多角形の中央部のそれぞれの各辺にそって、一段高い、いわゆるベッド状の張出部を持つ。西辺及び東辺の張出部は全体を検出していないので、その形状等は明らかでない。検出部分ではそれぞれ長径1.75~1.90m、1.00~1.70mで、短径0.95~1.14m、1.85~1.75mで、中央部との段差は約0.20m、0.07m、深さは約0.40m、0.32mである。西辺の張出部は、北西辺の張出部との間に内側へ突出した間仕切りを持つ。北西辺の張出部は、長径1.90~2.75m、短径1.15~1.35mで、中央部との段差は約0.19mであり、深さは約0.35mである。隣接する北辺の張出部との間に0.07mの段差を持ち、高い。北辺の張出部は長径3.75~2.65m、短径1.20~2.00mで、中央部との段差は約0.12mであり、深さは約0.37mである。隣接する東辺の張出部とは、ほぼ同じ高さであるが、壁面に僅かな突出が見られ、間仕切りの存在したことも考えられる。

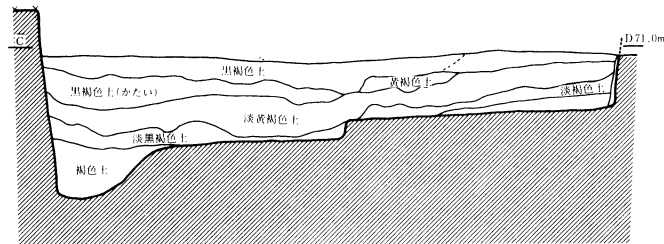
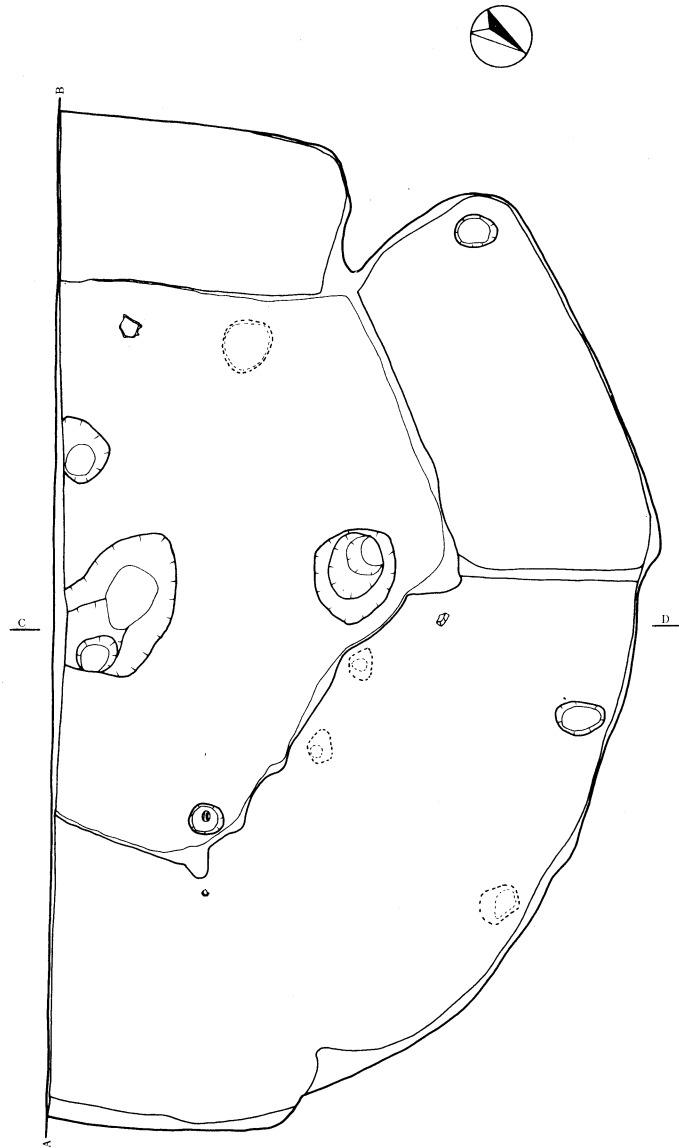
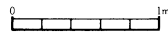
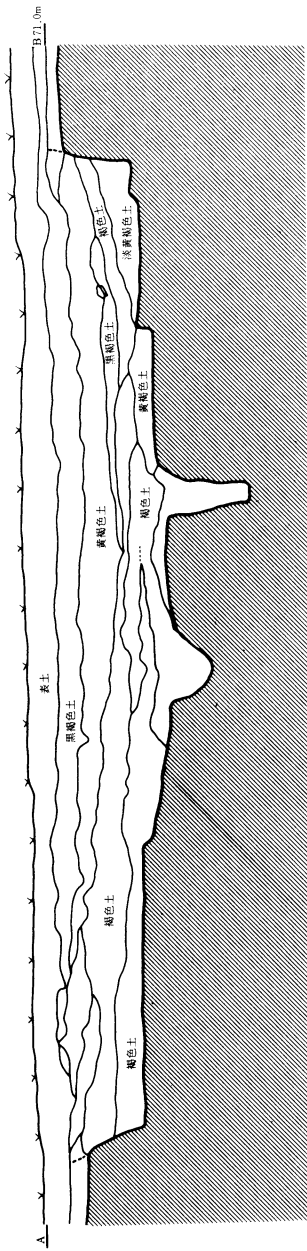
〔柱穴〕 床面には住居址に伴う柱穴が6個検出されており、他に近世の柱穴が4個検出されている。柱1~柱4の4個は多角形の中央部に検出され、柱5、柱6の2個は張出部に検出されている。柱1は1.05×(0.70)mで、深さ0.53m、0.41m。柱2は0.68×0.55mで、深さ0.73m。柱3は0.45×(0.30)mで、深さ0.57m。柱4は0.24×0.21mで、深さ0.44m。柱5は0.33×0.23mで、深さ0.06m。柱6は0.29×0.22mで、深さ0.08mである。

〔出土遺物〕 住居址3号土器片の他に、敲石、石鏃などが出土している。

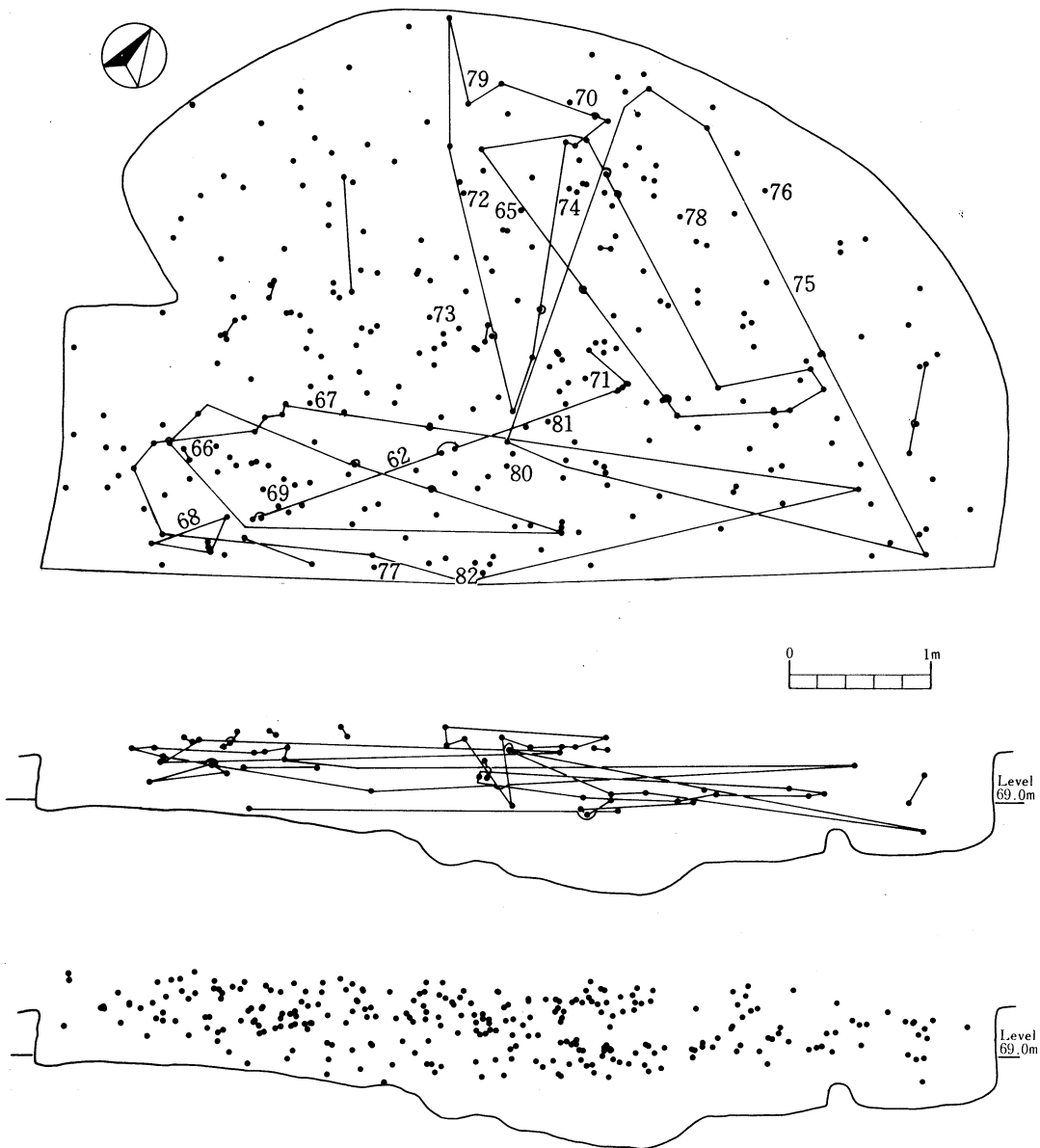
1) 土器 (第27図・第28図72~80)

出土土器は、住居址流入埋土中を含めて総数300余点出土しているが、実測可能なものは19点であった。住居址の床面着の土器には、62の甕形土器がある。

62~75は甕形土器である。62は口縁部から胴部にかけての破片である。胴部が僅かに張り、口縁部は逆「L」字状に外反し、口縁端部は僅かに凹む。口縁部下位に断面台形状突帯を貼り



第24图 住居址3号实测图



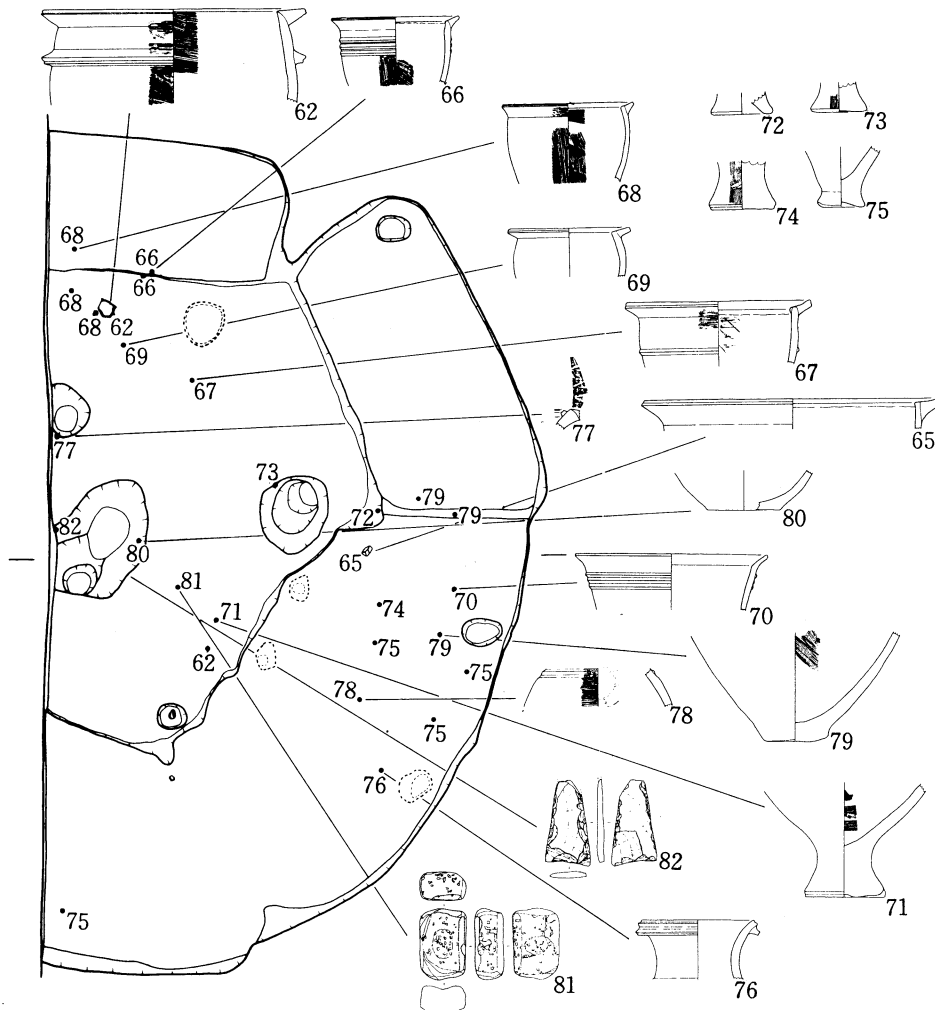
第25図 住居址3号内の遺物分布図(1)

付ける。内外面ともに刷毛目仕上げである。63～65はいずれも逆「L」字状に外反する口縁部である。66～70は口縁部が「く」字状に近く外反し、66～69は口縁端部が僅かに凹む。66は3条、67は1条、70は3条の断面三角形の突帯を貼り付ける。68、69は胴部が張る。71～75は底部で、71、73、74は充実した脚台で71、74は裾部が沈線状に凹む。

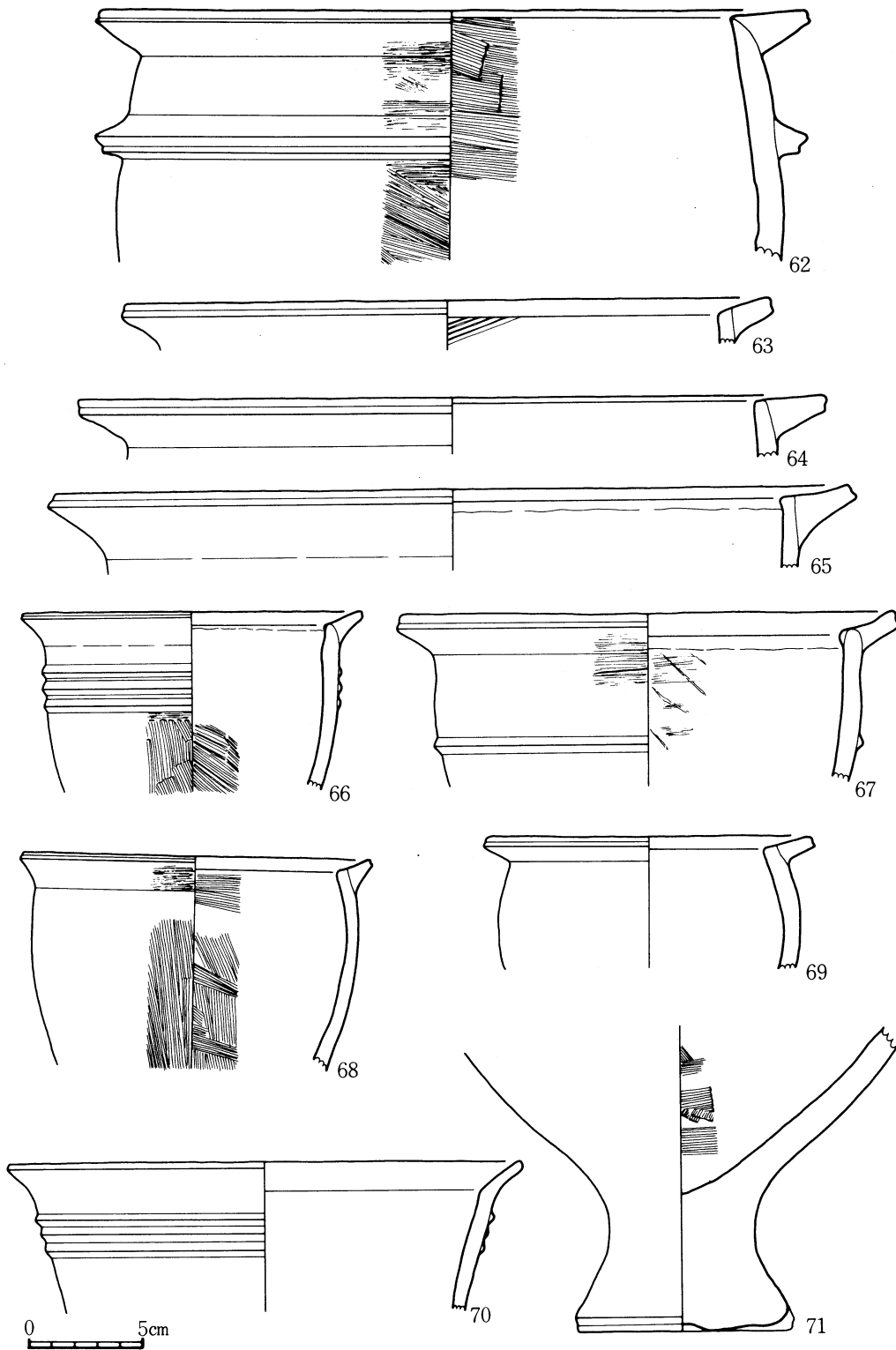
76～80は壺形土器である。76は外反する口縁部の外面に断面が台形の突帯を貼り付ける。77は口縁部内面に断面が台形の突帯を貼り付け、口縁部平坦面に鋸歯状の沈線文を描く。78は肩部の破片で、断面三角形の突帯を貼り付ける。79、80は平底の底部である。

2) 石器 (28図・81・82)

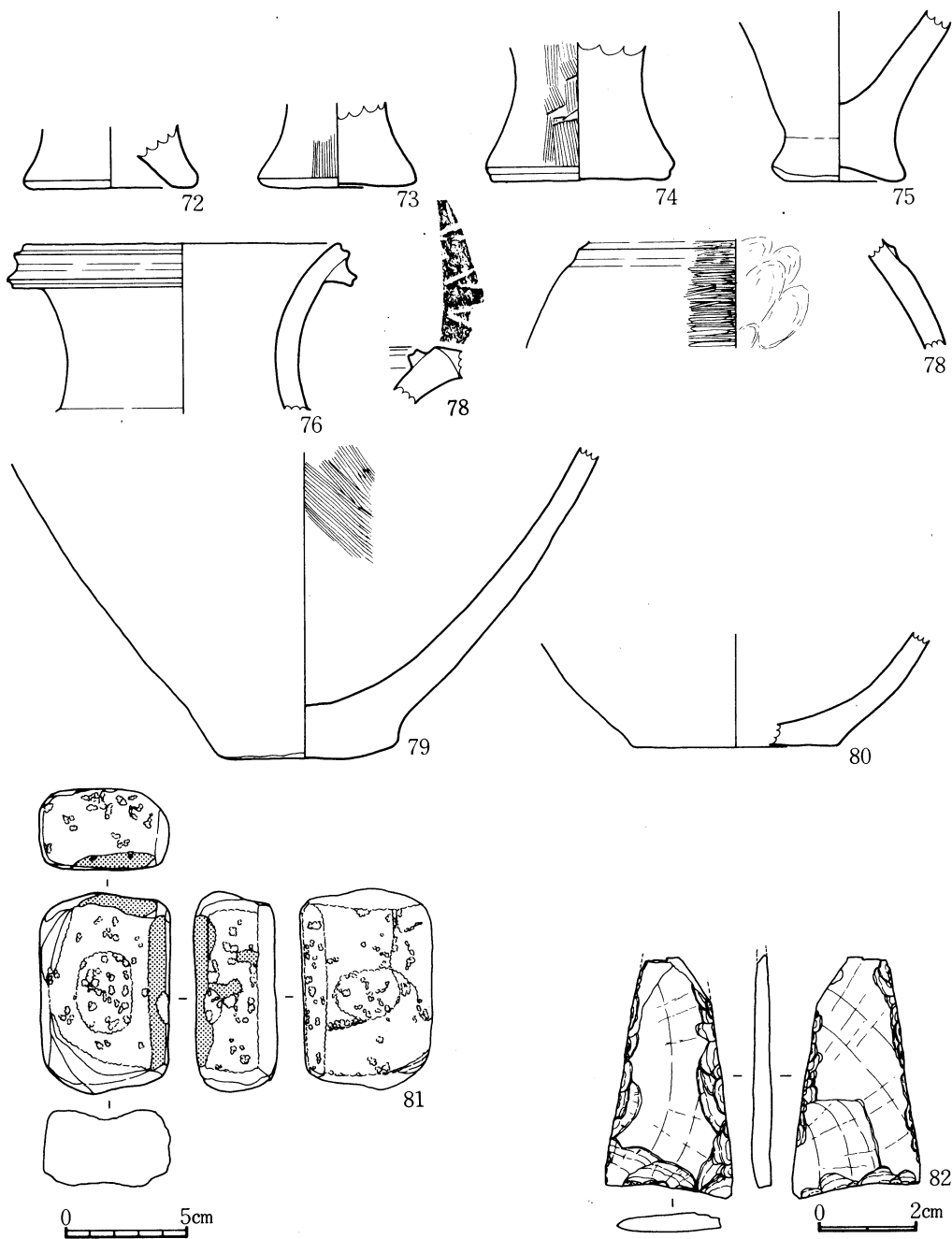
81は砂岩を素材とする敲石で、ほぼ全面に敲打痕がみられ、中央部は両面とも凹んでいる。一部には研磨痕が観察される。82は打製の石鏃である。二等辺三角形状を呈しているが、先端部は欠損しており、基部は僅かに凹む。石材は粘板岩である。



第26図 住居址3号内の遺物分布図(2)



第27图 住居址3号出土遺物実測図(1)



第28图 住居址3号出土遺物実測図(2)

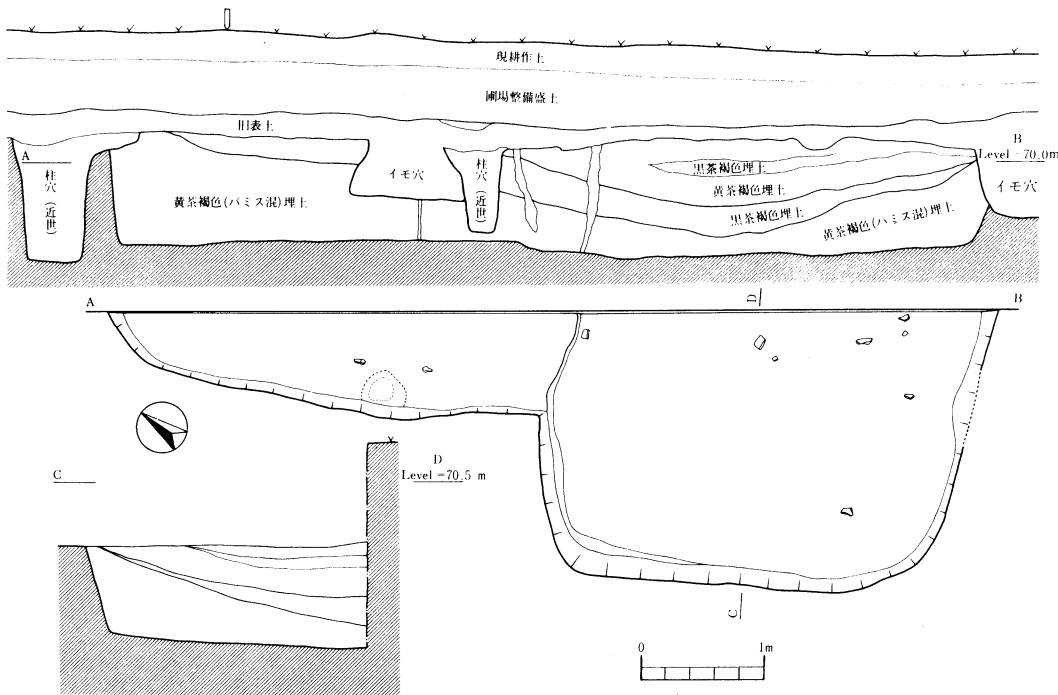
4) 住居址4号

住居址4号はA9区の取付道路部分に検出されたが、住居プランのほとんどは北東の用地外へ広がっている。住居址4号は、住居址1号から南東へ約3m、住居址2号からは南西へ約5～6m離れた位置にあたる。住居址は南西側の側辺しか検出されず全形は不明であるが、検出面での内部構造は次のようである。

〔住居址のプランと規模〕 住居址のほとんどは用地外に位置するため全容は不明である。住居址は、検出された南西側の側辺は略方形プランを呈している。側辺は約3.50mを測る。さらに、この南西側辺の南側隅には、約1.7×0.65m程度の張り出し部を付けている。張り出し部の北側の側辺部の床面は一段高く、ベッド状遺構になることが考えられる。埋土は、床面にはアカホヤ火山灰がブロック状に混在した茶褐色土が流入し、その上には黒茶褐色土とアカホヤ火山灰のブロック混入土が交互に凸レンズ状に堆積している。

住居址の竪穴は深さ45cm程度の比較的深く保存の良好なものであるが、床面にはベッド状の段は確認されるが、柱穴や炉などの施設はみられない。住居址の検出プランは1側辺の一部であり住居址の構造は不明である。

出土遺物は、弥生土器の細片が僅か10点である。図化できるものはないが、胎土や調整から住居址1号及び3号に該当する時期のものと考えられる。



第29図 住居址4号実測図

2 円形周溝

円形周溝遺構は、B 7 区に 2 基検出された。西側を 1 号、東側を 2 号とした。

1) 円形周溝 1 号 (第30図)

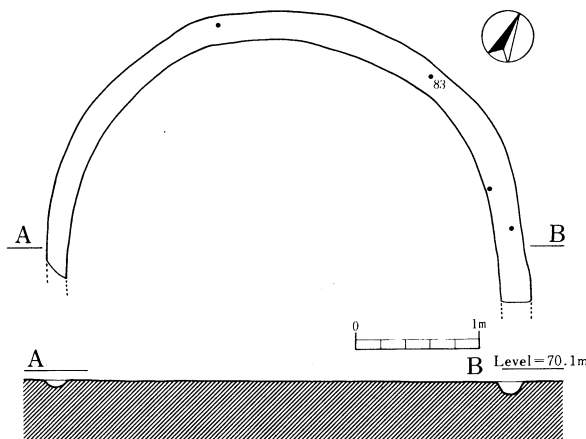
B 7 区の西側に表土直下に検出された。直径3.90mを測る真円の平面形を呈する。周溝の幅は18cm~25cmと狭く、周溝の深さは8cm~12cmと浅くかなりの削平を受けた底面だけの残存である。なお、周溝に取り囲まれた内面には、これに付随する遺構は検出されていない。

周溝の流入埋土は黒褐色土を呈し、その中から4点の遺物が出土している。実測可能なものは第32図83の1点のみで、「く」字状に外反する口縁端部の細片である。

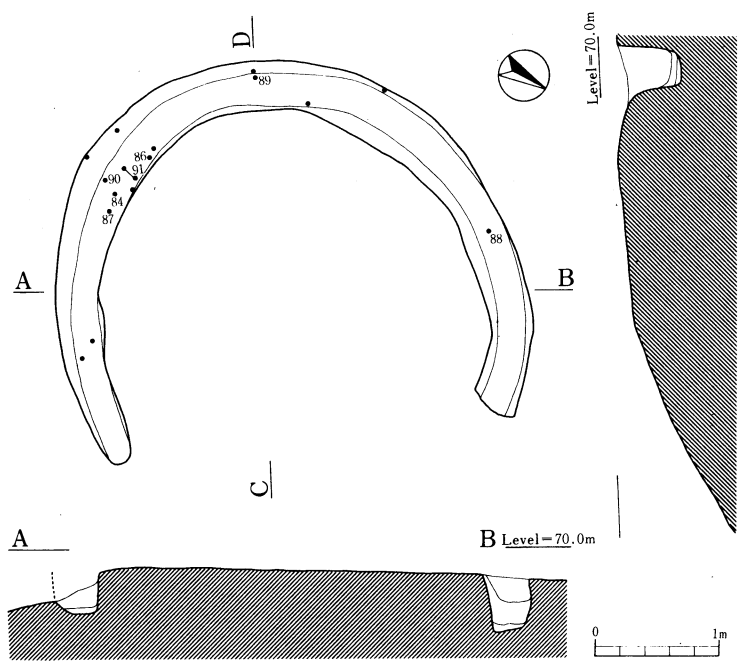
2) 円形周溝 2 号 (第31図)

円形周溝 1 号の東側1.80mのところ隣接して検出された。平面形は真円形を呈し直径は3.80mを測り、1号とほぼ同様の大きさである。東側が後世の攪乱によって消失している。周溝の幅は、最も保存の良い西側で約50cmを測り、また上部が若干削平されている北・南側でも35cm~40cmの比較的保存良好な状態で検出された。周溝の深さは最も安定した西側で約50cmを測り、北・南側でも約40cm~30cmの深さである。周溝の断面は、深いU字状を呈し平坦な底面をつくる。なお、周溝に取り囲まれた内面には、これに付随する遺構は検出されなかった。

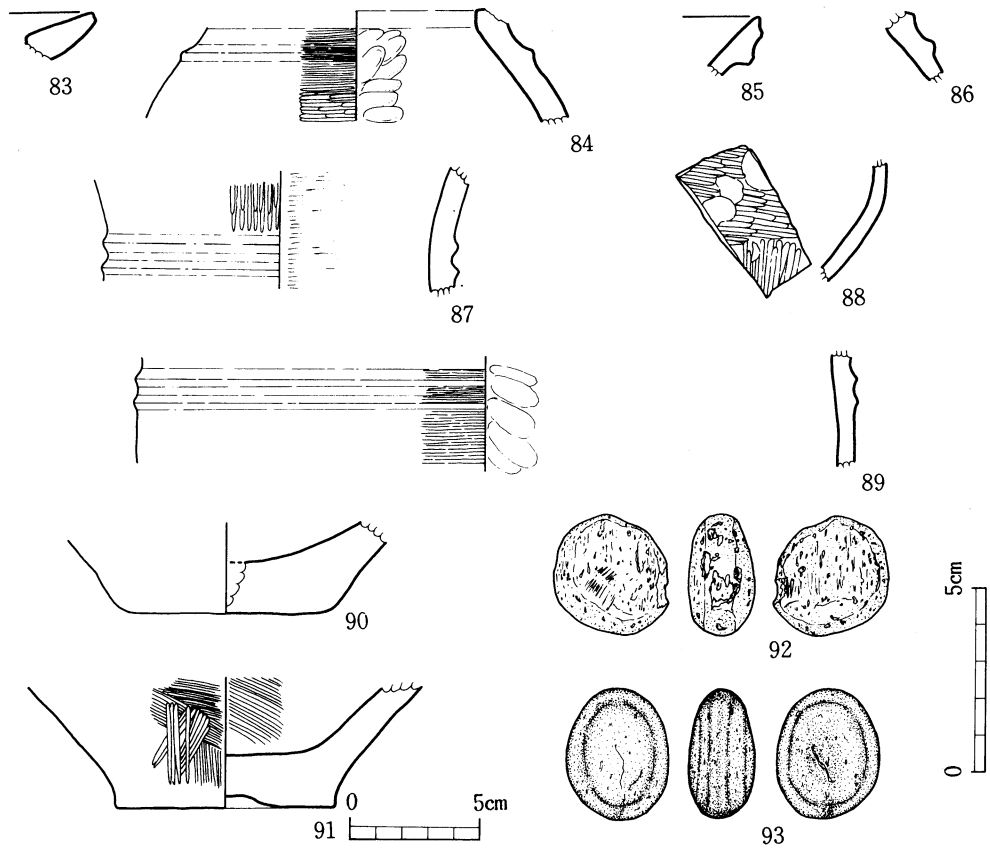
周溝の流入埋土は黒褐色土を呈し、埋土から17点の遺物が出土している。第32図84~93は、円形周溝内の出土遺物である。84は短頸の壺形土器の口縁部である。口縁端部は離落しているが、その下に一条の突帯文を巡らしている。外面は刷毛目調整で、内面はナデ整形で仕上げている。85は壺形土器の口縁端部片で、口縁部外面直下に突帯を巡らしいわゆる二又状口縁をつくる。86と87は壺形土器の肩部から頸部付近の突帯を巡らす破片である。88は精製された胎土の薄手の土器で、胴部下半の破片である。胴部張り部から上部は横方向のヘラナデ整形で仕上げ、下半は縦方向のヘラナデ整形の仕上げが観察される。その上から丹を外器面全体に塗装している。89は突帯を巡らす胴部片である。90と91は壺形土器の底部片である。92は球形に整形された軽石で、93は破岩の球形を呈した河原石である。



第30図 円形周溝 1 号実測図



第31图 円形周溝2号実測図



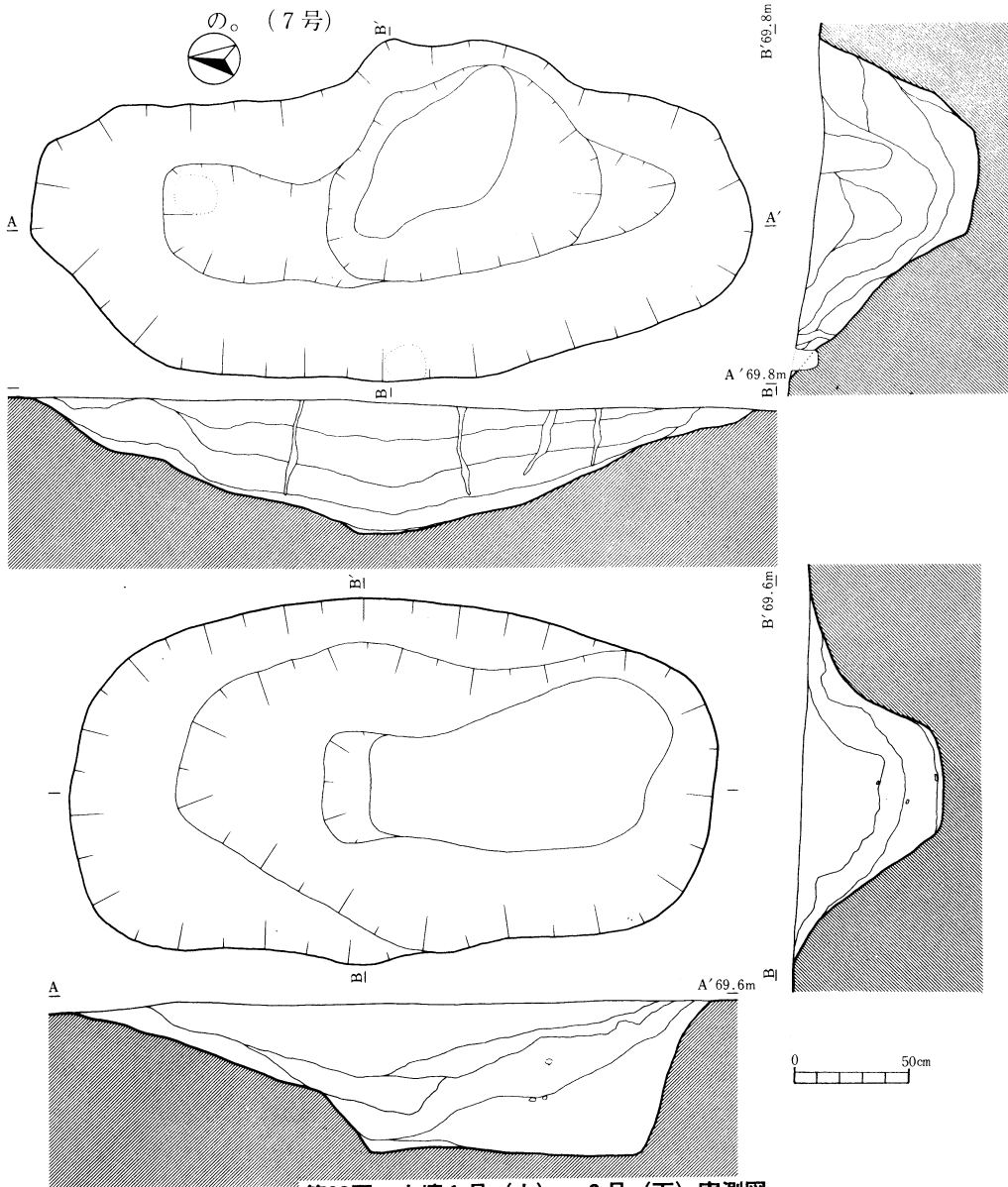
第32图 円形周溝1号・2号出土遺物実測図

土壙

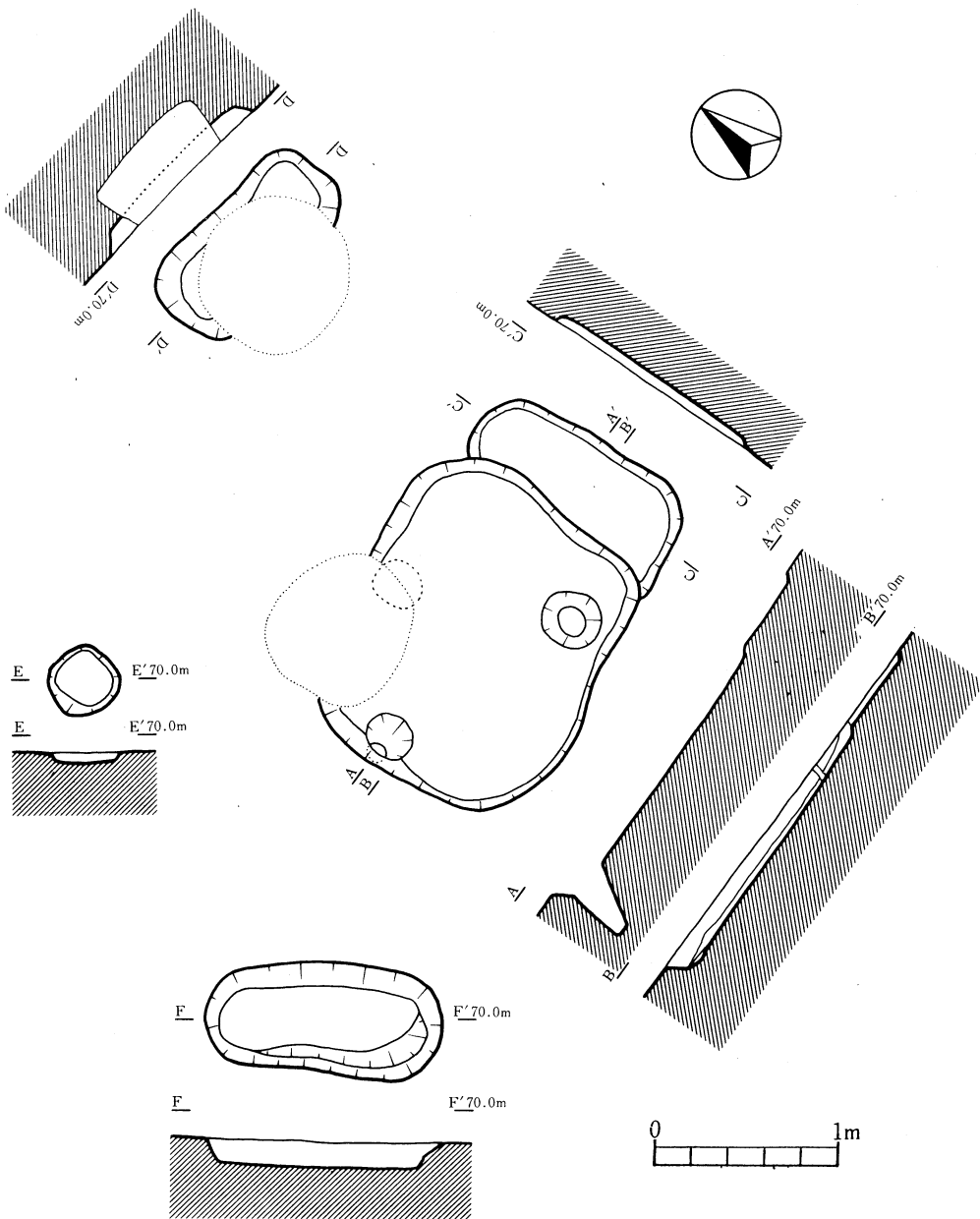
弥生期の土壙は、総数7基検出された。これらは、比較的残存状況の良かった2号土壙を除いて、すべて第Ⅷ層上面で検出されたもので、後世の削平による破壊が激しい。

7基の土壙は、その特徴から次の4つのタイプに分類した。

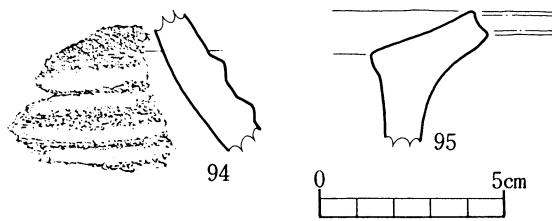
- Aタイプ……平面形が約3×1.5mの隅丸長方形を呈するもの。(1、2号)
- Bタイプ……平面形が一辺約1.5mの隅丸正方形を呈するもの。(3号)
- Cタイプ……平面形が約1.5×0.5mの隅丸長方形を呈するもの。(4～6号)
- Dタイプ……平面形が約60×55+α cm隅丸長方形を呈し、埋土に炭化物、焼土を含むもの。(7号)



第33図 土壙1号(上)・2号(下)実測図
-40-



第34图 土壤3号~6号实测图

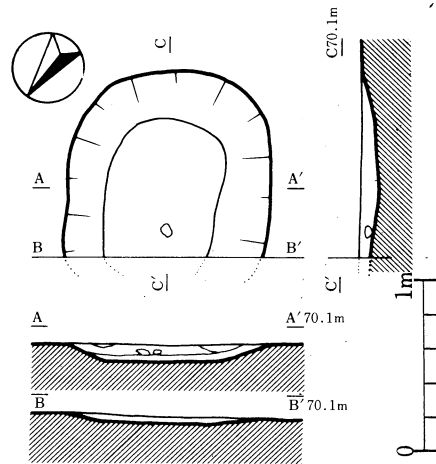


第35图 土壤3号~6号出土遗物

① Aタイプ

このタイプは1、2号の2基検出された。

1号土壌は、B-8で検出されたもので、平面形が最大長3.2m、最大幅1.5mの隅丸長方形を呈し、最深部は検出面から84cmを測る。平面の長軸はほぼ南北の軸に一致している。長軸方向は緩やかな、短軸方向は急な傾斜を呈し、95×50cmの底面をもっている。暗褐色系統の埋土中に遺物は出土しなかった。なお、近世の柱穴状ピットによる破壊部が3か所見られた。



第36図 土壌7号実測図

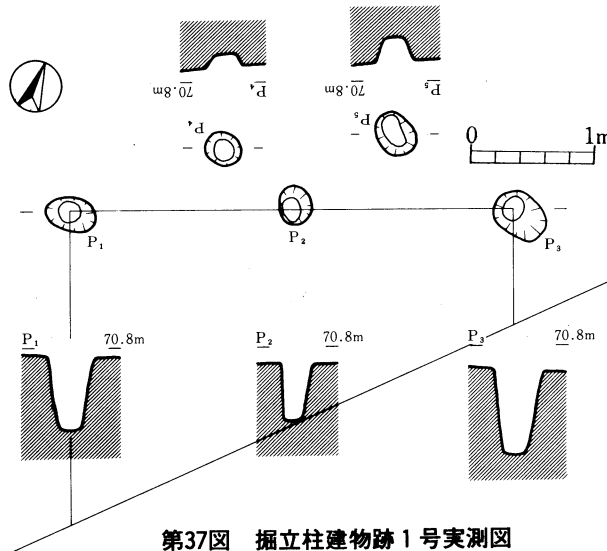
2号土壌は、Y-9、10区の第Ⅷ層上面で検出され

たもので、平面形が最大2.8m、最大幅1.6mの隅丸長方形を呈し、最深部は検出面から70cmを測る。長軸の北東部の緩傾斜に対し、南西部は急傾斜となり、約1.3×0.7mのフラットな略長方形底面をもっている。暗褐色系統の埋土中に、弥生土器と考えられる土器片が1点出土したが、小片のために図化できなかった。

これらAタイプの土壌は、どのような機能をもっていたのか。類似する形態を示すことから同タイプとして取り扱ったものの、はたして同じ機能をもっていたのか。遺物もほとんど検出されていないことから、判断に苦しむが、周囲に竪穴住居跡をはじめとする弥生期の遺構が存在すること、さらにそれらの遺構と埋土が類似していること、また1号土壌のように竪穴住居跡と同様な方位を示していることなどから、弥生期に何らかの目的でつくられた遺構であることにはまちがいないものと考えられる。

② Bタイプ

Bタイプとした土壌は3号土壌が1基である。B-12区の第Ⅵ層中面で検出された。4号土壌および近世の柱状ピット、さらに現代の芋穴と重複しているために本来の形状は不明であるが、平面形はほぼ一辺が約1.5mを測る隅丸正方形であると考えられる。それぞれの辺は、ほぼ東西南北の軸に一致している。埋土の状況より4号土壌を破壊してつくられたと考えられるが、現代の削平が激しいために検出面から底面までが5~10cmと浅く、前後関係の決定的な判断は微妙である。



第37図 掘立柱建物跡1号実測図

また、この土壌に付随するものと考えられる柱状ピットが2か所検出された。P-1は南東隅に位置

し、上面が径36cm、底面が径15cm、深さが19cm、またP-2がそれぞれ径26cm、10cm、深さ33cmを測る。特徴的なのは西端中央部に位置するP-2で、土壌中央部へ約60°傾斜しており、底面は土壌のそれよりも外側に位置している。黒褐色の埋土中より、弥生土器片が3点出土したが、図化できたのは2点のみであった。94は壺の肩部片で、2条の三角突帯が観察できる。95は、甕の口縁部片で、「く」の字状に立ち上がっている。これらは共に山ノ口式土器の特徴を有している。

③ Cタイプ

Cタイプには4～6号土壌が該当する。B-12区の第層中位で検出された。一部が破壊されているものの、平面形がいずれも隅丸長方形を呈するもので、長軸が1.1～1.5m、短軸が60cmを測る。深さは7～17cmといずれも浅い。

④ Dタイプ

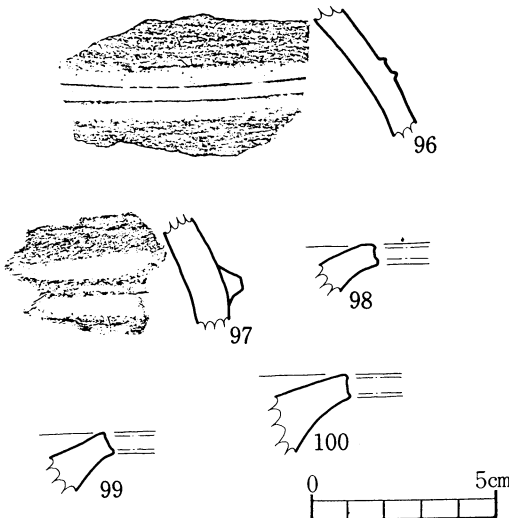
このタイプはB-7区で検出された7号土壌1基のみである。北西部が下層確認トレンチのために破壊されているが、平面形はほぼ隅丸長方形と考えられる。長軸は $55+\alpha$ cm、短軸が60cm、深さが10cmを測る。この土壌の特徴は、埋土中に炭化物および焼土、焼石（1点）を含んでいるということである。第VI層下位で検出されたが、現代の削平が激しい。

掘立柱建物跡

本遺跡では、弥生期のものと考えられる柱穴状の小ピットが14か所検出されたが、建物として位置付けられそうなものはA、B-7区で検出された5個のみで、あとは散在状態であった。第35図に示した柱穴は梁行2間の建物と推定したものであるが桁行については発掘調査区域外にのびるために不明である。P-1～P-2間、P-2～P-3間は共に1.8mを測る。P-1～P-3の径はそれぞれ39cm、32cm、45cm、深さは61cm、47cm、70cmを測る。またそれぞれの柱間の外側に、径29cm、深さ12cmのP-4、径37cm、深さ20cmのP-5を検出したが、建物に付随するものかどうかは不明である。本遺構が建物であるか否かは、本弥生集落の性格を知る上で大きな問題

であるが、ほぼ同時期と考えられる鹿屋市王子遺跡、前畑遺跡、国分市上ノ原遺跡等の集落構成を考慮すれば、本遺構も掘立柱建物跡である可能性が高い。

第38図は、散在する柱穴状小ピットの埋土中より出土したものである。96はB-4区P-1から出土したもので、壺の肩部片で1上の口唇状突帯が見られる。97と98はA-7区P-2から出土したもので、それぞれ壺の肩部、甕の口縁部片である。99と100の甕の口縁部片はそれぞれA-7区P-3、B-7P-4から出土した。以上5点は山ノ口式土器と考えられる。



第38図 柱穴出土遺物

第3節 出土遺物

中ノ丸遺跡の出土遺物は、土器と石器である。平坦地は大々的な削平を受け一般遺物はほとんど出土していないが、AB4区を中心にした傾斜地に残存する弥生時代包含層（IV層）からは比較的良好な遺物が出土している。

1 土器（第39図～第45図）

出土土器は、甕形土器と壺形土器に分けられる。そのほか、鉢形土器や埴形土器が少量出土している。

1) 甕形土器（第39図～第41図・第44図・第45図-101～126・163～183）

甕形土器は、口縁部の形状が逆「L」字状に外反するタイプと「く」字状に外反するタイプが存在する。逆「L」字状に外反するタイプは101～103の3片で極めて少なく、「く」字状に外反するタイプが主体を占めている。底部は、底面が充実した脚台状のタイプである。

1. 口縁部

①口縁部の形状が逆「L」字状に外反するタイプ（101～103）

101は、口縁部が外側に水平に拡張するいわゆる逆「L」字状のタイプである。口縁部下の約4.5cmのところに突帯文が巡らされている。内外面とも刷毛目調整の丁寧な仕上げがみられる。色調は明黄褐色で、胎土には長石や石英などの砂粒を含む。焼成は良好である。

②「く」字状に外反するタイプ（104～126）

104は口縁部は「く」字状を呈するが、頸部から口縁部にかけての内傾度が強いのが特徴である。平底を呈した大形甕形土器の可能性が高い。

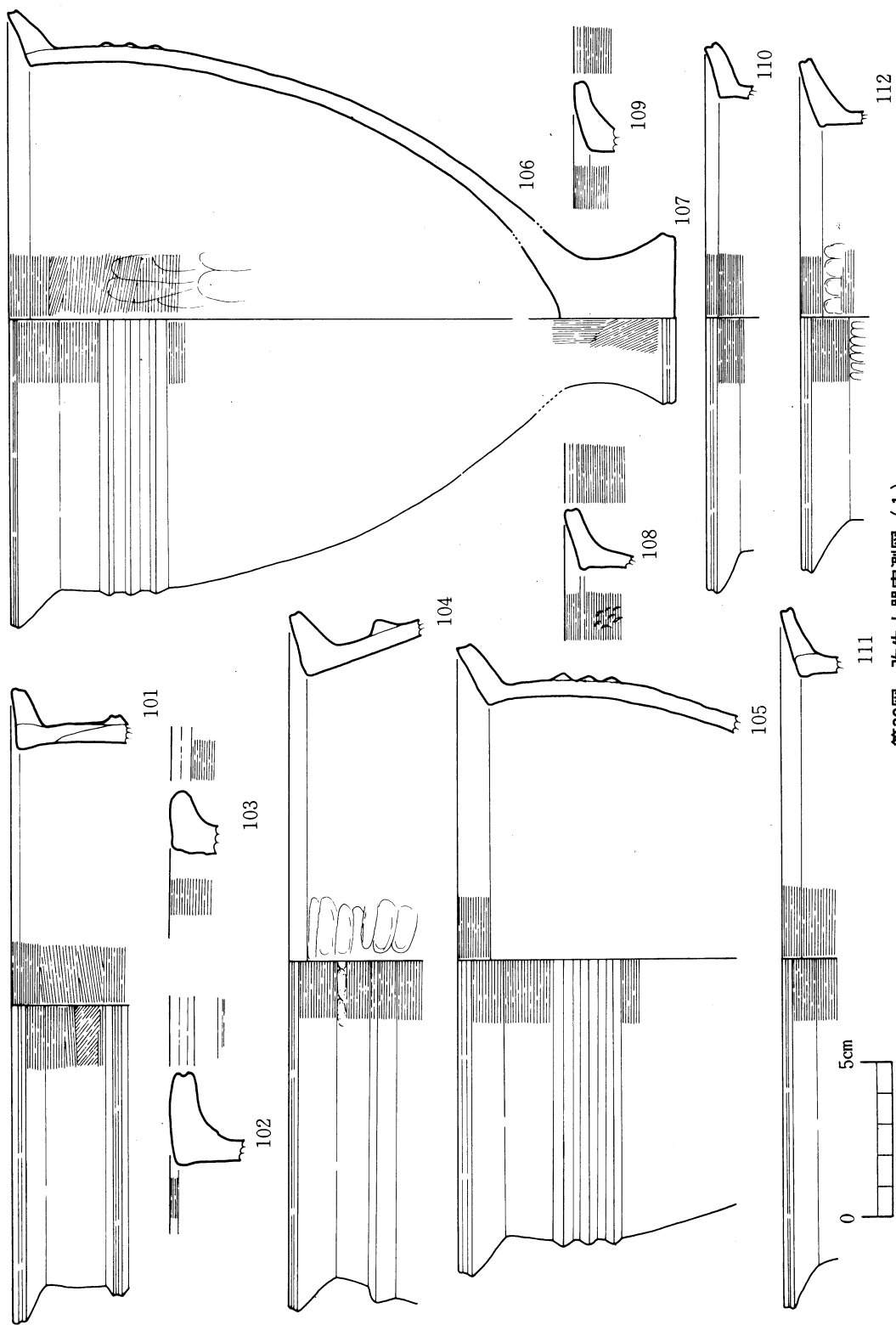
105～126は甕形土器の口縁部から胴部の破片である。口縁部は「く」字状に外反し、口唇部は平坦面をつくる。その平坦面は、僅かに凹面をつくるのが特徴である。口縁部の外反部（拡張部）は、胴部上端の側面に口縁外反部を貼付させる手法が確認される。口縁拡張部と胴部の貼付を強くするために丁寧なナデ整形がみられ、そのため口縁内面の稜部には内側への僅かな張り出しをつくるものもある。口縁部や突帯文の周辺は、丁寧な横位の刷毛目整形が施される。そしてその間は斜位の刷毛目を施す場合もある。

2. 胴部

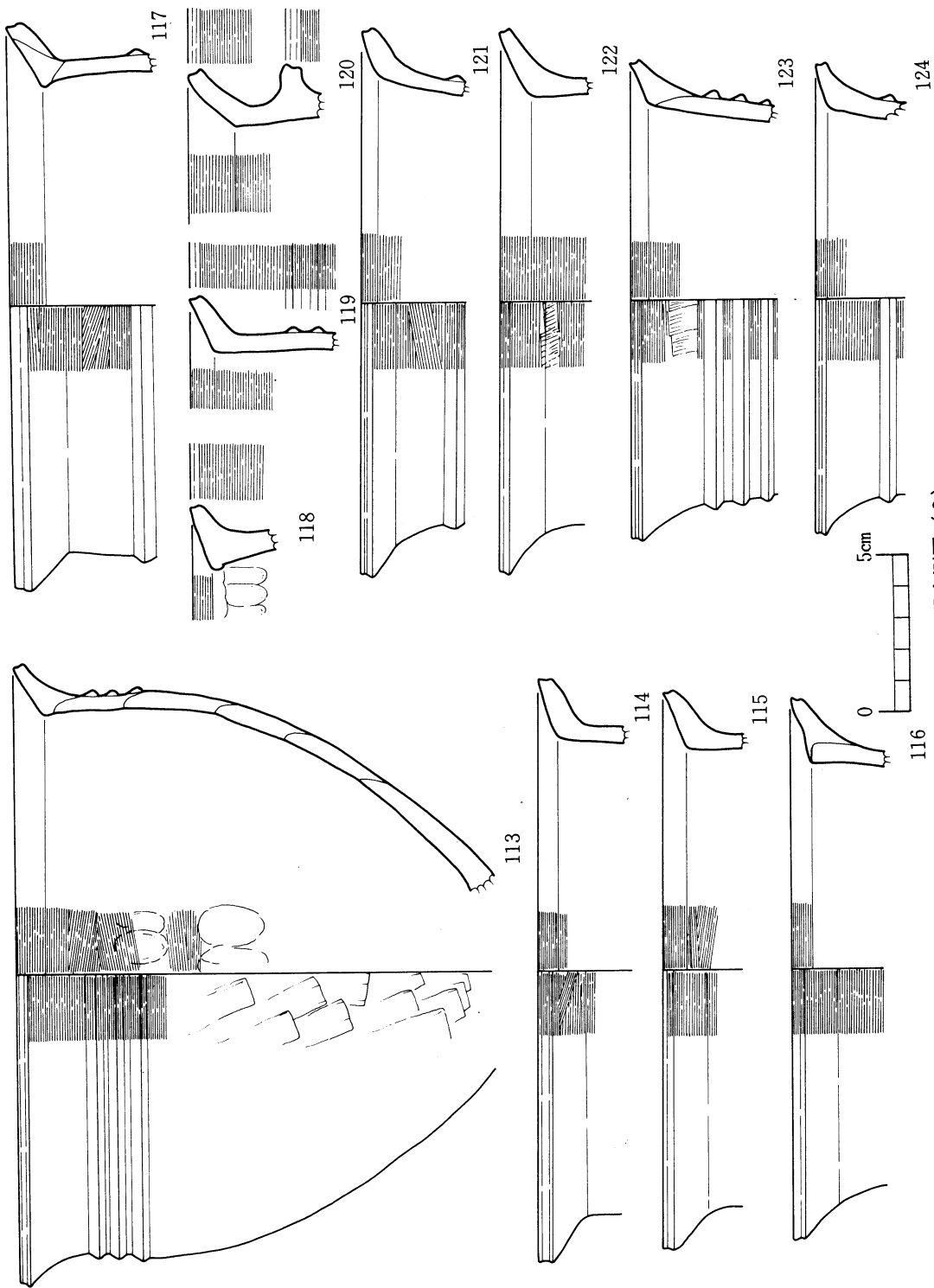
胴部は、一般的に最大張り部に3条程度の突帯文を巡らせる。なかには、125のように2条巡らすものも存在している。胴部の器形は、最大張り部が胴部の比較的上位に位置する。そのため、胴部の最大張り部に巡らされる突帯文は、口縁部直下に巡らされる感になる。そのほか、123～126のように胴部が張らず直線的な胴部に突帯文が巡らされるタイプも存在する。この場合にも突帯文は口縁部直下に位置している。

3. 底部

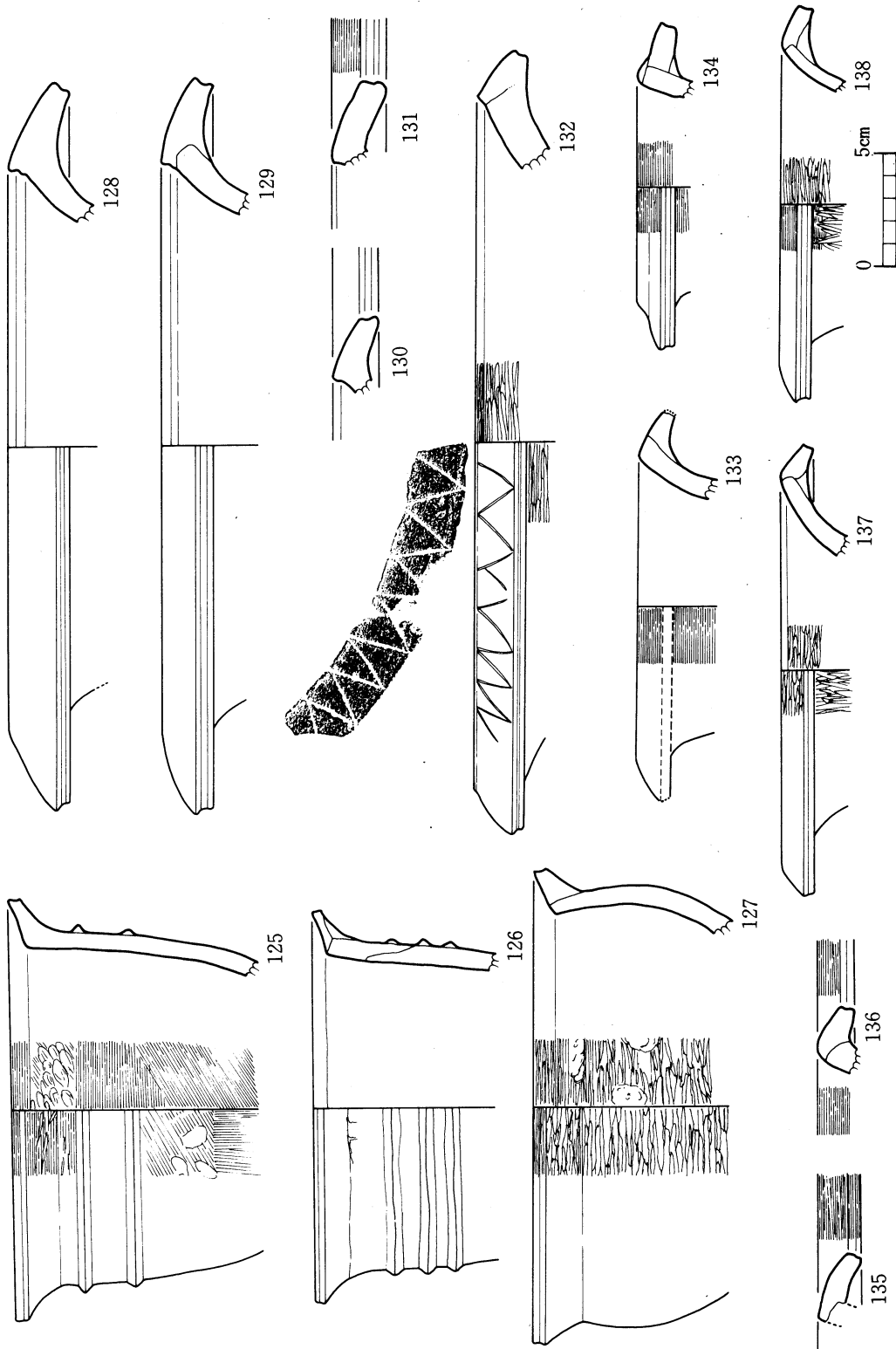
163～183は、甕形土器の底部破片である。甕形土器の底部は、裾部が若干拡がり、底面が充実した脚台である。底面はほとんどが充実した平坦な平底を呈するが、170などのように僅かに凹面をつくるものもある。なかには、175のようにかなりの凹面をなした上げ底のものも



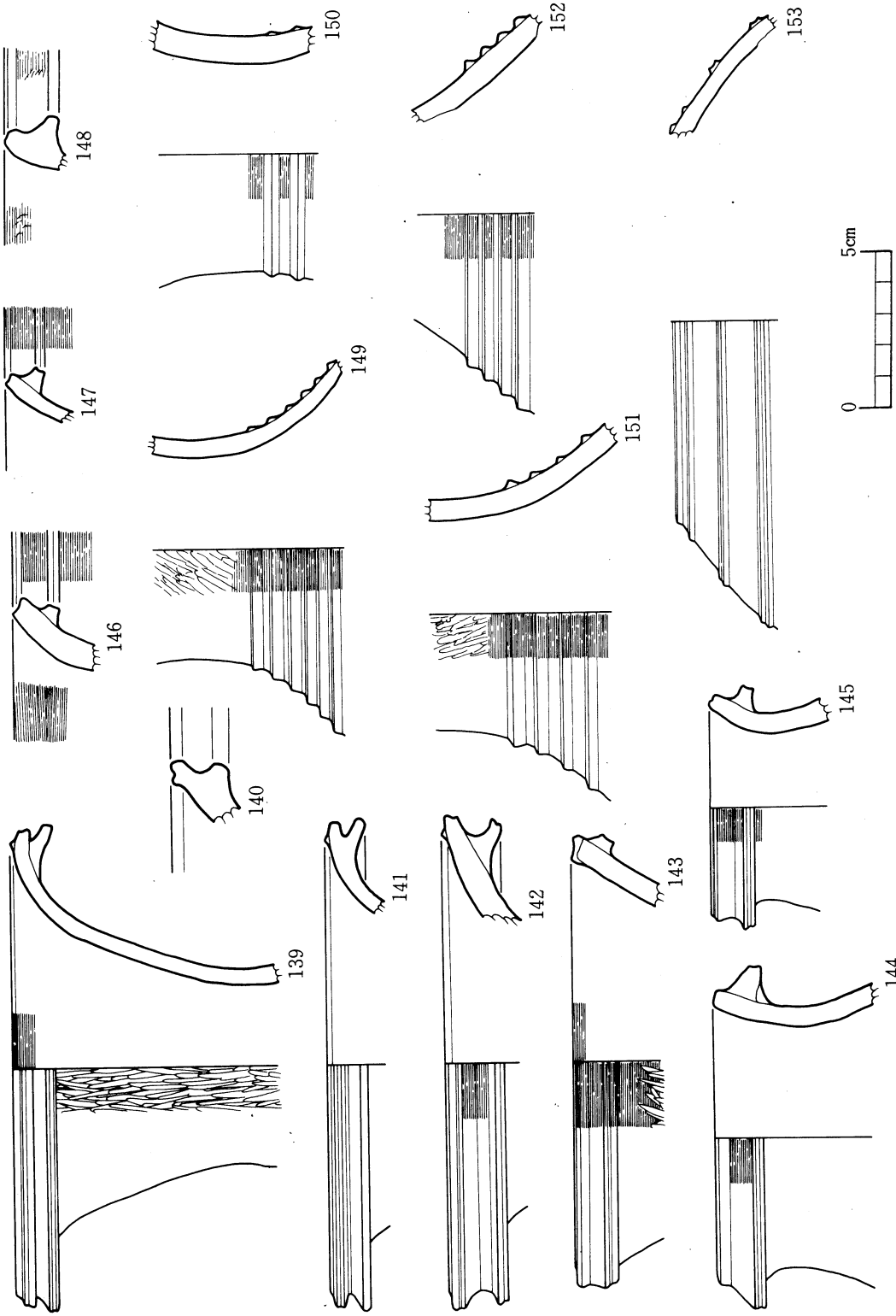
第39图 弥生土器实测图(1)



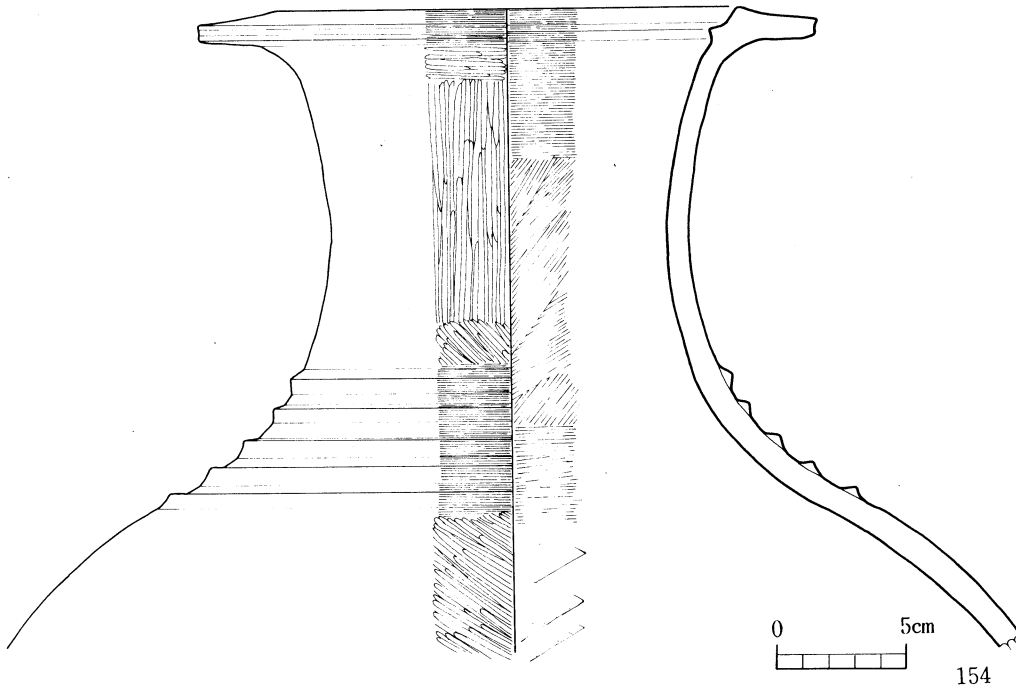
第40图 弥生土器类测图(2)



第41图 弥生土器实测图 (3)



第42图 弥生土器类别图(4)



第43図 弥生土器実測図(5)

3. 底部

163～183は、甕形土器の底部破片である。甕形土器の底部は、裾部が若干拡がり、底面が充実した脚台である。底面はほとんどが充実した平坦な平底を呈するが、170などのように僅かに凹面をつくるものもある。なかには、175のようにかなりの凹面をなした上げ底のものもみられる。底部裾部の端部は面取りが施され、凹線状に凹みが施されている。しかし、179～182のように丸みをもって仕上げるものも存在する。底部の脚部は、縦位の刷毛目整形が施され、裾部の面取り部分は横位の刷毛目整形である。

2) 鉢形土器 (第41図-127)

底部は定かでないが、胴部は球状に張り、頸部は内湾し口縁部は「く」の字に外反する。口唇部は平坦におさめ、僅かな凹面をつくる。器内外面は丁寧なヘラ磨き手法を施している。

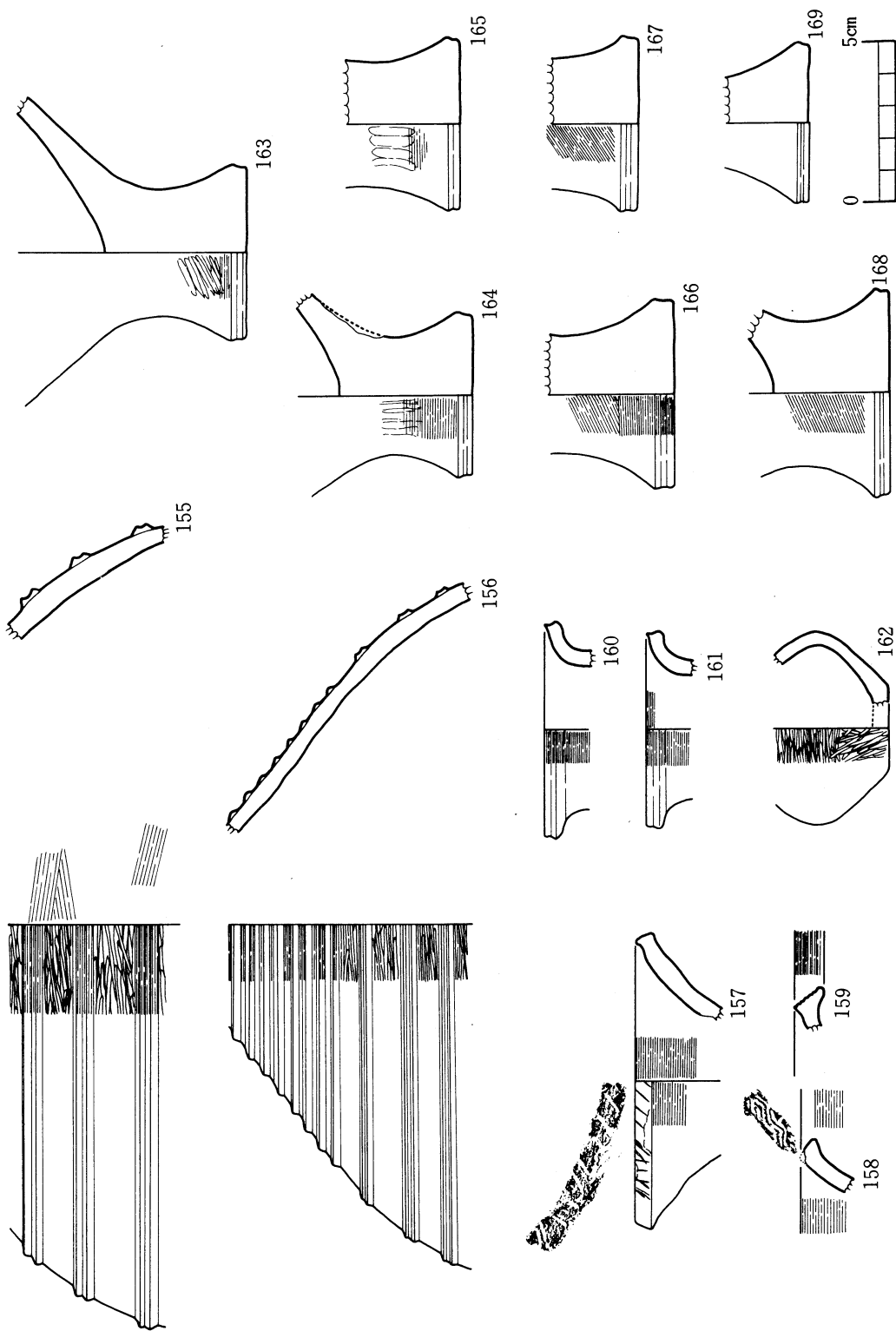
3) 壺形土器 (第41図～第45図-128～161・184～199)

壺形土器には、基本的には頸部の途中から大きく外反して幅広く拡張した口縁部をもつタイプと直線的に立ち上がり僅かに外反して比較的短い口縁部をつくるタイプに分かれる。そのほかに、二叉状口縁が存在し、この二叉状口縁にも大きく外反するタイプと直線的に立ち上がるタイプがある。さらに、壺形土器には頸部下半に三角形突帯文が数条巡らされる。突帯文は、幅広で頂部が凹んだいわゆる口唇状突帯文も存在する。壺形土器の底部は、平底を呈する。

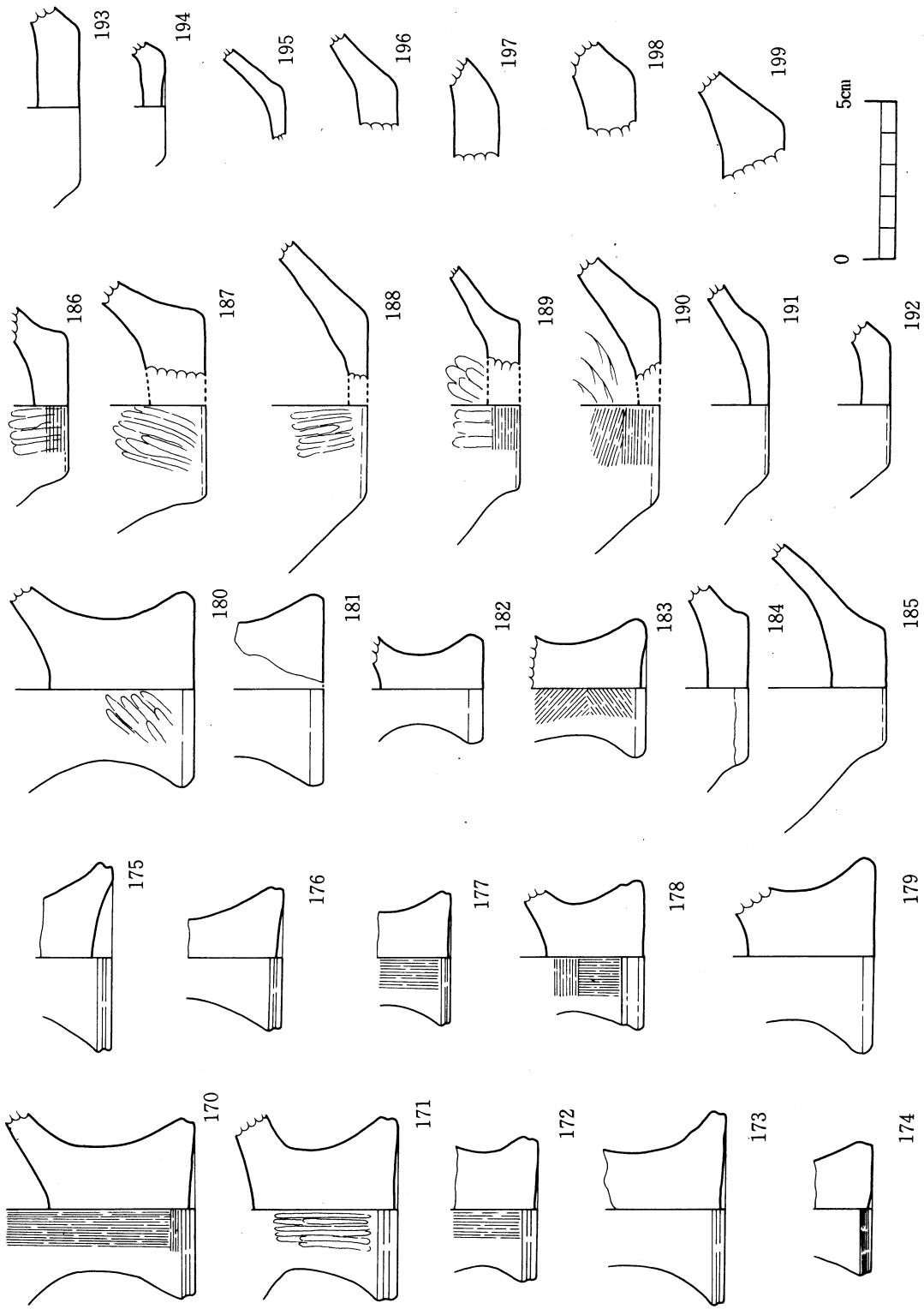
1. 口縁部

1) 大きく外反するタイプ (128～133・135～138・157)

このタイプは、頸部の途中から大きく外反し口縁部が比較的幅広く拡張する。129の器壁で



第44图 弥生土器实测图(6)



第45图 弥生土器类测图 (7)

観察されるように、頸部から大きく外反した先端部の上部に口縁拡張部を接着させる手法のものである。そのため3cm～4cmの幅広い拡張部が形成され、表面は凸面上に丸みをつくる。口縁部は頸部から立ち上がって大きく外反し、口縁端部には上から拡張部が貼付されている。そのため、128のように整形の段階で内面に突起状に張り出すものも存在する。その凹面状の口縁拡張部には132のように沈線で鋸歯文が描かれるものもある。口縁拡張部の端部は、平坦面につくられ僅かに凹む。132や137は口縁拡張部の内側に突帯文を巡らすもので、132は三角突帯文を137は口唇状突帯文を巡らしている。154は、口縁内面の少し下に1条の突帯文を巡らせ、口縁拡張部は凹面状に仕上げられた若干異質な形態のタイプである。器面の整形は、口縁拡張部の表面や裏面は丁寧な横位の刷毛目整形が施され、頸部付近は縦位のヘラ磨き整形が施される。頸部内面は、刷毛目整形の後ナデ整形が施されている。頸部から肩部の突帯文間は丁寧な刷毛目整形が施され、胴部はヘラ磨き整形となっている。胴部内面は削り整形が施される。

2) 直線的に立ち上がるタイプ (134)

134がこのタイプで、頸部から口縁部は直線的に立ち上がり、先端部の側面に拡張部を貼付して口縁部をつくる。側面の拡張部が僅かに下がるため、口縁部は段をなしている。口縁部は内外とも、横位の丁寧な刷毛目整形が施されている。

3) 二又状口縁をもつタイプ

これには、二つのタイプがある。口縁部が大きく外反して口縁が二又状になるタイプと口縁部が直線的に立ち上がり口縁部外側の一段下に拡張部を二又状に貼付するタイプである。

① 口縁部が大きく外反して口縁が二又状になるタイプ (139～142)

口縁部を大きく外反させ、端部は平坦に納める。そして、口縁部の外側の下端に拡張部を貼付した二又状口縁である。さらに、139や141のように下端の拡張部は若干長くなる。なお、口縁部の内側には、三角の突帯文を一条巡らせている。器面の調整は、口縁部付近は刷毛目の横方向の丁寧なナデ整形がみられ、頸部外面は丁寧なヘラ磨きの手法である。

② 直線的に立ち上がり口縁部外側の一段下に拡張部を貼付して二又状に口縁部をつくるタイプ (143～148)

口縁部が直線的に立ち上がり僅かに外反して、口唇部は平坦におさめる。そして、口唇部の下の口縁部外面には、比較的短い拡張部を貼付する。拡張部の端部は平坦におさめ、僅かに凹面をつくる。短頸壺の形状と二又状口縁のため、強固な口縁部をつくる。口縁部は、内外面とも丁寧なナデ整形が施される。

2. 胴部

壺形土器は完形品が存在しないため、胴部の形状は定かでない。149～156は、頸部から胴部付近の破片である。この付近に突帯文が数条巡らされている。154は胴部上半を知る比較的大形の破片であるが、頸部から胴部に移行する部分には5条の突帯文が巡らされる。この突帯文には三角形突帯文と口唇状突帯文が存在する。149～152・154などの三角形の三角形突帯文

は、頸部と胴部の境に間隔をもたず密に貼付されている。153・155・156などの口唇状突帯文は突帯文間に間隔をもって貼付され、155などは胴部最大張部まで巡らされる傾向にある。なお、突帯文間は間隔をもつためか丁寧なヘラ磨き手法の精巧な仕上げがみられる。

3. 底部

184～199は、壺形土器の底部である。底面は平底を呈し、胴部へは大きく外傾して立ち上がる。底部下端は横位の刷毛目整形が施されるが、そこから胴部にかけては縦位の丁寧なヘラ磨きの整形が施される。

4) その他の壺形土器

①ヘラ描沈線土器 157～159は、細片であるが特殊な壺形土器である。157は口縁部片で、大きく外反し口唇部は平坦におさめる。その口唇部平坦面には、ヘラ描き沈線が斜位に不規則に刻されている。器内外面は、丁寧なナデ整形である。

②櫛描波状文土器 158は外反する口縁部片で、口唇部は若干肥厚して平坦面をつくる。その平坦面には三条の櫛描き波状文描かれている。器内外面は、丁寧なナデ整形である。

③凹線文土器 159は、細片であるが大きく外反して口唇部が内外に大きく拡張して平坦面をつくる口縁部片である。幅広い平坦面には、七条程度の細い凹線文が施文されている。

④小型壺形土器 160・161は、小型壺の口縁部破片である。頸部が直線状に立ち上がり、口縁部は大きく外反して短く終る。口唇部は平坦におさめ、凹面をつくりそのため僅かに上下に張り出す。器内外面は、丁寧なナデ整形である。

⑤埴型土器 162は、口縁部は欠損して現存高は5cmを測るが、底径3.5cm、胴径8.5cmの小型の埴型土器である。胴部上半は横位のヘラ磨き整形で下半は斜位のヘラ磨き整形が施される。

2 石器 (第46図)

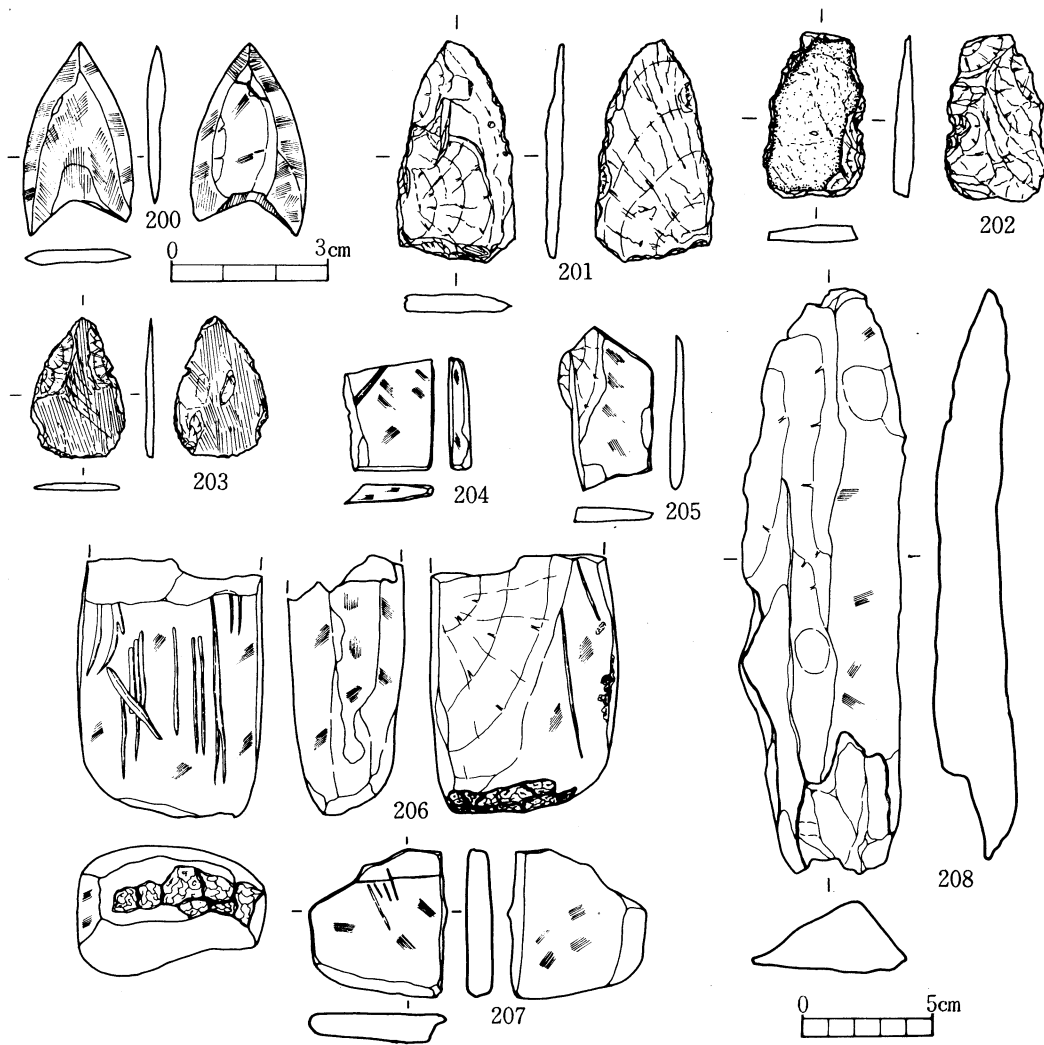
弥生時代に該当する石器は、9点出土している。いずれも表層出土と表採資料である。器種は、磨製石鏃(石器Ⅰ)と砥石(石器Ⅱ)に分けられる。

石器Ⅰ (200～203)

磨製石鏃は4点出土しているが、200は完形で他の201～203は未成品である。200は、ハート形の凹基式の完形品である。201～203は未成品で、201と202は素材を三角形に整形剥離した段階であり、203は三角形に整形剥離した後表裏に研磨を施す段階のものである。住居址1号出土の資料と共に製作過程を知る貴重な資料である。

石器Ⅱ (204～208)

比較的扁平な素材の表面が研磨され擦痕が確認されるところから砥石とした。206は石斧より転用の砥石である。なお、刃部は敲打され敲石にも使用されている。



第46図 弥生時代石器実測図

第2表 出土土器一覽表

番号	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)(cm)	胎土	調整	焼成	色調
1		A-9V		口縁部	器壁厚 0.7~1.0	長石・石英	条痕	良好	灰褐色
2		B-3表		胴部	〃 0.7	〃	ナデ	〃	赤褐色
3	70.035	B-12V		口縁部	〃 1.3	長石、石英、金雲母	条痕・ナデ	〃	茶褐色
4		〃		胴部	〃 1.2	〃	〃	〃	〃
5		表		口縁部	〃 1.0~2.0	〃	ナデ	〃	〃
6		B-3表		口縁部	〃 0.9	〃	〃	普通	〃
7	68.39	A-4V		口縁部	〃 0.6~1.1	長石、石英	ケズリ・ナデ	〃	暗茶褐色
8	68.3	A-4V		底部	底径 6.2	長石、石英、角閃石	〃	〃	茶褐色
21	69.535	Y-9V	深鉢	口縁部	器壁厚 0.5~0.8	〃	ナデ	〃	暗茶褐色
22		B-6表	〃	〃	〃 0.4~0.8	長石、石英	〃	良好	茶褐色
23	69.66	A-7V	浅鉢	胴部	胴径 13.8	長石、石英、角閃石	ヘラ磨き	〃	暗茶褐色
24	71.18 他	B-19V	〃	口縁部 ~ 胴部	口径 25.4	長石、石英	〃	〃	明茶褐色
25		B-9住1	カメ	口縁部 ~ 胴部	口径 25.3	長石、石英、金雲母、角閃石	刷毛目・ナデ	良好	茶褐色
26	69.105 他	〃	〃	〃	〃 21.3	長石、石英、金雲母	〃	〃	暗茶褐色
27	69.43	〃	〃	口縁部	器壁厚 0.8~1.2	〃	〃	〃	〃
28	69.07	〃	〃	〃	〃 0.6~0.7	〃	〃	〃	〃
29	69.2	〃	〃	〃	口径 24.8	〃	〃	〃	茶褐色
30	69.125 他	〃	〃	〃	〃 28	〃	〃	〃	暗茶褐色
31	69.5	〃	〃	〃	〃 26.3	〃	〃	〃	〃
32	69.125 他	〃	〃	〃	〃 21.2	〃	〃	〃	〃
33	69.17	〃	〃	〃	〃 17.8	〃	〃	〃	〃
34	69.82	〃	〃	底部	底径 6.4	〃	〃	〃	茶褐色
35	70.18	〃	〃	〃	〃 7.8	〃	〃	〃	〃
36		〃	〃	〃	〃 7.6	〃	〃	〃	〃
37	69.89	〃	〃	口縁部	口径 21.4	〃	〃	〃	茶~暗茶褐色
38	69.19	〃	〃	〃	〃 24.8	長石、石英	〃	〃	暗茶褐色
39	69.345	〃	〃	〃	〃 27.3	長石、石英、金雲母	〃	〃	〃
40	70.04	〃	〃	胴部	胴径 23	〃	〃	〃	茶~暗茶褐色
41	69.25	〃	ツボ	〃	頸径 18.3	〃	刷毛目・ヘラ磨き	〃	茶褐色
42	70.195	〃	〃	〃	〃 17	〃	〃	〃	暗茶褐色
43	69.26 他	〃	〃	〃	〃 37.0	〃	〃	〃	暗褐色
44	70.032 他	〃	〃	胴部 ~ 底部近く	器壁厚 0.9~1.2	〃	ヘラ磨き・ナデ	〃	茶~暗茶褐色
45	69.17	〃	〃	〃	〃 1.5~3.0	〃	刷毛目・ナデ	〃	〃
46	69.26	〃	〃	底部	〃 1.0~1.4	長石、石英	ナデ	普通	灰褐色
47	69.12	〃	〃	〃	底径 8	〃	ヘラ磨き・ナデ	良好	茶褐色
48	70.1	〃	〃	底部近く	器壁厚 1.5	〃	不明	普通	〃
49	69.12	〃	〃	〃	〃 1.3	〃	ヘラ磨き・ナデ	良好	〃
62	68.94 他	B-6住3	カメ	口縁部	口径 31.0	〃	刷毛目・ナデ	〃	〃

第3表 出土土器一覧表

番号	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)(cm)	胎土	調整	焼成	色調
63		B-6住3	カメ	口縁部 胴部	口径 28.2		刷毛目、ナデ	良	
64		〃	〃	〃	〃 32.4		ナデ	〃	
65	69.1	〃	〃	〃	〃 35.2	石英、長石、金雲母	ナデ	〃	淡茶褐色
66	69.43 他	〃	〃	〃	〃 14.8	〃	刷毛目、ナデ	〃	濃茶褐色
67	69.31	〃	〃	〃	〃 21.5	石英、長石、角閃石	〃	〃	黄褐色
68	69.18	〃	〃	〃	〃 15.1	石英、長石、角閃石、金雲母	〃	〃	茶褐色
69	69.19	〃	〃	〃	〃 14.1	石英、長石、金雲母	ナデ	〃	淡褐色
70	69.51	〃	〃	〃	〃 22.1	石英、長石、角閃石	〃	〃	茶褐色
71	68.95	〃	〃	底部	底径 9.2	石英、長石、金雲母	刷毛目、ナデ	〃	淡褐色
72	69.39	〃	〃	〃	〃 7.1	石英、長石	ナデ	〃	〃
73	69.24	〃	カメ	〃	〃 6.4	〃	刷毛目、ナデ	〃	褐色
74	69.085	〃	〃	〃	〃 7.4	石英、長石、金雲母	〃	〃	淡褐色
75	68.97 他	〃	〃	〃	〃 5.4	石英、長石	ナデ	〃	〃
76	69.1	〃	ツボ	口縁部	口径 12.9	石英、長石、角閃石、金雲母	〃	〃	茶褐色
77	69.335	〃	〃	〃		石英、長石、金雲母	〃	〃	〃
78	69.5	〃	〃	胴部		石英、長石	ヘラ磨き	〃	淡褐色
79	69.39 他	〃	〃	底部	底径 7.2	〃	刷毛目、ナデ	〃	茶褐色
80	68.855	〃	〃	〃	〃 8.3	石英、長石、金雲母	外側丹塗り	〃	褐色
83	69.95	円形周溝	カメ	口縁部	器壁厚 0.7~1.3	長石、石英	刷毛目、ナデ	〃	暗茶褐色
84	69.84	〃	ツボ	〃	頸径 11.6	長石、角閃石	刷毛目、ヘラ磨き	〃	明茶褐色
85		〃	〃	〃	器壁厚 0.7	長石、石英	刷毛目、ナデ	〃	茶~暗茶褐色
86	69.62	〃	〃	胴部	?	長石、石英、角閃石	〃	〃	茶褐色
87	69.235	〃	〃	〃	頸径 13.6	長石、石英、金雲母	刷毛目、ヘラ磨き、ナデ	〃	茶~暗茶褐色
88	69.63	〃	小型埴	〃	器壁厚 0.4	長石	ヘラ磨き、丹塗り	〃	赤褐色
89	69.41	〃	?	〃	頸径 28	長石、石英、金雲母	刷毛目、ナデ	〃	暗茶褐色
90	69.565	〃	ツボ	底部	底径 8.4	〃	〃	〃	茶褐色
91	69.7 他	〃	〃	〃	〃 8.6	長石	刷毛目、ヘラ磨き、ナデ	〃	茶~暗茶褐色
94	69.83	B-12土3	〃	肩部	器壁厚 1.2	長石、石英、金雲母	刷毛目、ナデ	〃	明茶褐色
95	69.84	〃	カメ	口縁部	〃 1.1	〃	ナデ	普通	〃
96	68.53	B-4	ツボ	肩部	〃 0.8	〃	ヘラ磨き、ナデ	良好	黒褐色
97		A-7	〃	〃	〃 0.9	長石、石英	ナデ	〃	明褐色
98		〃	カメ	口縁部	〃 0.6~0.9	長石、角閃石	〃	〃	暗茶褐色
99	69.95	B-7	〃	〃	〃 0.7~1.2	長石、角閃石、金雲母	〃	〃	〃
100		〃	〃	〃	〃 0.8~1.4	長石、石英、角閃石、金雲母	〃	〃	明茶褐色
101		B-4表	カメ	口縁部 胴部	口径 29.2	石英、角閃石	刷毛目、ナデ	良好	明茶褐色
102		拡張区東	〃	口縁部	器壁厚 1.0~1.4	長石、石英、角閃石	〃	〃	茶褐色
103		表	〃	〃	〃 1.3	長石、石英、角閃石、金雲母	〃	普通	茶~灰茶褐色
104	68.66	B-4Ⅱ	〃	〃	口径 31.4	〃	刷毛目、ヘラ磨き、ナデ	良好	〃

第4表 出土土器一覽表

番号	標高	区・坪	器種	部位	法量(径・高・厚)(cm)	胎土	調整	焼成	色調
105	68.69	他	B-4Ⅱ	カメ 口縁 ~ 胴部	口径 29	長石、石英	刷毛目、ヘラ磨き、ナデ	良好	黒褐色
106	68.67	他	〃	〃	〃 28.4	長石、石英、金雲母			
107			B-4Ⅱ	〃	底部 底径 7.6	長石、石英、金雲母、角閃石	刷毛目、ナデ	良好	茶褐色
108			表	〃	口縁部 器壁厚 0.8~1.1	長石、石英、金雲母	〃	〃	暗茶褐色
109			B-5表	〃	〃 0.7~1.1	長石、石英、金雲母、角閃石	〃	〃	茶~暗褐色
110			B-9表	〃	口径 25.4	長石、石英、金雲母	〃	〃	明茶褐色
111			表	〃	〃 15.9	長石、石英、金雲母、角閃石	〃	普通	茶褐色
112			表	〃	〃 23.6	〃	〃	〃	灰茶褐色
113	68.31		B-4Ⅱ	〃	口縁 ~ 胴部 〃 28.0	長石、金雲母	〃	良好	明茶褐色
114	68.74		〃	〃	口縁部 〃 26.2	長石、石英	刷毛目、ナデ	〃	暗~黒褐色
115	68.615		〃	〃	〃 25.2	長石、金雲母	〃	〃	淡褐色
116			B-4表	〃	〃 24.3	長石、石英、金雲母	〃	普通	暗~黒褐色
117			B-9表	〃	〃 25.6	〃	〃	良好	〃
118			表	〃	器壁厚 1.0~1.4	〃	〃	〃	暗茶褐色
119	68.68	他	B-4Ⅱ	〃	〃 0.7~1.1	長石、石英	〃	〃	明茶褐色
120	68.585	他	A-4Ⅱ	〃	〃 1.0~1.1	長石、石英、角閃石	〃	〃	〃
121			B-7表	〃	口径 25.2	石英、長石	〃	〃	明茶褐色
122	68.68		B-4Ⅱ	〃	〃 25.3	長石、石英、金雲母	〃	〃	茶褐色
123	71.04		B-14Ⅲ	〃	〃 21.6	長石、石英	〃	〃	暗褐色 ~ 黒褐色
124			B-4表	〃	〃 21.2	〃	〃	普通	黒褐色
125	70.07		B-14Ⅲ	〃	口縁 ~ 胴部 〃 18.8	〃	〃	〃	茶~暗茶褐色
126	70.88		A-12Ⅲ	〃	〃 17.6	〃	〃	粗	明茶褐色 ~ 黒褐色
127			B-7表	〃	〃 21	〃	ヘラ磨き、ナデ	良好	黒褐色
128			表	ツボ	口縁部 〃 32	長石、石英、金雲母	刷毛目、ナデ	普通	茶褐色
129			〃	〃	〃 32.4	長石、石英、金雲母、角閃石	〃	〃	明茶褐色
130			B-12表	〃	器壁厚 1.1~1.5	〃	〃	〃	〃
131			拡張区西	〃	〃 1.3~1.4	石英、長石、金雲母	〃	良好	暗褐色
132	68.62		B-4Ⅱ	〃	口径 34.4	〃	刷毛目、ヘラ磨き、ナデ	〃	茶~暗褐色
133			B-9表	〃	〃 18	長石、石英、金雲母、角閃石	刷毛目、ナデ	〃	〃
134			B-6表	〃	〃 14.4	長石、石英、金雲母	〃	〃	黒褐色
135	69.625		Y-9Ⅲ	〃	器壁厚 0.9~1.1	〃	刷毛目、ヘラ磨き、ナデ	〃	明茶褐色
136			B-10表	〃	〃 1.1~1.4	〃	刷毛目、ナデ	普通	淡褐色
137	68.575		B-4Ⅱ	〃	口径 20.2	〃	ヘラ磨き、ナデ	良好	明茶褐色
138	68.955		A-4Ⅱ	〃	〃 17.4	〃	刷毛目、ヘラ磨き、ナデ	〃	〃
139	68.63		B-4Ⅱ	〃	〃 22	〃	〃	〃	灰茶褐色
140			B-7表	〃	器壁厚 1.5~2.0	〃	刷毛目、ナデ	普通	明茶褐色
141	68.525		B-4Ⅱ	〃	口径 22.4	〃	〃	〃	茶褐色
142			B-7表	〃	〃 22.4	〃	〃	良好	明茶褐色

第5表 出土土器一覧表

番号	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)(cm)	胎土	調整	焼成	色調
143		B-6表	ツボ	口縁部	口径 20.4	石英、長石、金雲母	刷毛目、ヘラ磨き、ナデ	良好	黒褐色
144	68.755	A-4Ⅱ	〃	〃	〃 15.6	石英、長石	刷毛目、ナデ	粗	黄褐色
145	71.065	B-15Ⅲ	〃	〃	〃 11.0	石英、長石、金雲母	〃	普通	明黄茶褐色
146	69.545	Y-9Ⅲ	〃	〃	器壁厚 1.3~1.8	〃	〃	良好	明茶褐色
147	69.64	〃	〃	〃	〃 0.7	〃	〃	〃	黒褐色
148		B-4表	〃	〃	〃 0.9~1.1	〃	〃	普通	黄褐色
149	68.61	B-4Ⅱ	〃	肩部	頸径 10.0	〃	刷毛目、ヘラ磨き、ナデ	良好	暗褐色
150	69.46	B-7表	〃	頸部	〃 10.6	〃	刷毛目、ナデ	〃	明茶褐色
151	68.645	B-4Ⅱ	〃	〃	〃 10.6	〃	刷毛目、ヘラ磨き	〃	茶褐色
152	68.955	A-4Ⅱ	〃	肩部	肩径 14.8	〃	刷毛目、ナデ	粗	淡黄褐色
153	68.66 他	B-4Ⅱ	〃	〃	〃 17.9	〃	〃	普通	明茶褐色
154	68.57 他	〃	〃	口縁部 ~ 肩部	口径 23.7	〃	〃	〃	〃
155	68.72 他	B-4Ⅱ	〃	〃	肩径 35.6	長石、石英、金雲母	刷毛目、ヘラ磨き、ナデ	良好	暗褐色
156	68.66	B-4Ⅱ	〃	〃	〃 30.4	〃	〃	普通	暗黒褐色
157		B-7表	〃	口縁部	口径 12.3	〃	〃	〃	茶褐色
158		D-5	〃	〃	器壁厚 0.8~1.3	長石、石英	刷毛目、ナデ	良好	〃
159		B-9表	〃	〃	〃 0.8~1.1	長石、石英、金雲母	〃	粗	暗褐色
160	69.765	Z-9Ⅲ	小型ツボ	〃	口径 10	長石、石英	刷毛目	良好	黒褐色
161	70.905	B-15Ⅲ	〃	〃	〃 9	〃	〃	〃	明茶褐色
162	70.77	A-12Ⅲ	〃	胴部 ~ 底部	胴径 9	〃	ヘラ磨き、ナデ	〃	〃
163	68.545 他	B-4Ⅱ	カメ	底部	底径 7.6	〃	〃	普通	〃
164	68.815	〃	〃	〃	〃 6.8	長石、石英、金雲母	刷毛目、ナデ	良好	茶褐色
165	68.72	〃	〃	〃	〃 7.4	〃	〃	〃	〃
166	68.705	〃	〃	〃	〃 8.2	〃	〃	〃	〃
167	68.80	〃	〃	〃	〃 7.6	〃	ヘラナデ	〃	〃
168		B-10表	〃	〃	〃 9	〃	刷毛目、ナデ	〃	〃
169	70.965	A-12Ⅲ	〃	〃	〃 6.8	長石、石英	〃	〃	〃
170	71.56	AB-13	〃	〃	〃 7.8	長石、石英、金雲母	刷毛目、ヘラ磨き、ナデ	〃	〃
171	71.095	〃	〃	〃	〃 8	長石、石英	刷毛目、ナデ	〃	〃
172		B-10	〃	〃	〃 6.2	長石、石英、金雲母	〃	〃	明茶褐色
173	68.955	A-4Ⅱ	〃	〃	〃 8.4	〃	〃	粗	〃
174		B-12	〃	〃	〃 5.7	長石、石英	〃	良好	茶褐色
175		B-10表	〃	〃	〃 8.2	〃	〃	〃	〃
176		表	〃	〃	〃 6.4	長石、石英、金雲母	ヘラ磨き、ナデ	〃	灰茶褐色
177	68.56	B-4Ⅱ	〃	〃	〃 5.8	〃	刷毛目、ナデ	〃	〃
178		B-9表	〃	〃	〃 6.4	長石、石英	〃	普通	明茶褐色
179		表	〃	〃	〃 8.6	長石、石英、金雲母	?	〃	茶褐色
180		B-7表	〃	〃	〃 8.4	〃	?	良好	〃

第6表 出土土器一覧表

番号	標高	区・層	器種	部位	法量(径・高・厚)(cm)	胎土	調調	焼成	色調
181	70.76	A-12Ⅲ	カメ	底部	底径 8.4	長石、石英	ナデ	良好	茶褐色
182		B-4表	〃	〃	〃 4.8	長石、石英、金雲母	?	粗	暗茶褐色
183		B-7	〃	〃	〃 6	長石、石英	刷毛目・ナデ	良好	茶~暗茶褐色
184	70.755	B-15Ⅲ	ツボ	〃	〃 6.6	長石、石英、金雲母	〃	〃	茶褐色
185	68.815	B-4Ⅱ	〃	〃	〃 5.2	長石、石英	刷毛目、ヘラ磨き、ナデ	〃	〃
186		B-8表	〃	〃	〃 6.4	〃	ヘラ磨き、ナデ	〃	赤褐色
187		表	〃	〃	〃 8.4	長石、石英、金雲母	刷毛目、ナデ	〃	茶褐色
188	68.56	B-4Ⅱ	〃	〃	〃 7.8	〃	ヘラケズリ、ナデ	〃	〃
189	69.76	Y-9Ⅲ	〃	〃	〃 7.6	長石、石英	ヘラ磨き、ナデ	〃	黄褐色
190	68.7	B-4Ⅱ	〃	〃	〃 8.4	長石、石英、金雲母	〃	〃	赤茶褐色
191	68.8	A-4Ⅱ	〃	〃	〃 6	長石、石英	ナデ	粗	黄茶褐色
192	68.71	B-4Ⅱ	〃	〃	〃 5.8	長石、石英、金雲母、角閃石	〃	良好	灰黄茶褐色
193		B-9表	〃	〃	〃 7.2	長石、石英、金雲母	?	粗	茶褐色
194		B-6表	〃	〃	〃 4.7	長石、石英	?	〃	暗茶褐色
195		表	〃	〃	器壁厚 0.7~0.8	長石、石英、金雲母	ナデ	良好	黄茶褐色
196		B-4表	〃	〃	底径 12.2	長石、石英	ヘラケズリ、ナデ	〃	黒褐色
197		B-9表	〃	〃	器壁厚 2.1	長石、石英、金雲母	?	普通	茶褐色
198	70.955	AB-13	〃	〃	〃 2.4	〃	?	〃	〃
199	68.43	A-4Ⅱ	〃	〃	底径 7.6	〃	ナデ	良好	茶~暗茶褐色

第Ⅳ章 中・近世の調査

第1節 調査の概要

中ノ丸遺跡では、中世～近世のものも出土している。特に、近世は、特殊な遺構が検出され注目される。

中世或はそれ直前のものには、須恵器や土師器の出土はあるが遺構は検出されていない。

近世の遺構・遺物は、多種多様にわたっている。しかし、用地幅が12mと狭いため遺構の全容を知ることは難しい。断片的ではあるが貴重な資料である。

第2節 近世の遺構

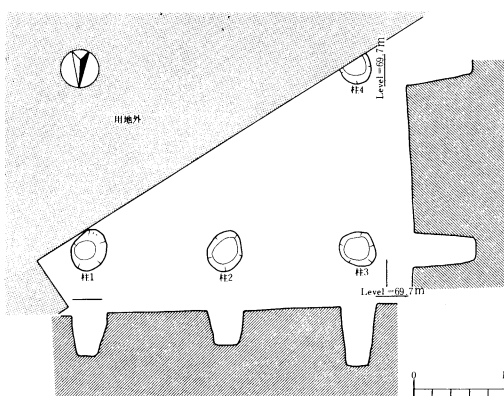
近世の遺構は、A B 4区～A B 19区のはほぼ調査区の全域にみられる。近世の遺構には、掘立柱建物が2棟以上、土壇は6基、溝状遺構は6本、古道（旧道）3本が検出された。

1 掘立柱建物跡

A B 4区～A B 13区の間には、多数の柱穴が検出された。これらの柱穴群は、埋土から弥生時代の柱穴と近世の柱穴に区分される。近世の柱穴は、柱穴の配置から2棟以上の掘立柱建物跡が存在したことが確認された。

1) 掘立柱建物跡1号（第47図）

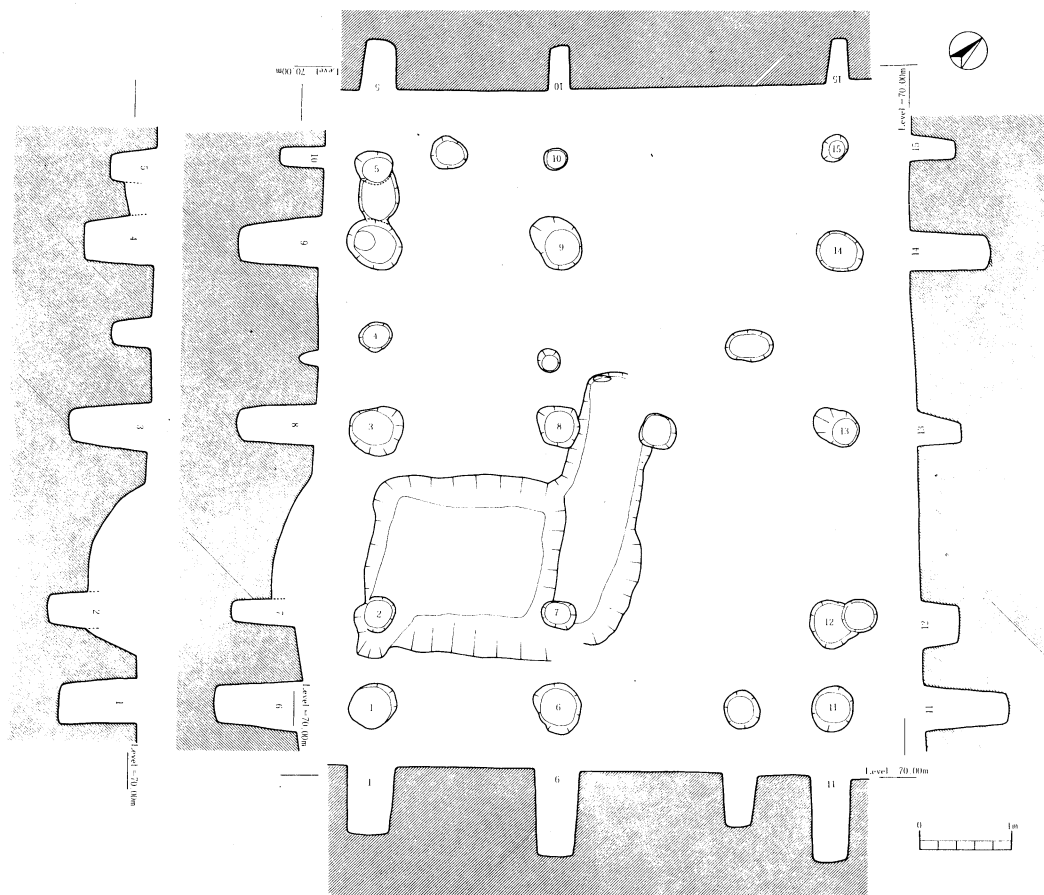
A 5区に検出された4本組の柱穴で、建物の中心は用地外にある。建物の北西隅にあたり、柱穴の直径は38cm～40cmで、深さは38cm～74cmと比較的に大規模の柱穴である。略東西方向の柱間は2間（柱穴3個）確認され、他は用地外に延びている。柱間のP 1～P 2は1.52m、P 2～P 3は1.48mを測る。略南北方向は1間（柱穴2本）確認され、これもその中心は用地外に延び、P 3～P 4は2.00mを測る。掘立柱建物跡1号は建物の中心が用地外へ延びているため規模・性格等はまったく不明である。



第47図 掘立柱建物跡1

2) 掘立柱建物跡2号（第49図）

Z A 9区～Z A 10区に検出された柱穴群から抽出される建物である。この建物は東西端が用



第48図 掘立柱建物跡 2

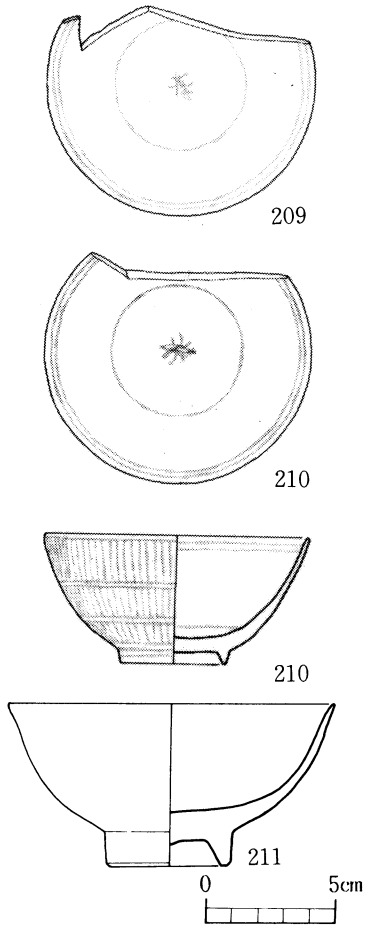
地外であり東西方向に延びることが想定される。現検出面では、略東西方向が2間、略南北方向が2間に両側に庇の付く総柱建物にまとめることができる。主軸方向は、N-45°-W度である。建物の規模は、梁間2間×桁行間2間以上の総柱で両側の桁行間に庇が付く。梁間は、P 2～P 4は2.00m+2.03mで4.03m、P 7～P 9は2.00m+2.00mで4.00m、P 12～P 14は2.08m+1.96mで4.04mを測る。桁行間は、P 2～P 12は1.96m+2.98mで4.94m、P 3～P 13は1.98m+3.10mで5.08m、P 4～P 14は2.00m+3.04mで5.04mを測る。南側の庇の梁間はP 1～P 2は1.02m、P 6～P 7は1.04m、P 11～P 12は0.96mを測る。北側の庇の梁間はP 4～P 5は0.82m、P 9～P 10は0.96m、P 14～P 15は1.12mを測る。庇の桁行間は、P 1～P 11は2.00m+2.96mで4.96m、P 4～P 14は2.00m+3.04mで5.04m、P 5～P 15は1.96m+3.04mで5.00mを測る。以上のように、梁間の平均値は2.01m強となり、桁行間の平均値も1.98mと3.02m強で各梁間や各桁行間とも誤差値は非常に少なく規格の整った間取りである。柱穴等に伴う遺物は出土していないが、土壌等の埋土に類似するところから近世の掘立柱建物跡とすることができる。

2 土壙

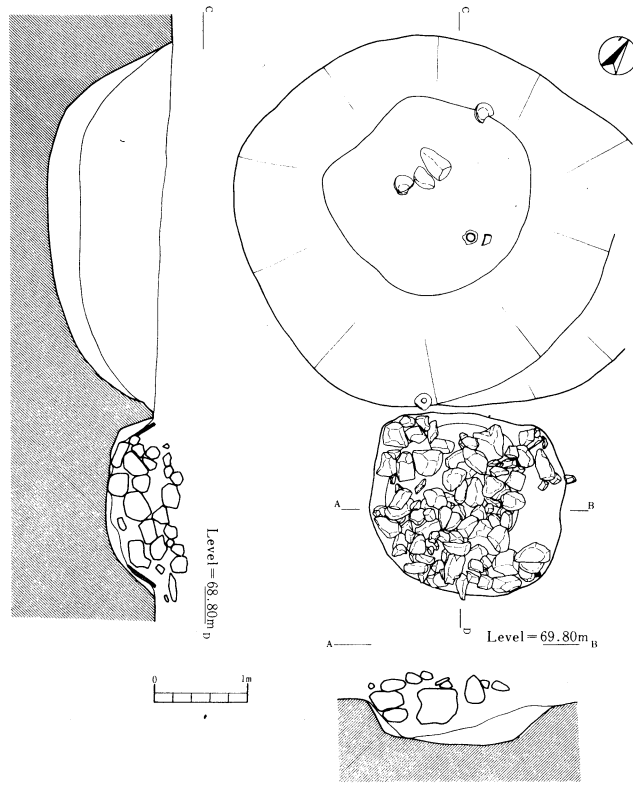
近世の土壙は、6基検出されている。しかし、これらの土壙は、各々遺構の性格が異なるため、以下、1号から6号の順に説明する。

1) 土壙1号 (第50図)

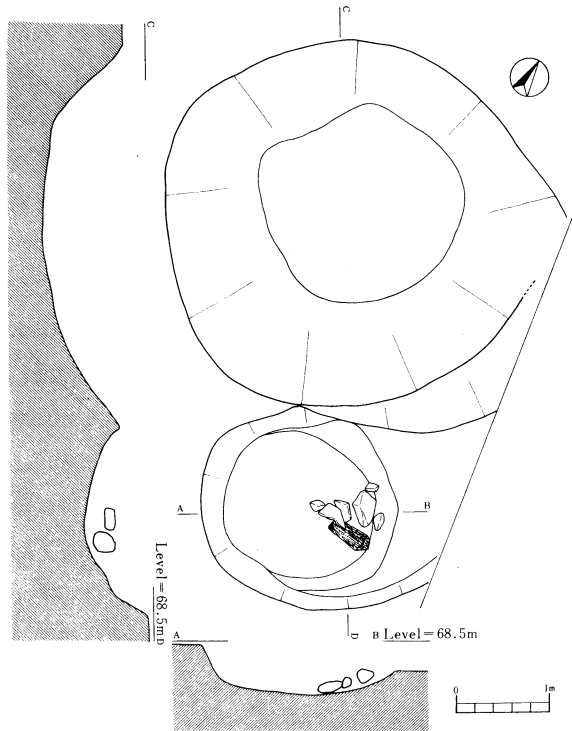
土壙1号は、B4区に土壙2号と隣接して検出された。直径2.08×2.06mの円形の平面プランが確認され、すでに検出時に210の近世磁器が露出している。土壙の深さは検出面から約65cmを測り、底



第51図 土壙1号出土遺物



第49図 土壙 1号・2号 (I)



第50図 土壙1号・2号 (II)

面はスリ鉢状の凹面をつくる。埋土は、上部から中部にかけて茶褐色土が流入し、下部には焼土が堆積している。下部の焼土上には、209～211の近世磁器の茶碗が出土し、二個の河原石も出土している。土壙2号との関係は不明であるが、あまりにも隣接するところから何らかの関係があることが想定される。土壙1号の出土遺物は、茶碗3個である。209は、口径10.2cm、高さ5cmの染付茶碗である。210は、口径10.2cm、高さ5cmの209とほぼ同値の染付茶碗である。211は、口径12.5cm、高さ6.2cmのあめ釉茶碗である。

2) 土壙2号 (第50図)

土壙2号は、B4区に土壙1号と隣接して検出された。直径約1mの円形の平面プランが確認され、乳児頭大から拳大の大きさの礫が詰まっている。土壙の深さは検出面から約40cmを測り、底面はスリ鉢状の凹面をつくる。埋土中の礫は土壙下面まで存在し、下面には木炭も混在している。最下面には焼土が確認される。

埋土中には遺物は確認されなかったが、検出状況から土壙1号との関連が考えられればほぼ同時期であることが想定される。

3) 土壙3号

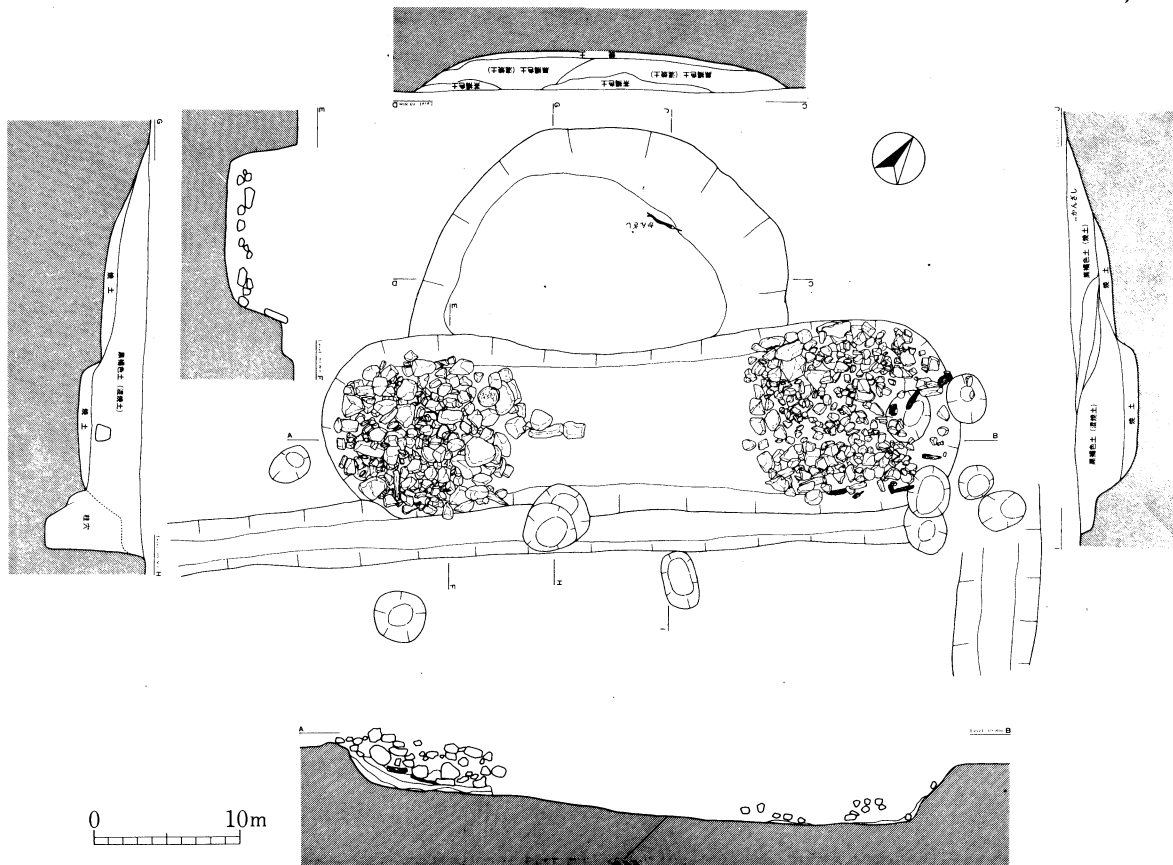
土壙3号は、A5区の掘立柱建物跡1号と重なって検出された。半分は用地外に延びるが、現状では幅0.9m、長さ1.1m、深さは約60cmの方形の土壙である。出土遺物は無く、しかも用地外のその主体が延びるため性格は不明である。

4) 土壙4号 (第53図)

土壙4号は、B7区に検出されたもので、長楕円形の土壙と半円の土壙が組合った土壙である。長楕円の土壙は、幅1.35m、長さ4.65m、深さ約50cmを測る。長楕円形土壙の主軸は、N度Eを指す。さらに、この土壙の中央部分には、半円形の土壙が接続している。半円形の土壙は長径2.50m、短径1.60m、深さ約30cmを測る。この二つの土壙は、一連の遺構と考えられる。

長楕円の土壙の両端には大小の礫を詰め、中央には灰及び焼土が堆積している。両脇の礫群中には、磨石や五輪塔の空風輪などに類似するものが混在している。さらに、中央に接続する半円形の土壙内には灰及び焼土が大量に堆積している。そして、この半円形の土壙の灰の中からは筭(214)が1点出土した。また、長楕円形土壙の南側に検出された溝状遺構1は、西側のB8区付近から傾斜しながらこの長楕円形土壙に並行して検出されており、なんらかの関係が考えられる。なお、この周辺には、多数の柱穴が検出されており、特に、長楕円形土壙の両端に確認された柱穴1及び2はこの土壙との関係を想定させる。

長楕円形土壙に伴って出土した遺物には、集石の中から磨石と五輪塔の空風輪がある。いずれも火気を帯びており、集石の一部として利用するため掻き集められたことも考えられる。磨石は縄文時代にみられるものである。また五輪塔の空風輪は供養塔の石塔であり、この近世の遺

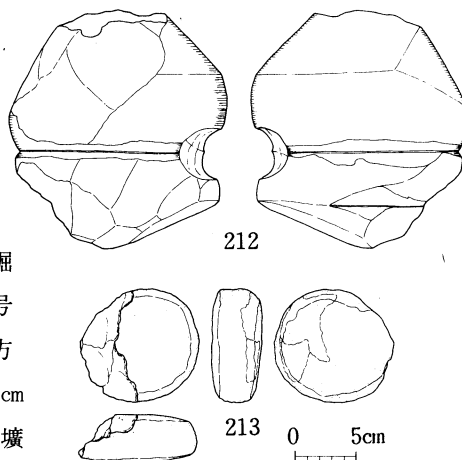


第52図 土壙4号

構には直接関係はない。

5) 土壙5号 (第56図)

土壙5号は、Z10区に検出されたもので、掘立柱建物2号と重複し、さらに一辺は土壙6号と切り合う状態で検出された。土壙5号は長方形の土壙で、長辺3.00cm、短辺85cm、深さ40cmを測る。主軸は、N-35°-Wの方向を向く。土壙の北壁から約80cmの付近に、杯・茶花・花生が出土した。これらは、副葬品の状態でまとまって出土した。



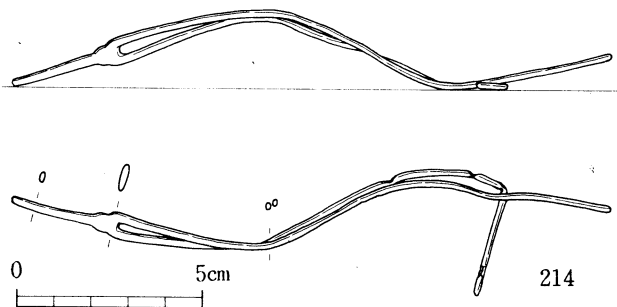
第53図 土壙4号集石内出土遺物

215 は杯で、口径7.4cm、高さ3.1cmで高台付きのものである。

216 は茶家で、胴部は球形を呈し、胴部最大径のやや上部に注口を付ける。注口は、曲線状に曲がるタイプである。肩には小穴を穿った蔓取付部をもつ。底部は破損しているが、一個の

足が残っており、その配置から三個の足が想定される。217は花生で、口径6.6cm、高さ14.3cmを測る。頸部はすぼまり、口縁部はラッパ状に開く。頸部から胴部にはなだらかなカーブをもって膨らみ最大胴部は下半でつくる。すぼまった頸部には、二か所に耳を付ける。

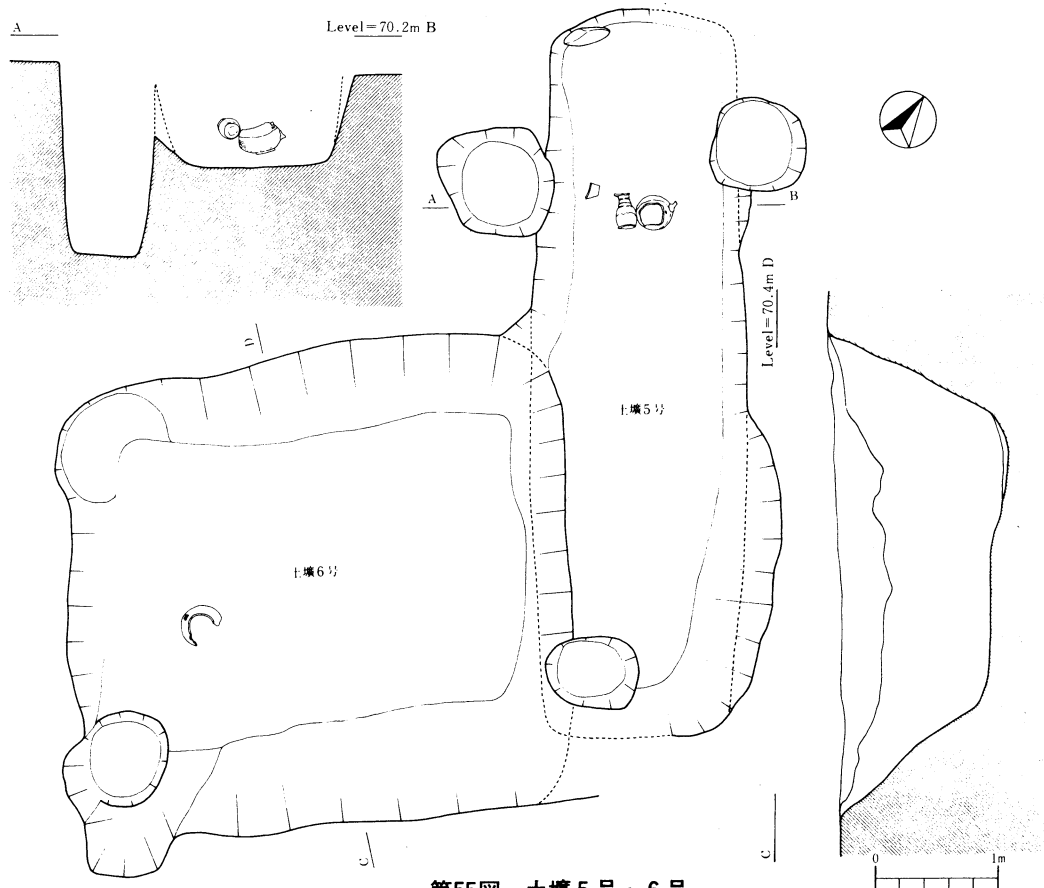
219は、茶家蓋で周辺から出土したものである。



第54図 土壙4号出土の筥

6) 土壙6号

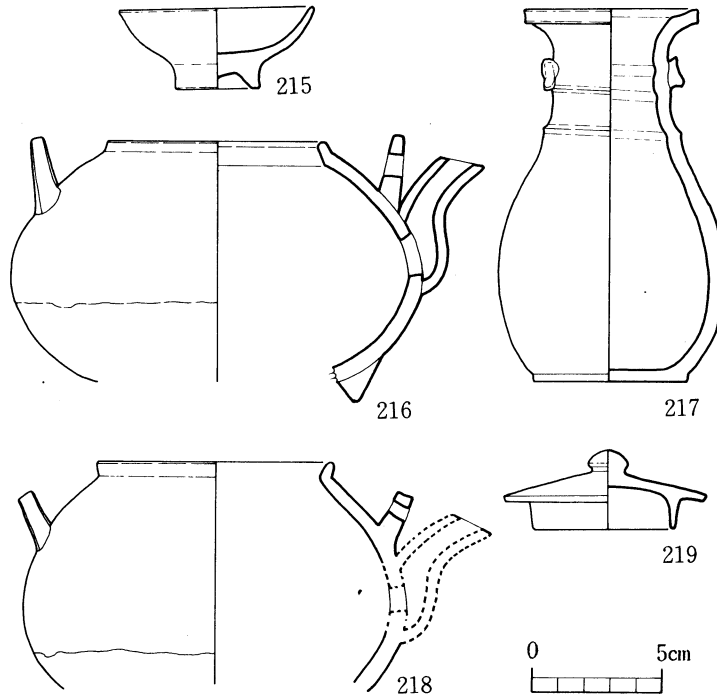
土壙6号は、Z10区で5号に隣接して検出された。ほぼ方形の土壙で南北約190cm、東西約200cm、深さ70cmを測る。土壙西側の壁隅では、掘立柱建物2の柱穴と重複している。西側壁から約1.00mのところ、218の茶家が出土した。この茶家は、注口と底部を欠くがほぼ216と同形である。



第55図 土壙5号・6号

3 溝状遺構

溝状遺構は、6本検出された。溝状遺構は、いわゆる溝の凹みをそなえたものを呼ぶ。溝の時期は、溝内の埋土や出土する磁器などから近世と考えられる。



第56図 土壌 5号・6号 出土遺物

1) 溝状遺構 1

B 9区からB 7区へ傾斜して走る溝である。B 7区では、土壌 4号と並行して走り、土壌 4号の先では南のA 7区へ直角に曲がる。幅約40cm、深さ約10cmを測るが、大きく削平を受けている。

2) 溝状遺構 2

A 7区に検出された南方向に走る溝である。南側は用地外に至り、B 7区側は削平をうけている。幅約30cm、深さ10cm程度の浅い溝である。

3) 溝状遺構 3

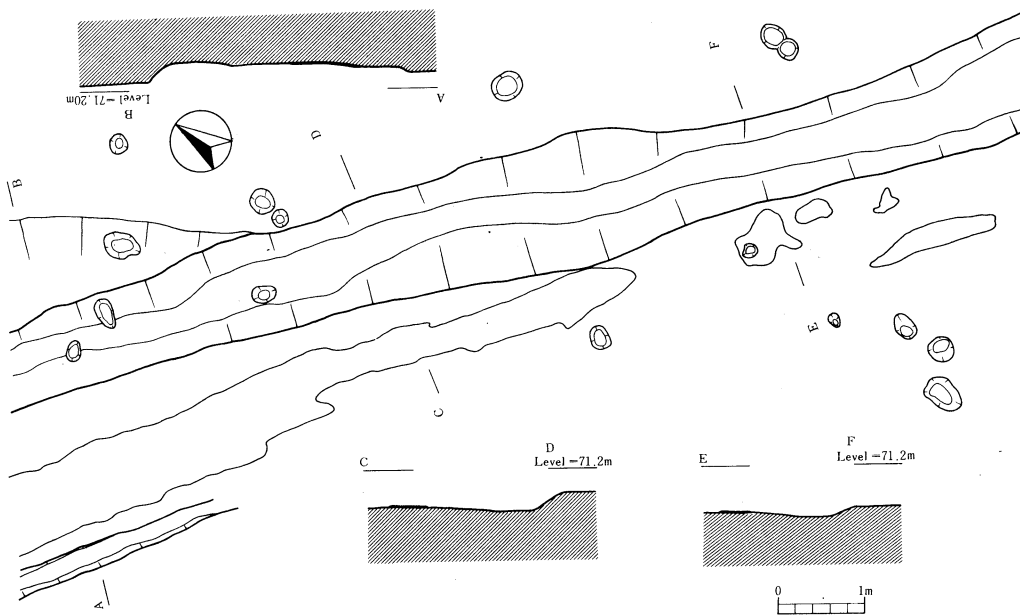
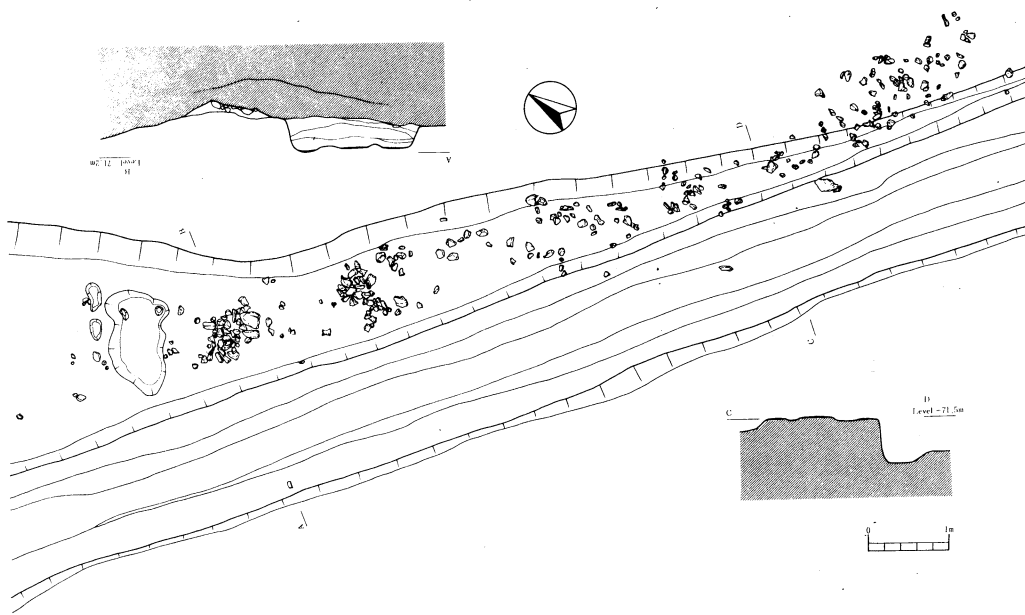
B 12区に検出された溝で、北西方向から南東方向に走る。A 12区では、畑の段で削平をうけている。幅約40cm、深さ15cmの細い溝である。

4) 溝状遺構 4

B 13区からA 13区にかけて検出され、北西方向から南東方向に走る溝である。

4 旧道

旧道は、B 13区からA 13区に溝状遺構 4の西側に平行して検出された。旧道の上面には、幅20～30cmに窪んだ小溝が120cm間隔に平行して二本検出されている。そして、この平行する二本の小溝の中央部は硬く踏み固められている。この小溝は荷車状の車輪の痕跡であり、中央部の踏み固められた部分が往來の道と想定される。時期は不明である。



第57图 旧道

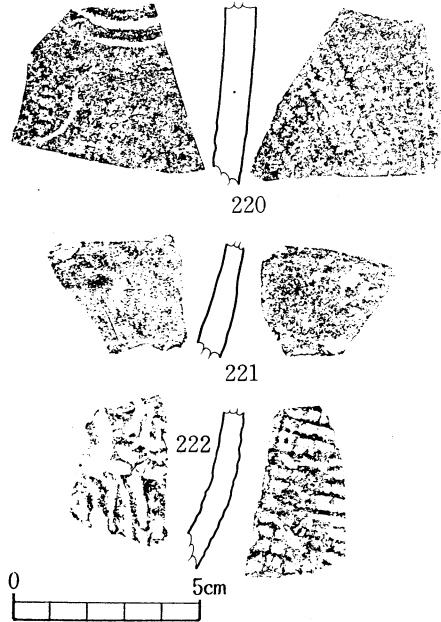
第3節 出土遺物

1 中世以前及び中世・近世の遺物

中世以前及び中世・近世に該当する遺物には、須恵器、土師器、把手、青磁、硯等がある。

1) 須恵器 (第59図-220~222)

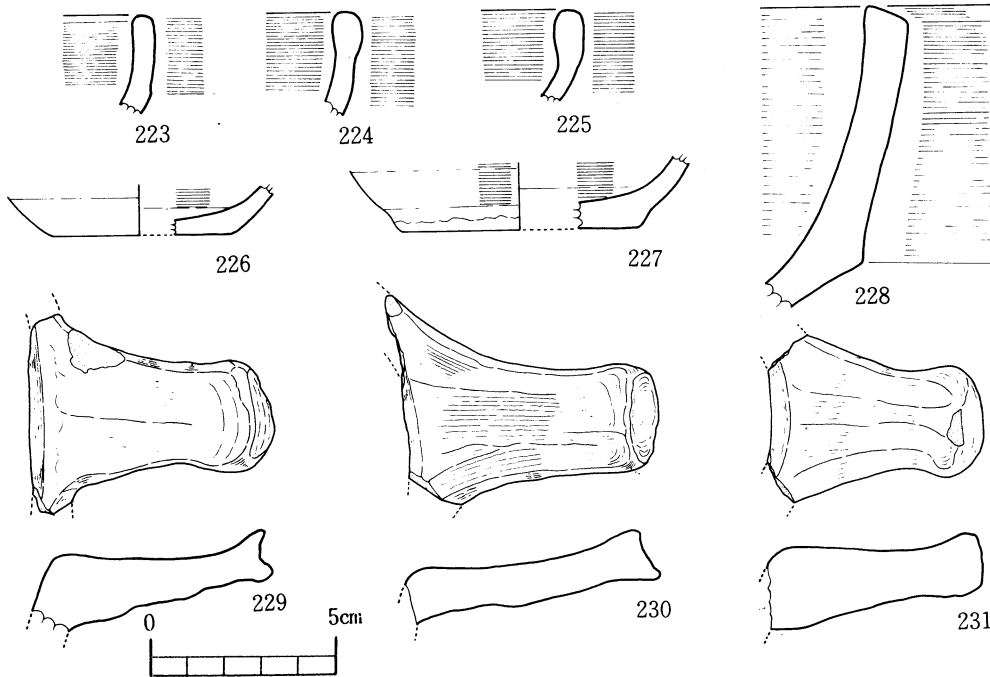
須恵器は、3点出土している。222はB13区の旧道に平行した溝4内の埋土から出土しているが、他の2点は表土出土である。いずれも胴部破片で、220は表面は格子の叩き目をナデ整形している。内面には同心円文の叩き目痕が残る。221は表裏とも丁寧なナデ整形がみられ、222は外面は格子の叩き目文で内面には同心円文の叩き目痕が施文されている。



第58図 須恵器

2) 土師器 (第60図-223~231)

223~225は環状の口縁部である。内外とも丁寧な刷毛目整形がみられる。226・227は環の胴部から底部片である。底部は糸切り底である。228は大形の鉢の口縁部と考えられる。内外とも丁寧な刷毛目整形で土師質である。



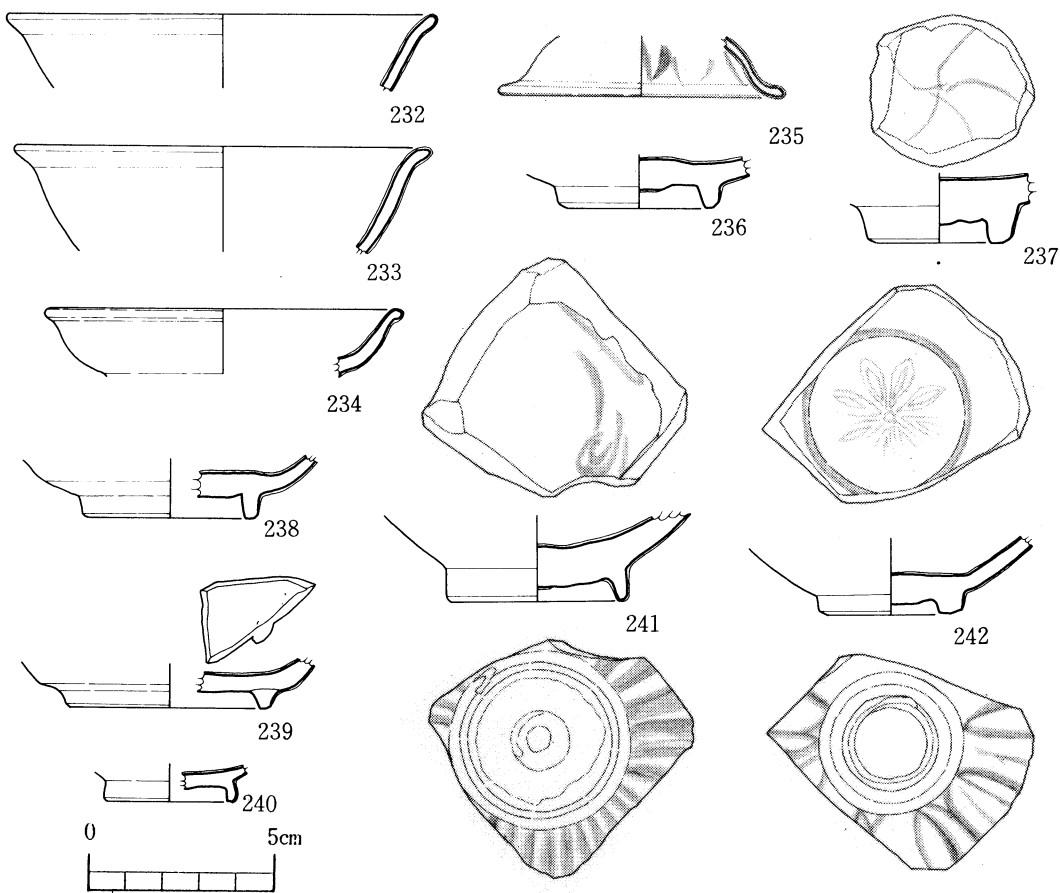
第59図 土師器・土師質土器

3) 把手 (第60図-229~231)

229~231は、陶質の土鍋の把手である。精選された粘土を用い、手捏ね造りで焼成も比較的良好である。本体はフライパン形の形状で、その片側に付く把手と考えられる。

4) 青磁 (第61図-232~242)

232~242は、青磁片である。B6~8区、B13区、B16区など調査区ほぼ全域から出土するが、すべて表土である。ほとんどが碗の口縁部と底部片であり、235は破片の形状から蓋に想定されるものである。232~234は口縁部片でいずれも端反り口縁である。磁胎は灰色で淡緑色の施釉となる。235は蓮弁文を浅く陰刻させる。236~242は碗の高台付底部である。高台は、幅が薄いものと厚いものがある。施釉は、高台側面や畳付まで施される。241は体部外面に蓮弁文を陰刻し、242は碗内面に蓮花文を陰刻する。

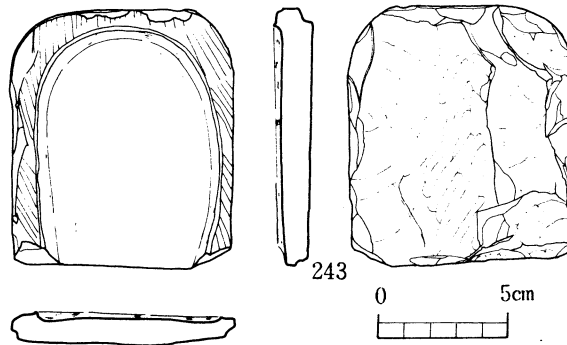


第60図 青磁

5) 硯 (第62図-243)

硯は、B16区の表層とIV層との間に出土した。

長さ9.9 cm、幅8.4 cm、厚さ1.4 cm、重さ214 gを測る。硯の石材は、凝灰岩質粘板岩である。硯の形態は、隅丸の方形を呈し、長辺の片方が切断して欠損し



第61図 硯

ている。欠損部の両端部には欠落痕が残り、中央は丁寧に研磨して補正してある

硯面(表)からみると、隅丸方形の硯縁に楕円形の陸がつくられるため硯縁部は一定幅ではない。陸と硯縁の境には1 mm程度の帯壁を削り出し、陸の縁を巡らせている。硯縁の表面には沈線の直線文で装飾が施されている。硯縁から陸の深さは、陸の中央部で2 mm程度を削り、硯縁近くは3~4 mmと深くなる。つまり、陸の中央は高く硯縁に近づくに従って低くなる。現状からは、水・墨を溜める海の付かないタイプと想定される。硯縁の側面は、丁寧に研磨が施されている。

硯陰(裏)は、石材を整形した状態で放置されており、中央付近は若干のケズリ整形は行なわれるものの研磨などは施されていない。

第V章 発掘調査のまとめ

中ノ丸遺跡は台地の東端に位置し、小さい谷を形成する迫田川を挟んで東隣の台地上には中ノ原遺跡が所在している。中ノ丸遺跡の主体の一つは、弥生時代中期末～後期初頭の住居址群で構成された集落である。そして、小谷を挟んで東側には同じ時期の集落（中ノ原遺跡）が並立することになる。中ノ丸遺跡は、弥生期の他に近世の掘立柱建物をはじめ近世墓やそれに関連すると考えられる特殊な集落遺構なども発見されている。遺跡はほぼこの二時期を中心に営まれているが、断片的には縄文時代や中世の遺物も出土しており、この台地はかなりの間利用されてきたことを窺い知ることができる。ここでは、中ノ丸遺跡について発掘調査の若干のまとめをしておきたい。

第1節 縄文時代について

本遺跡は弥生時代と近世を主体とするが、断片的ではあるが、縄文時代の遺物も出土している。しかし、遺構などは確認されていない。

出土遺物には、前期該当の土器と後期該当の土器及び石器、さらに晩期該当の土器がみられる。前期の土器は、刻みを施した微隆突帯文を巡らせた口縁部片で轟式土器に比定されるもの⁽¹⁾と沈線文系の胴部片で曾畑式土器に比定されるもの⁽²⁾がある。僅か二片の出土であるが、これらの遺物からこの中ノ丸遺跡の台地上には前期の遺跡から存在する可能性が高い。

後期の土器は、凹線文と刺突文を施こした指宿式土器に比定される口縁部片⁽³⁾と「く」の字口縁部片の市来式土器がある⁽⁴⁾。さらに口縁部外面に連続する凹点文を施文するものがあるが、これまでのところ類例がみられない新しいタイプのものである。

この時期に該当する石器は、総数12点の出土があった。内訳は、打製石鏃3本、磨製石斧1本、磨石1本、敲石3個、凹石2個、石皿2個、不明石器1個と断片的な出土である。

晩期の土器は、僅かな拡がりではあるがB19区を中心に出土している。総数36点の出土があったが、そのうち実測可能な破片は深鉢の口縁部2片と浅鉢2片である。断片的な資料ではあるが、その特徴から入佐式土器に該当することが考えられる⁽⁵⁾。同時期の入佐式期には東隣の中ノ原遺跡で多量の遺物と共に住居址や土壇・集石等の遺構が検出されており、この期を補強する資料となろう。

第2節 弥生時代について

弥生時代は、僅か12mの狭い調査区幅にもかかわらず、住居址等の各種の集落遺構と土器をはじめ各種の遺物が出土した。遺構は、住居址4基、掘立柱建物跡1棟、円形周溝2基、土壇5基などが検出された。特に、この時期の円形周溝遺構は、この地では初見でありその性格や集落内での位置付けなど注目されるものである。

1 遺構について

遺構のなかで住居址は4基確認されたが、全形を知りうる住居址は1号の1基のみである。しかし、用地外に広がる他の住居址を併せ考えると、この周辺には多数の住居址が存在しかなりの規模の集落を構成していたことを窺い知ることができる。

検出された住居址は、大きく二つの形態に分けられる。その一つの形態は1号・2号・4号住居址で、方形の平面形に「張り出し部」を備えた住居址である。そして、もう一つは3号住居址で、基本的には円形住居址で検出されるが、多角形の中央部にそれぞれベッド状の「張り出し部」を備え間仕切りを持ったいわゆる「花卉形住居」と呼称されるタイプである。これらの住居址は、出土遺物に形態差がみられない点やそれぞれの住居址間の切り合いがみられない点などから同時期に設けられた可能性が高い。

二つの住居址は、そのプランの形態から単純に前者を「方形住居址」に後者を「円形住居址」とみることもできる。本遺跡では、3号住居址が「円形住居址」にあたり、他は「方形住居址」とすることができる。住居址の大きさをみると方形を呈した1号住居址は基本的には4.40×4.80m（張り出し部を含めると6.10×5.45m）を測り、円形の3号住居址は径6.80mを測るもので円形住居址のプランのほうが一回り大きい。多数の住居址が検出された鹿屋市王子遺跡では、総数27基中、7基が円形住居址に該当する⁽⁶⁾。しかもこれら円形住居址は7m級の大きさで、他の方形住居址と比較すると平面プランが一回り大きい。この円形住居址は王子遺跡では総数の25%程度の割合を占めているが、本遺跡でも4基に1基という王子遺跡と同等の割合で検出された。この住居址の形態の違いは、おそらく集落内での性格の異なる建物を示しているのではなかろうか。

全形及び半形が検出された1号・2号住居址からは、各種の遺物が出土している。特に、1号住居址からは多量の土器のほか石器・石器素材・土製勾玉・有孔軽石製品など多彩な遺物の出土がみられた。石器には凹石が3個出土し、石器素材には磨製石鏃の未製品が5個含まれ石鏃製作の行程が類推できる資料として注目される。なお王子遺跡では、凹石が3基の住居址から出土し磨製石鏃は12基の住居址から出土している。しかもその9号住居址からは、未製品を含めて13本の多量の磨製石鏃が出土している。王子遺跡の住居址出土の石器の組み合わせは凹石と磨製石鏃という形となり、本中ノ丸遺跡でも同様の傾向がみられ一致する。この時期のこの地方の遺跡からは石庖丁など積極的な稲作資料が見出せない点を考慮すると、台地上に立地する王子遺跡や本遺跡などの出土遺物の組合せは非常に特徴的であり、社会環境や生産手段を再考しなければならない。

本遺跡では、「円形周溝」と呼称した遺構が2基検出され注目された。さらにその後の調査の前畑遺跡でも1基発見され、注目せざるをえない現状である。

円形周溝1号は直径3.90mを測る真円のプランを呈するが、上面の削平が強く周溝の下面のみが残存している。周溝の幅は18～25cmで深さは8～12cmを測り、流入埋土からは僅かではあるが4点の遺物が出土した。円形周溝2号は直径3.80mを測る真円のプランで、1号とほぼ同

様の大きさである。しかし、周溝の幅は50～30cmで深さは50～35cmと比較的保存良好な形で検出された。周溝からは17点の遺物が出土しているが、出土土器片から判断すると住居址などとほぼ同時期の山ノ口式期に比定されるものである。なお、周溝が取り囲む内部からは埋葬施設など痕跡は検出されず、また周溝内からも祭祀に関係するような遺物の出土や出土状態は確認されなかった。今のところ円形周溝遺構の性格は、不明である。同時期の類例を探すと、王子遺跡の23号住居址として取り上げた遺構で⁷⁾、径4.15～4.24mの真円のプランを呈するもので周溝幅33～40cmで深さ7cmの規模のものがある。王子遺跡の報告書でも「・・他住居址と比べ特異な形態をとり、特殊遺構とし扱うべきであつたが、現在、他に類例の知見がないため、いちおう住居址に分類しておいた。今後の課題である。」と他住居址と比較して特殊性を述べている。この遺構も、ほぼ同時期で周溝の形態は酷似するものである。

その他の遺構に柱穴（掘立柱建物跡）と土壇がある。柱穴群は確実に掘立柱建物としてまとまるものではないが、柱穴群の存在や配置から掘立柱建物が存在したことが想定される。

2 遺物について

上面の削平が激しいため、住居址などの遺構以外は出土遺物は極端に少ない。出土遺物は、遺構を含めて土器・石器・装飾品（土製勾玉・有孔軽石製品）などがある。出土土器は、甕形土器と壺形土器が大半を占める。そのほか、鉢形土器や埴形土器が少量出土している。

甕形土器は、口縁部が逆「L」字状に外反するタイプと「く」字状に外反するタイプの二者がみられるが「く」字状に外反するタイプが主体を占めている。逆「L」字状口縁は僅かな出土であるがこのタイプは従来若干古く位置付ける傾向にあり、時期差を示すものか今後の課題といえる。なお3号住居址においては両者が伴出しており「く」字状に外反するタイプの口縁部直下には3条程度の突帯文を巡らせ、底部は底面が充実した脚台状のタイプである。

壺形土器には、大きく外反して比較的長い口縁部をつくるタイプと直線的に立ち上がり比較的短い口縁部をつくるタイプがある。そして前者のタイプには特徴的な二叉状口縁をつくるものもあり、後者には口縁部は直行して平坦な口唇部をつくり口縁外面の若干下がったところで口縁拡張部をつくり口縁部とするタイプに分かれる。壺形土器の底部は、平底である。

本遺跡で量的に安定した出土がみられる甕形土器と壺形土器は上記のバリエーションが捉えられるが、ほぼ同時期のセット関係とみることができ、その特徴から王子遺跡の時期に比定することができる。

そのほかの器種には、小形の壺形土器や鉢形土器と埴形土器がある。

小形の壺形土器の口唇部の平坦面には、ヘラ描き沈線を施すタイプと櫛描波状文を施すものやさらに凹線文を施すタイプが存在している。口縁部で極細片のため器形は不明であるが、これらの施文は在地の山ノ口式土器にはみられないもので外来的要素の一つといえる。中ノ原遺跡や前畑遺跡などでは明確な瀬戸内系土器や北部九州系土器が確認されており⁸⁾、この時期の交流を知る貴重な資料の一つといえる。

遺構出土以外の石器には、磨製石鏃4点と砥石4点があり、いずれも表層（表面採集）出土

である。砥石には、磨製石斧転用の特殊な砥石も存在する。中ノ丸遺跡出土の石器の器種は、すでに説明した住居址出土の磨製石鏃（未製品を含む）と凹石があり、一般遺物では砥石が加わった。石器は、遺跡の削平が激しいこともあってか出土量及び器種が極端に少ない。

第3節 中・近世について

中世～近世の遺構・遺物も出土している。中世或はそれ以前については、須恵器や土師器などの遺物は出土するが遺構は検出されていない。

1 近世の遺構について

近世の遺構は、掘立柱建物（2棟以上）、土壇（6基）、溝状遺構（6本）、古（旧）道（3本）などが検出された。

特に、Z A 9区～Z A 10区には大規模な掘立柱建物が検出されている。調査面積が限定されるため建物の規模の全貌は明らかではないが、柱穴の規模や間取りから考えるとかなりの規模の建物が想定される。関連する土壇等の遺物から江戸時代後半以降の時期が考えられるが、礎石をもつ建物ではなく掘立柱の建物である点が注目される。

土壇は6基検出されたが、それぞれ形態は異なっている。1号・2号及び4号は、火葬場的性格の遺構と考えられる。特に4号は、遺構の性格が把握できる状態で検出されている。4号の長楕円の土壇は、幅1.35m、長さ4.65m、深さ50cmを測る。土壇内の両側には礫が積み上げられ、土壇内の中央とそれに接続する半円形の土壇内には焼土と灰が充満して推積していた。さらに灰土内からは筭が出土している。また土壇の周囲にはピット（柱穴）も確認され、この遺構には上屋があった可能性も充分考えられる。このような点から火葬場遺構と想定しておきたい。これまで、一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う王子地区の西祓川遺跡でも同様の遺構が確認されており⁹⁾、少なくともこの地域においてはこのような遺構が存在することが明らかとなった。この遺構の明確な性格及び時期等については、今後の資料の増加をまちたい。

土壇5号は、掘立柱建物や6号土壇と重複して完全な形では検出されていないが、その形態から近世土壇墓の可能性が高い。土壇5号は長辺3m×短辺85cmと比較的大きいが、土壇内の北壁から約80cmの位置に埴・茶家・花生などが副葬品的な状態でまとまって出土している。

2 中世・近世の遺物について

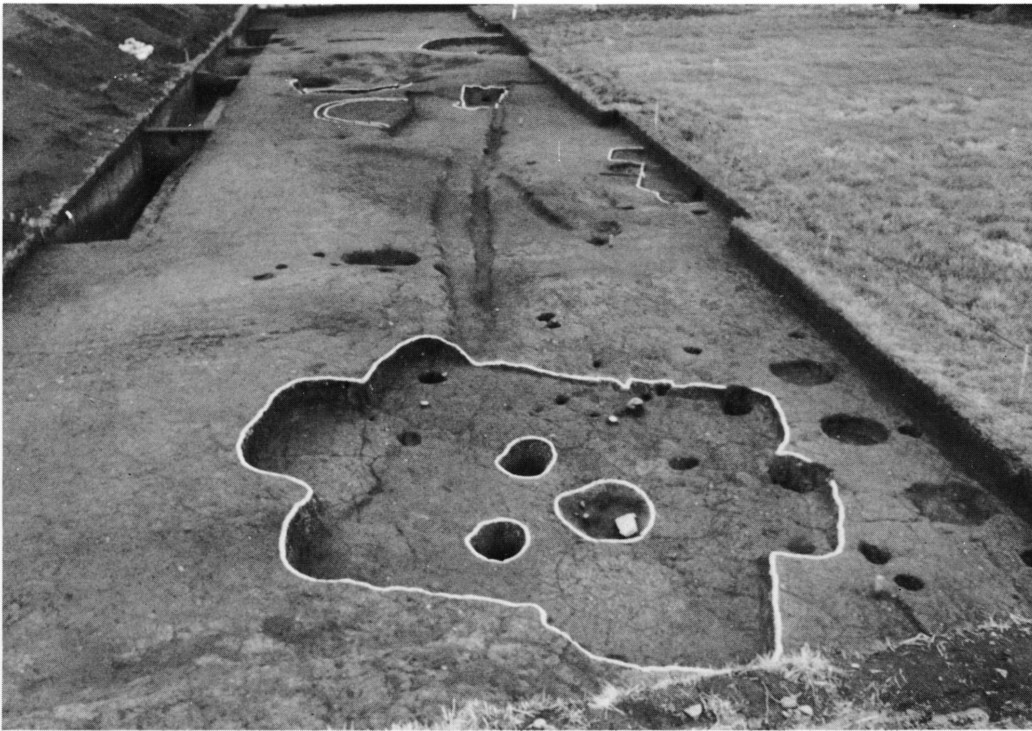
中世或はそれ以前の遺物には、須恵器と土師器と青磁がある。いずれも表層からの出土で遺構との係わりはみられない。

近世の遺物には、遺構から出土した陶磁器や筭などのほか土鍋の把手や硯が出土している。筭と把手は、ほぼ同類が鹿児島市大龍遺跡で出土している¹⁰⁾。それによると把手は、フライパン状の片側に付く把手である。ほぼ江戸時代の後半に位置付けられるものである。硯は、軟質の凝灰岩質粘板岩に装飾加工したものでこれもほぼ同時期のものと考えられる¹¹⁾。

以上、簡単に中ノ丸遺跡の調査の成果についてまとめたが、各遺構や各遺物の遺跡間の問題や評価については「分析・考察」編で取り上げたい。

註 (引用文献)

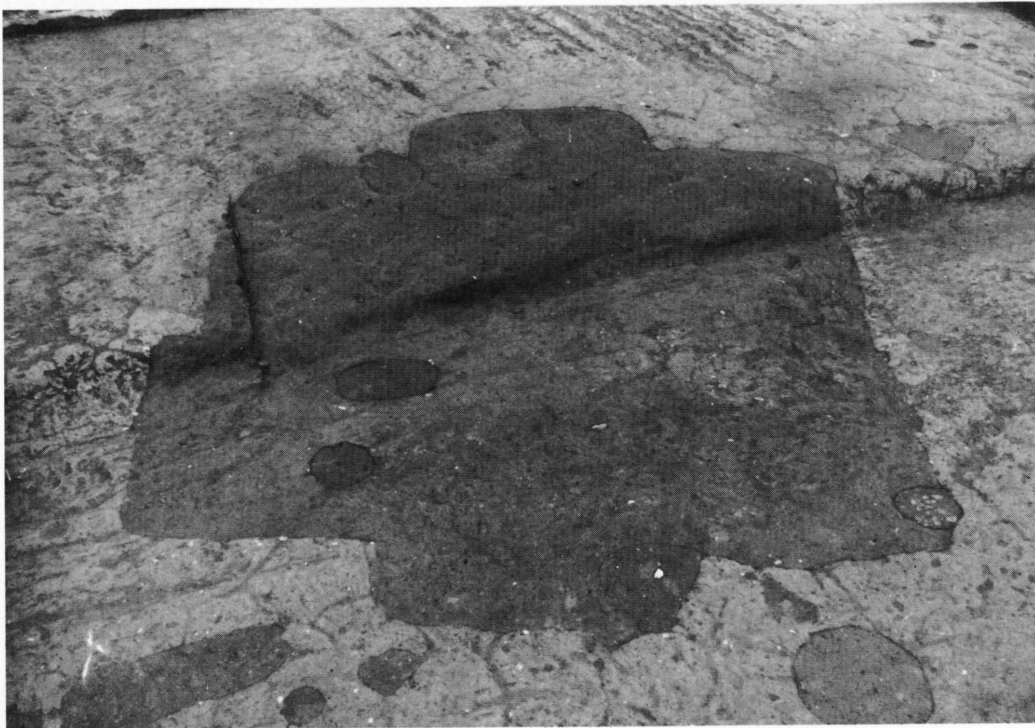
- (1) 松本雅明・富樫卯三郎 1961「縄式土器の編年」『考古学雑誌』47-3
宮本一夫 1989「縄B式土器の再検討—京都大学文学部博物館収蔵資料を中心にして—」
『肥後考古』第7号
- (2) 乙益重隆 1965「九州西北部—縄文時代—」『日本の考古学』Ⅱ
江本直 1988「縄文時代前期「曾畑式土器」について—曾畑—」『熊本文化財調査報告書』第100集 熊本県教育委員会
- (3) 京都帝国大学考古学研究室 1921「薩摩國揖宿郡指宿村土器包含層調査報告書」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第六冊
- (4) 河口貞徳 1957「南九州後期の縄文式土器—市来式土器—」『考古学雑誌』42-2
本田道輝 1981「市来式土器—縄文土器Ⅱ—」『縄文文化の研究』4
- (5) 河口貞徳 1970「遺跡発掘調査報告」『末吉町郷土史』
- (6) 鹿児島県教育委員会 1985「王子遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(34)
- (7) 報告書では、23号住居址と分類しながらも特殊遺構ではないかと考えている。方形の竪穴の床面に円形周溝状の遺構が掘り込まれている。
- (8) 前畑遺跡では、在地系土器の山ノ口式土器の包含層に混入して丹塗暗文の袋状口縁土器が出土し住居址から山ノ口式土器に共伴する状態で須久式土器の甕形土器や瀬戸内系の矢羽透かしの高坏の脚部等が出土している。
- (9) 鹿児島県教育委員会 1985「西祓川遺跡—王子遺跡(付)—」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(34)
- (10) 鹿児島市教育委員会 1979「大龍遺跡」『鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書』(1)
- (11) 硯については、書道家の楠田靖夫(始良町歴史民俗資料館館長)氏に御教示頂いた。



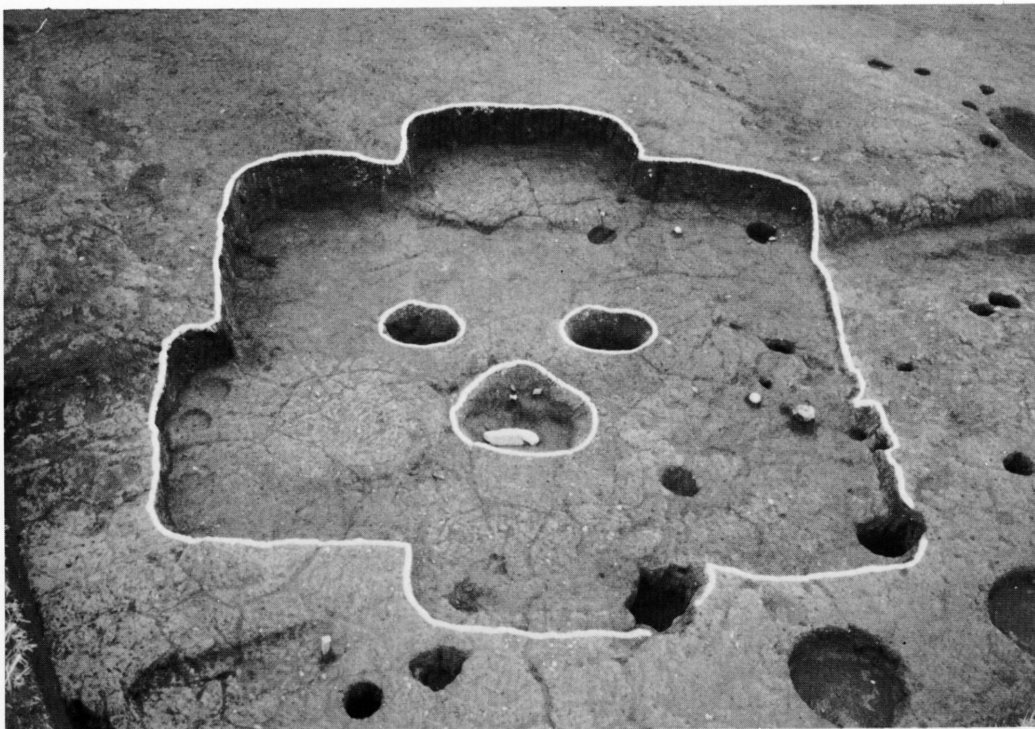
1. 中ノ丸遺跡全形 (西から)



2. 中ノ丸遺跡全形 (東から)



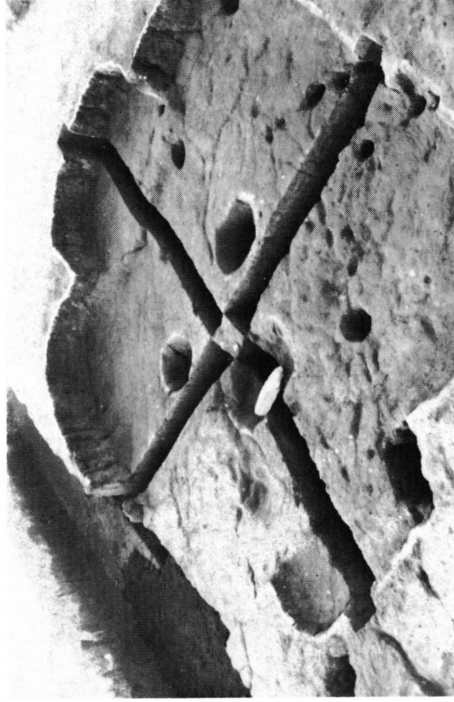
1. 住居址1号検出状況 (南から)



2. 住居址1号 (南から)



2. 同 軽石製品出土状況



4. 同 住居址切開状況

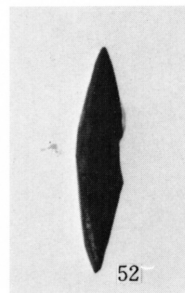
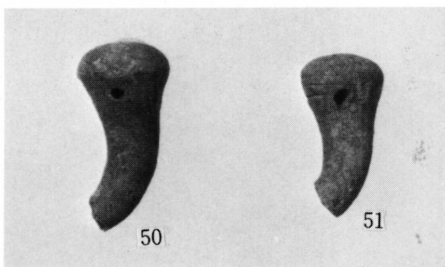
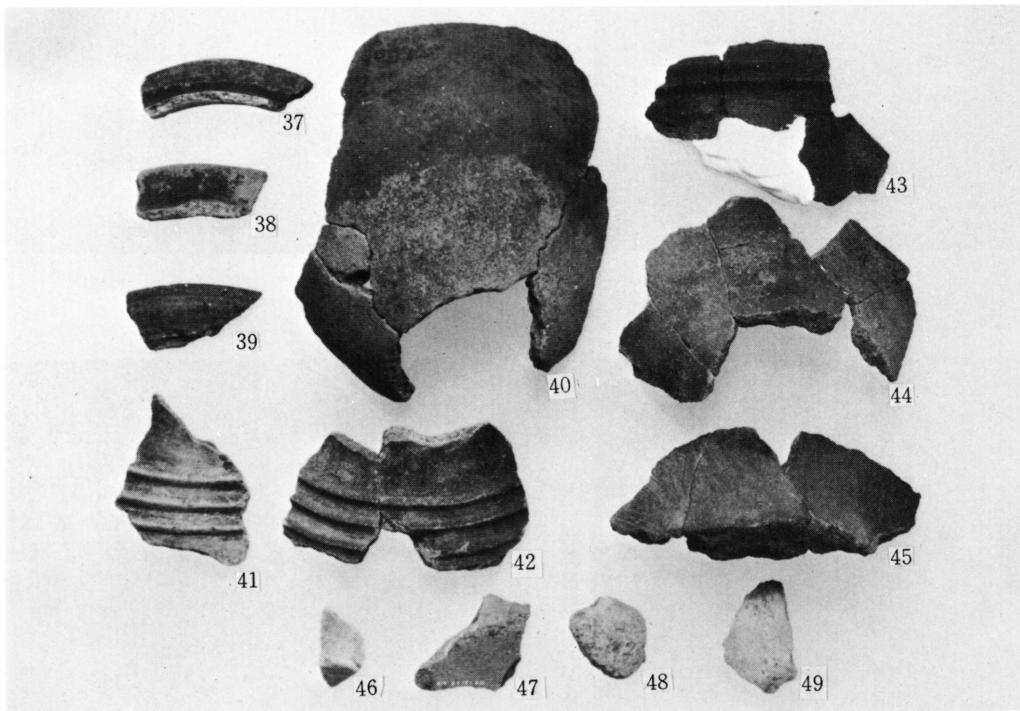
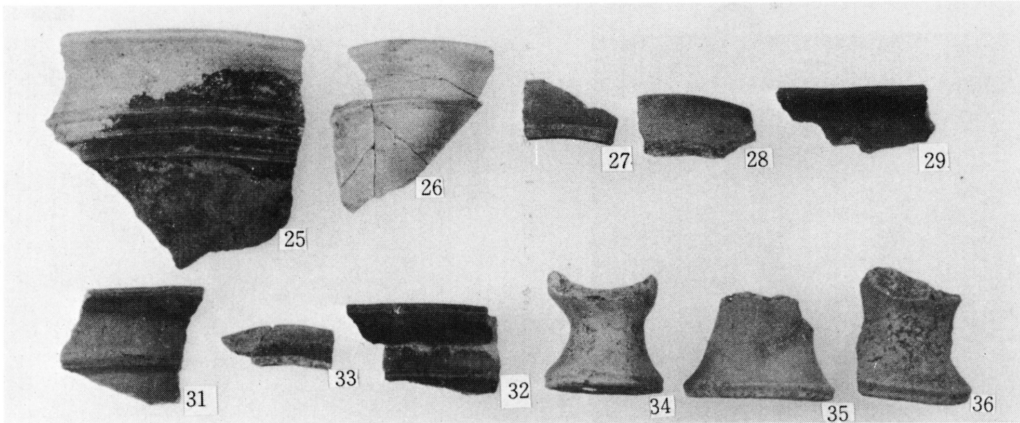


1. 住居址1号の中央ピット検出状況

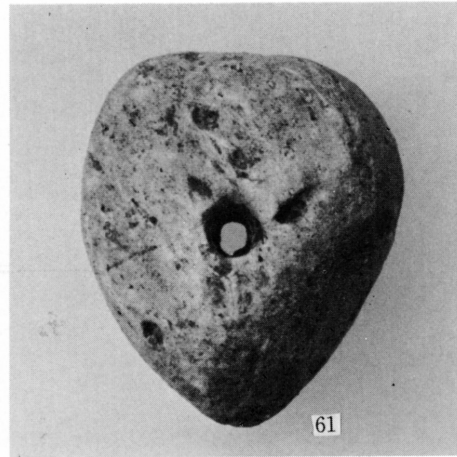
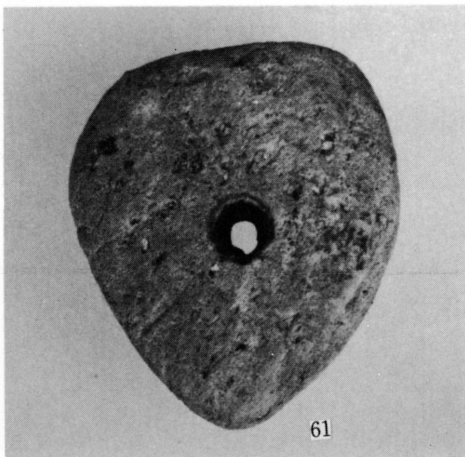
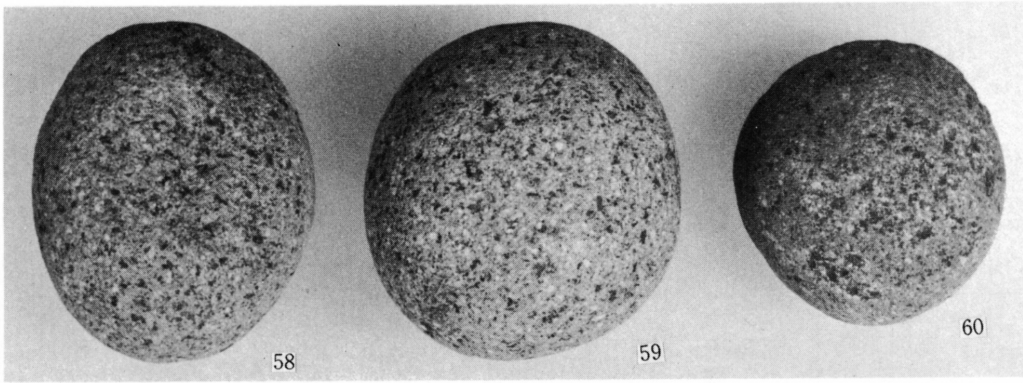
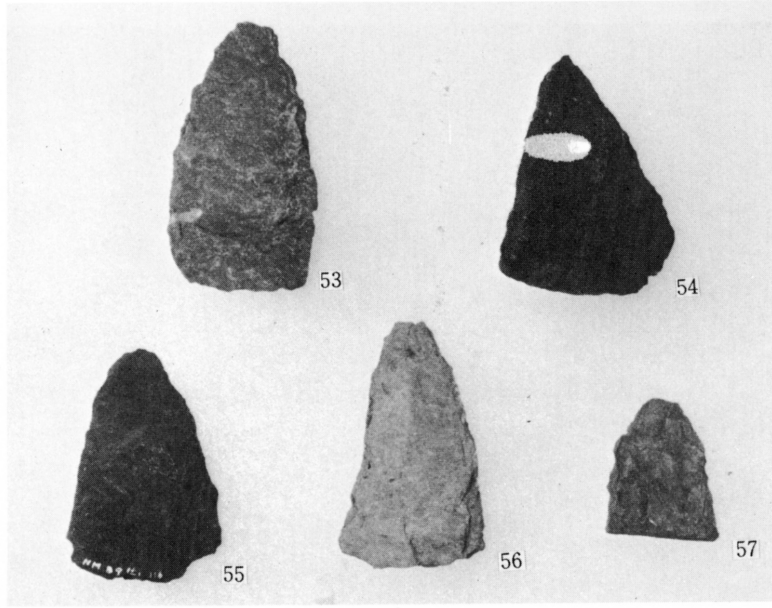


3. 同 柱穴と土器の検出状況

图版 4



1. 住居址1号出土遺物(1)



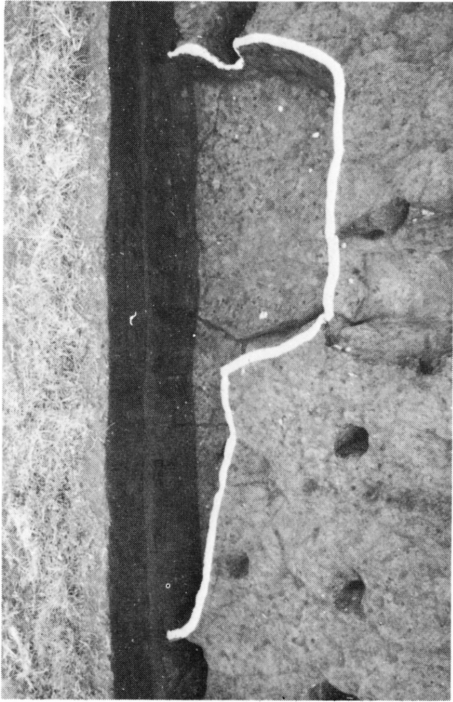
1. 住居址1号出土遺物(2)



1. 住居址 3号 (南から)



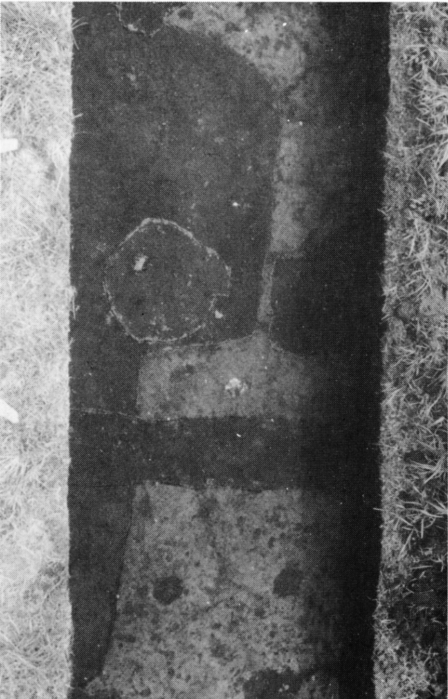
2. 住居址 3号 (南から)



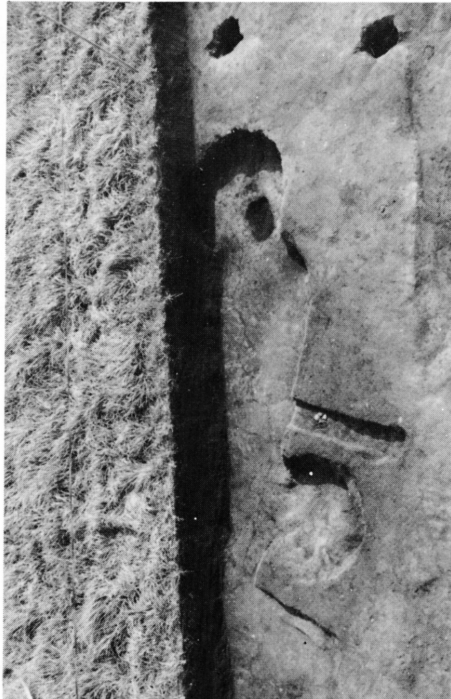
2. 住居址4号 (西から)



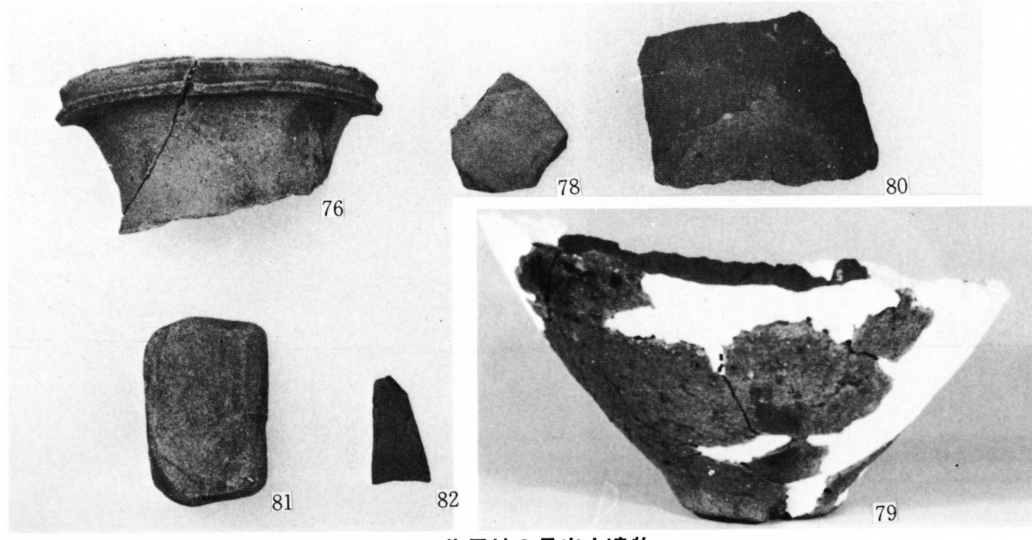
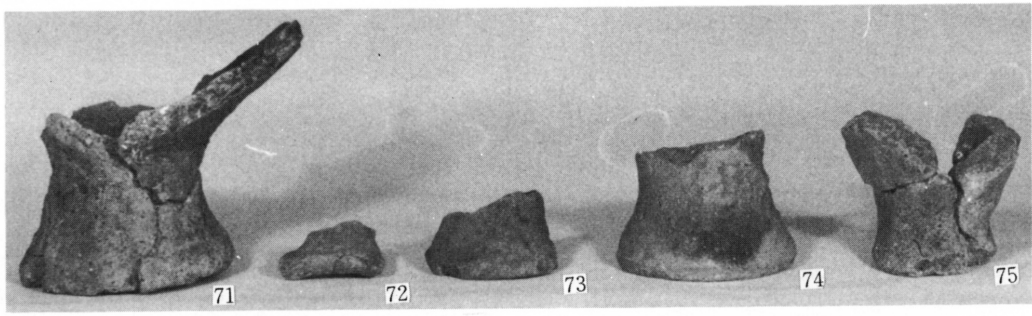
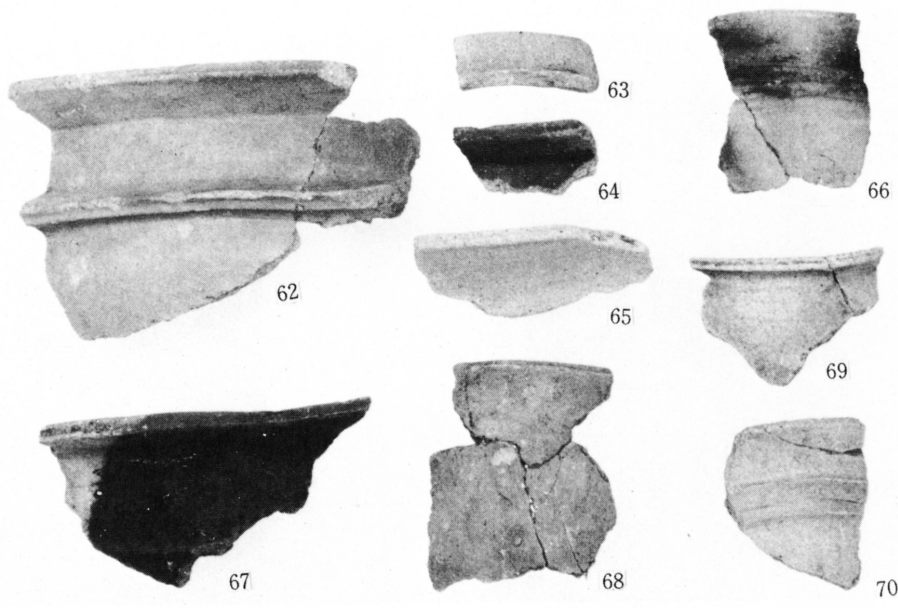
4. 円形周溝2号溝埋土断面 (南から)



1. 住居址4号検出状況 (西から)



3. 住居址2号 (北から)



1. 住居址 3 号出土遺物



1. 円形周溝1号 (北から)



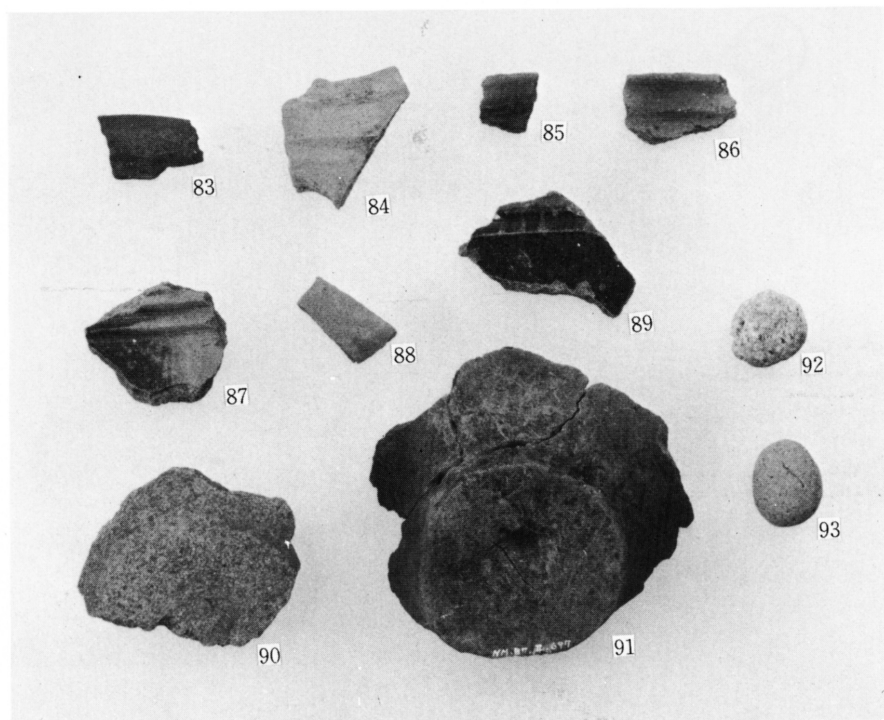
2. 円形周溝2号 (北から)



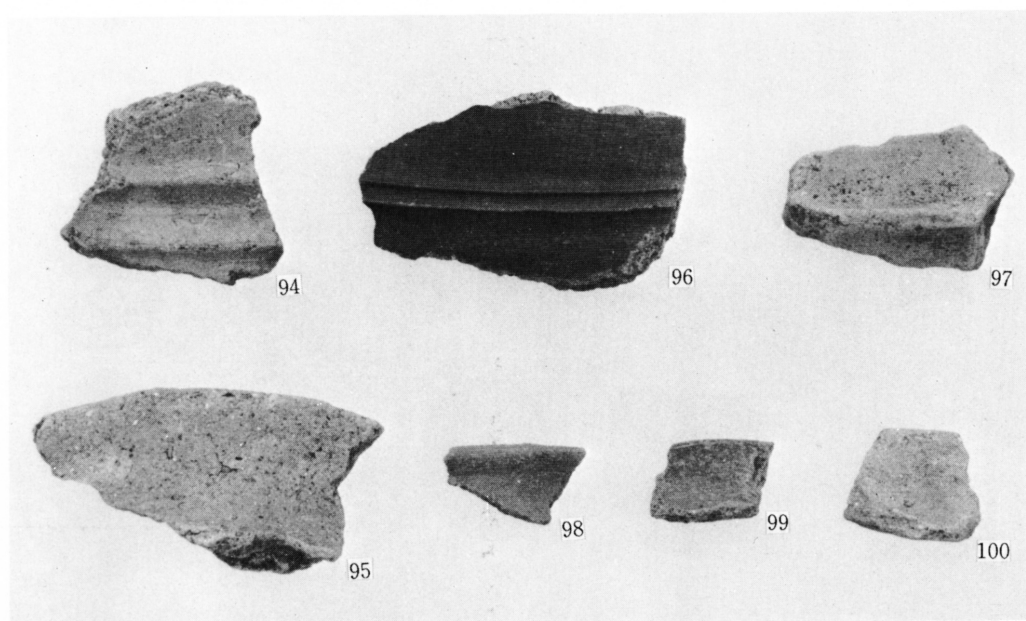
1. 土壤3号~6号



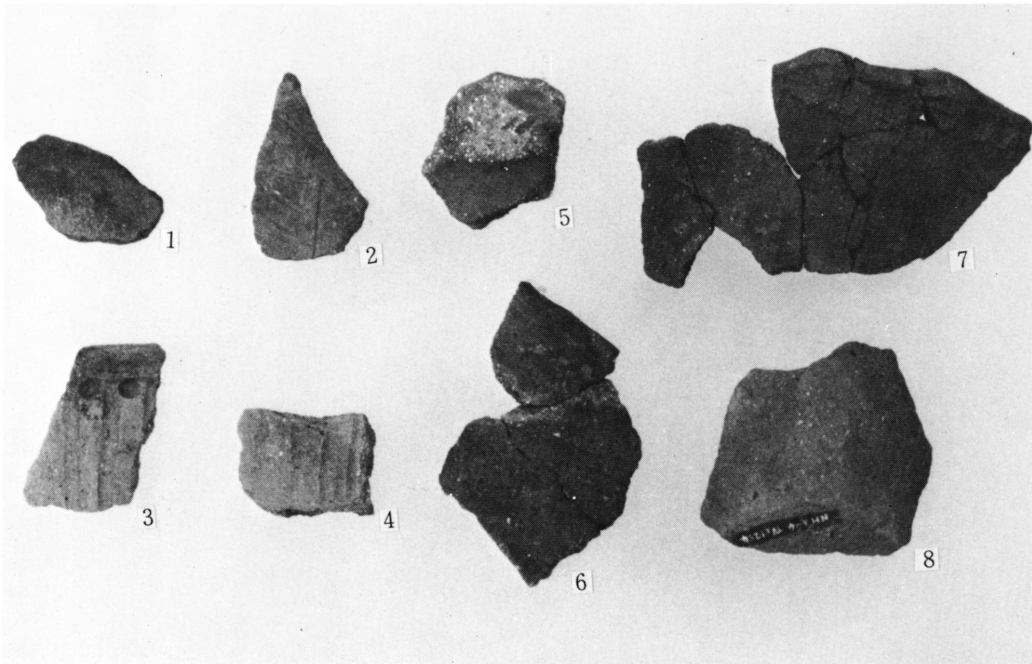
2. 土壤1号



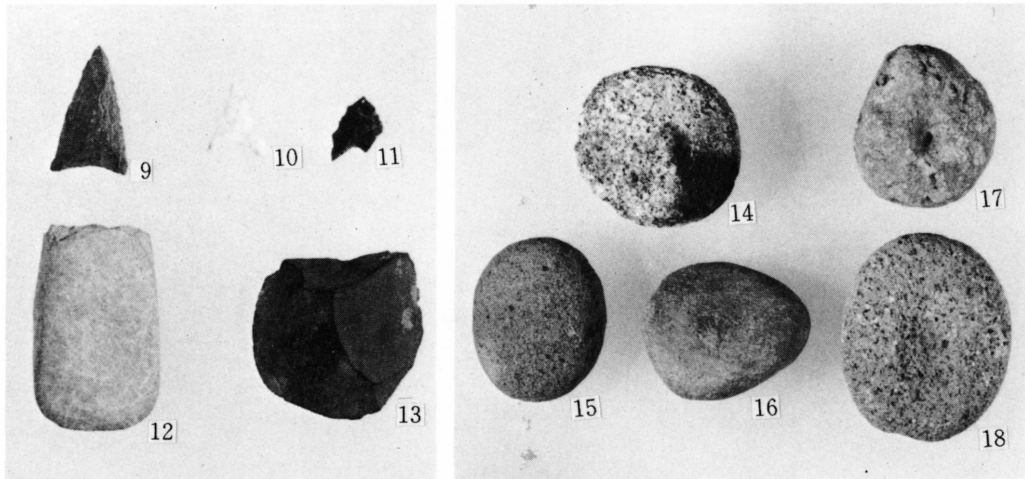
1. 円形周溝出土遺物 (83~93)



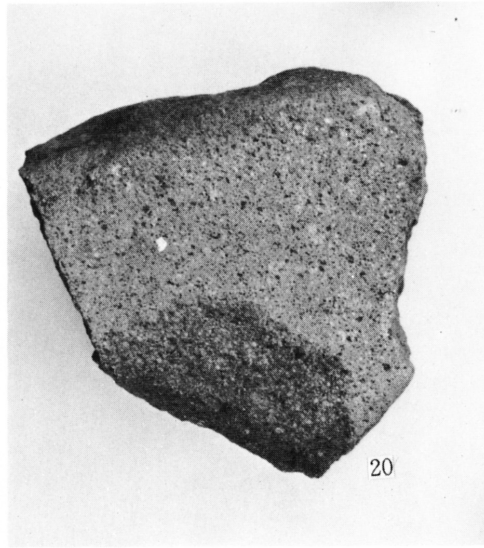
2. 土壙出土遺物 (94~100)



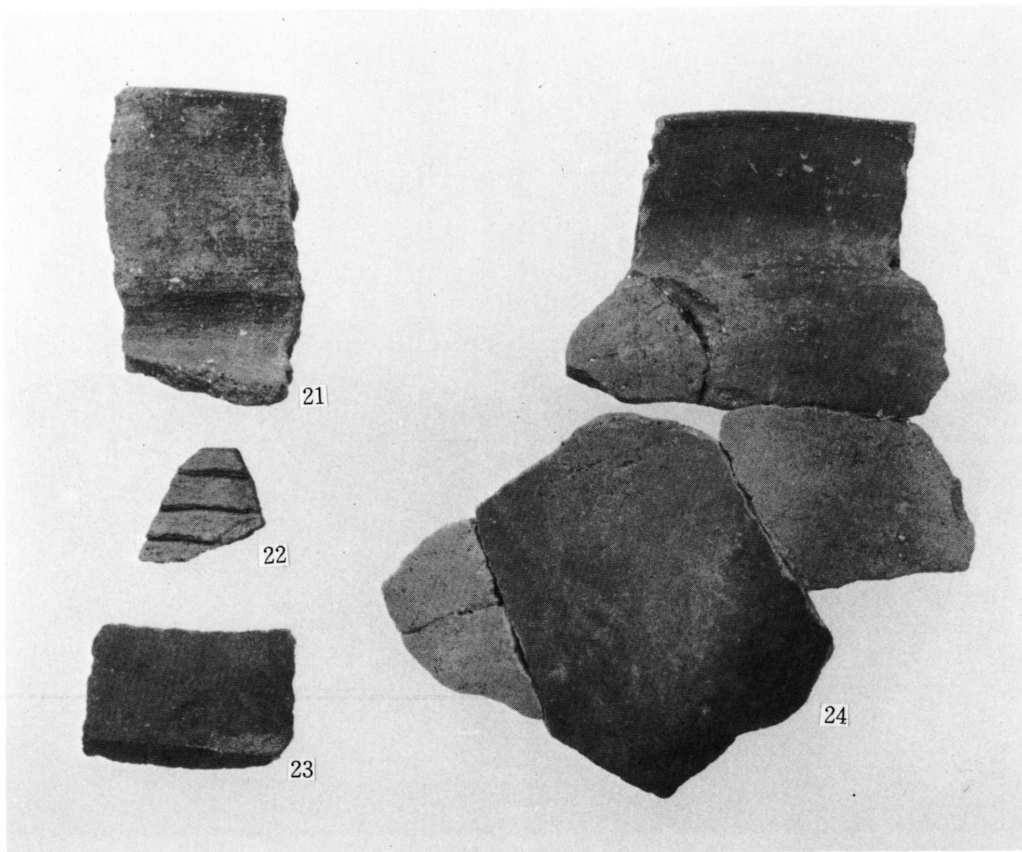
1. 縄文土器(1) (1~8)



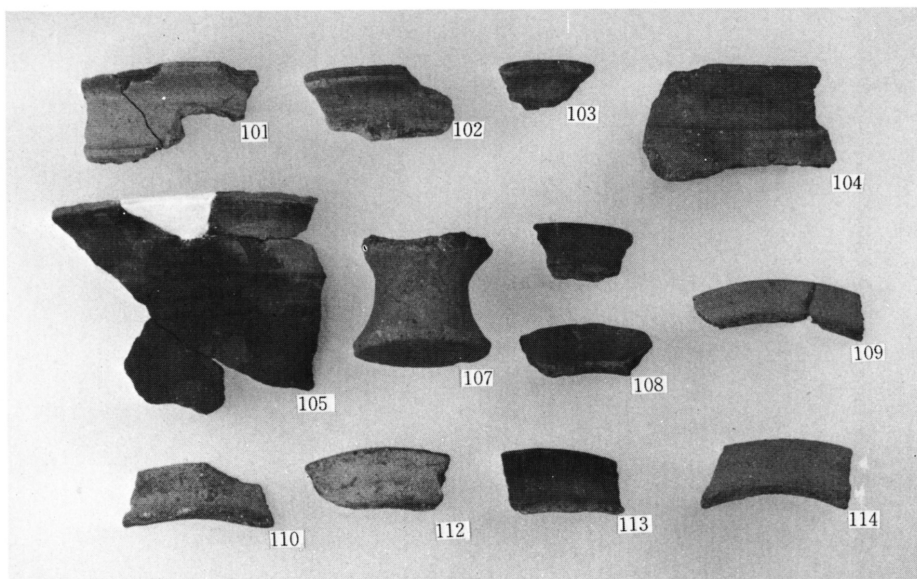
2. 縄文石器(1) (9~18)



1. 縄文石器 (2)



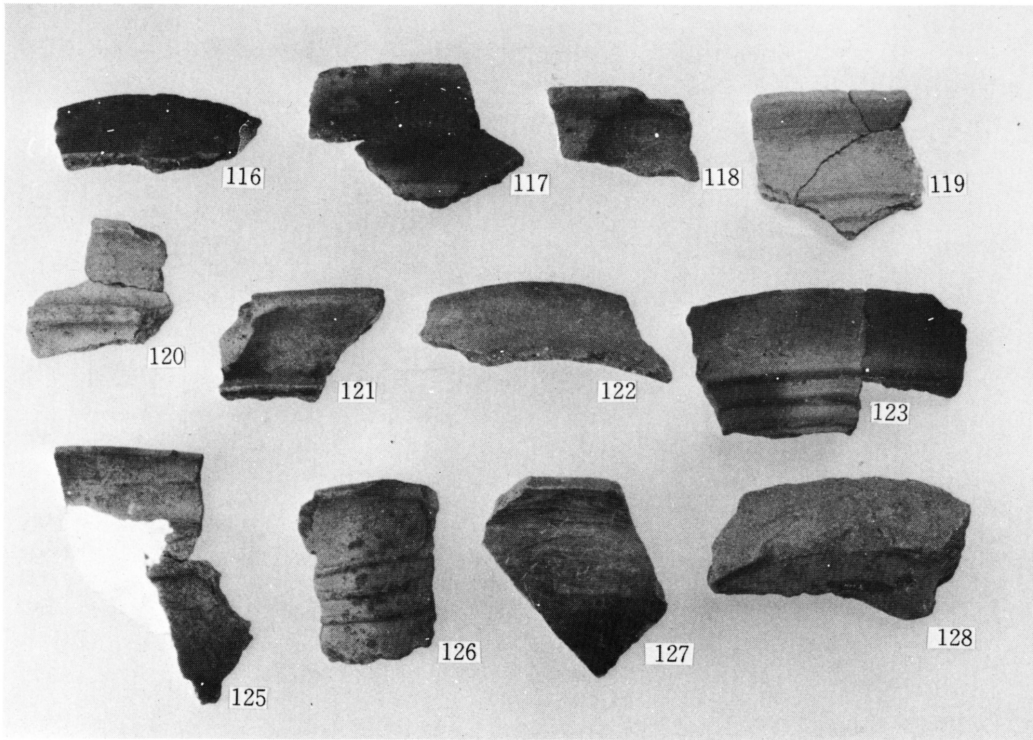
2. 縄文土器 (2) (21~24)



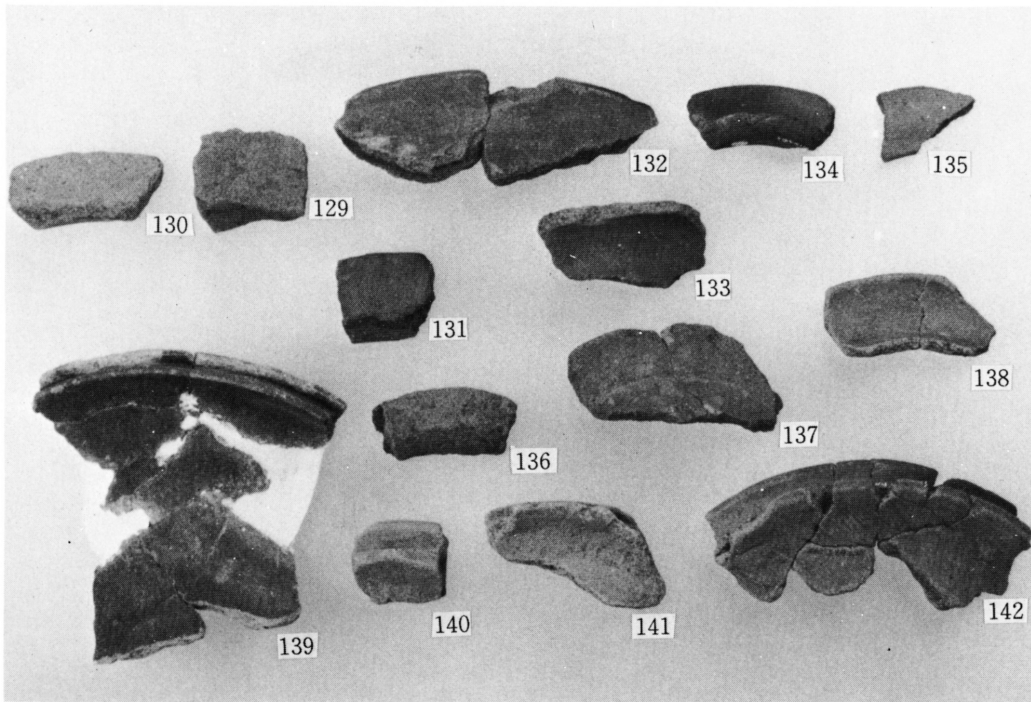
1. 弥生土器 (1) (101~115)



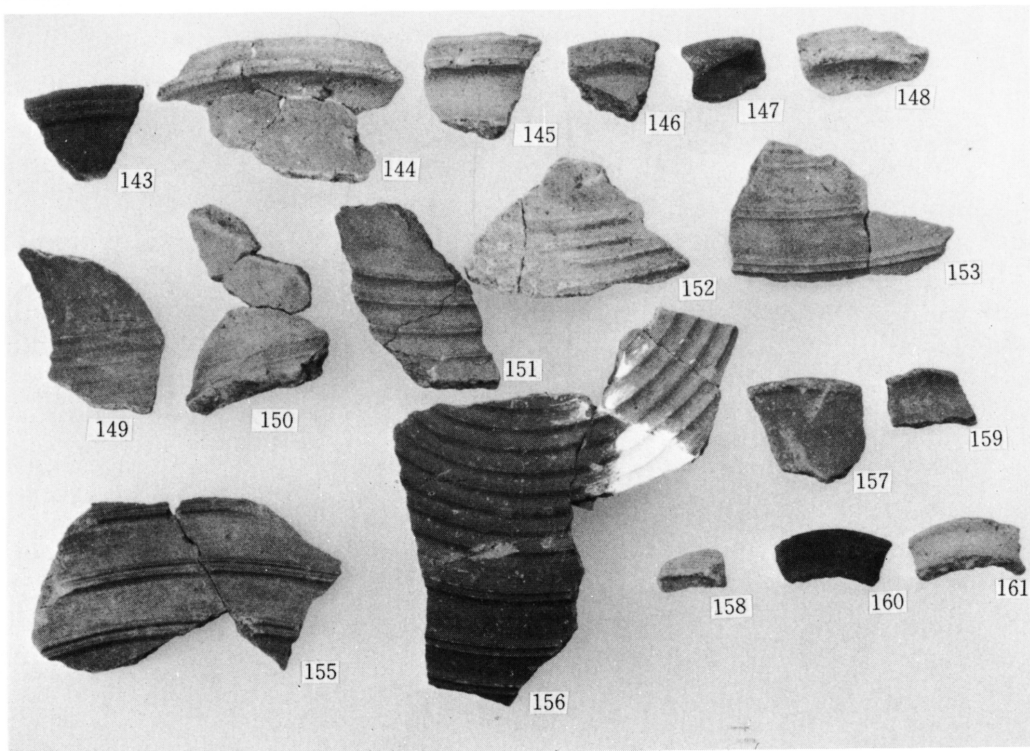
2. 弥生土器 (2)



1. 弥生土器(3) (116~128)



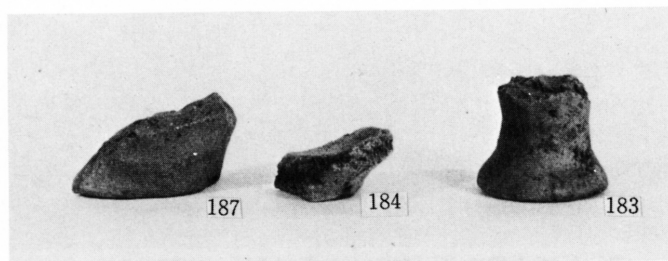
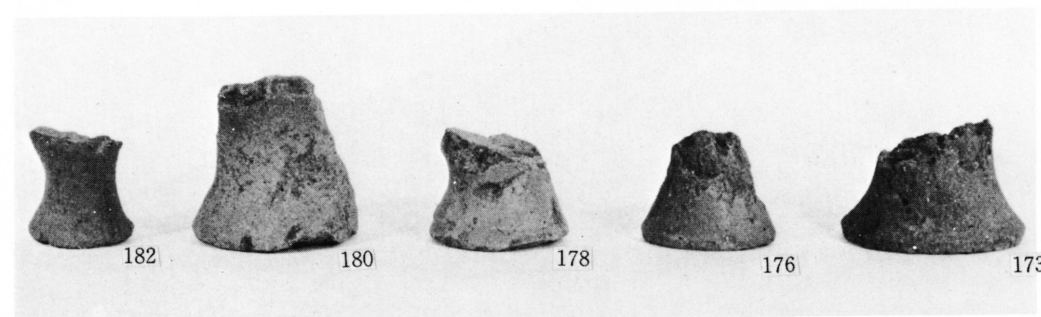
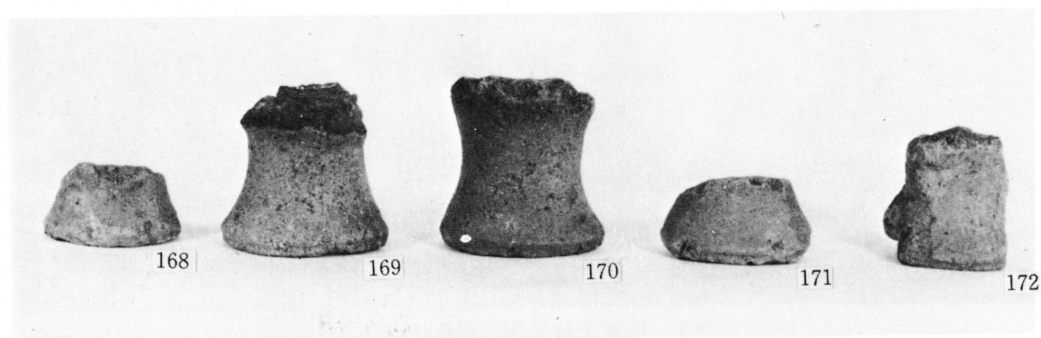
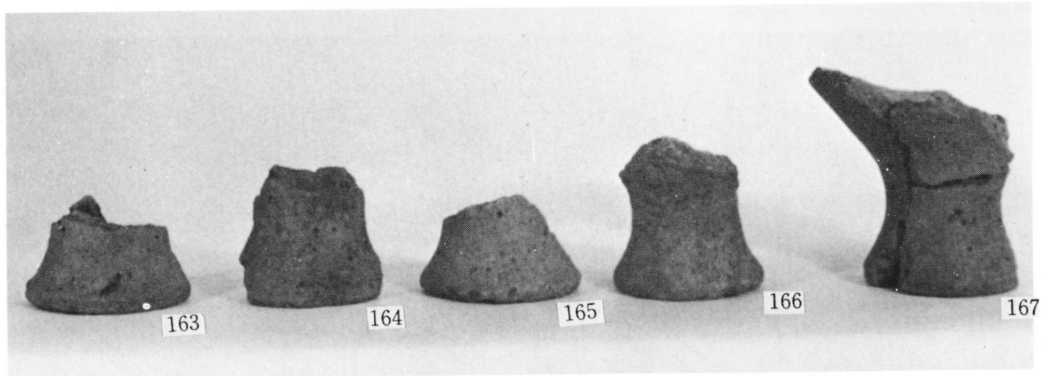
2. 弥生土器(4) (129~142)



1. 弥生土器 (5) (143~161)



2. 弥生土器 (6)



1. 弥生土器(7)



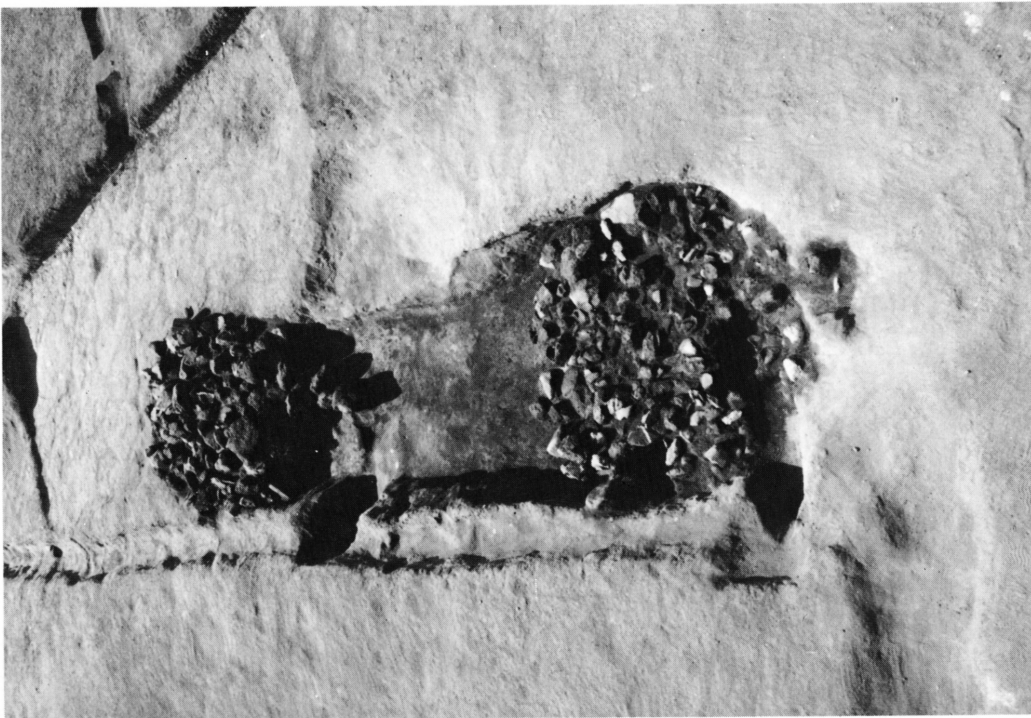
1. 近世土壙2号(集石)



2. 近世土壙1号(左)・2号(右) (南西から)



2. 近世土壙 3号



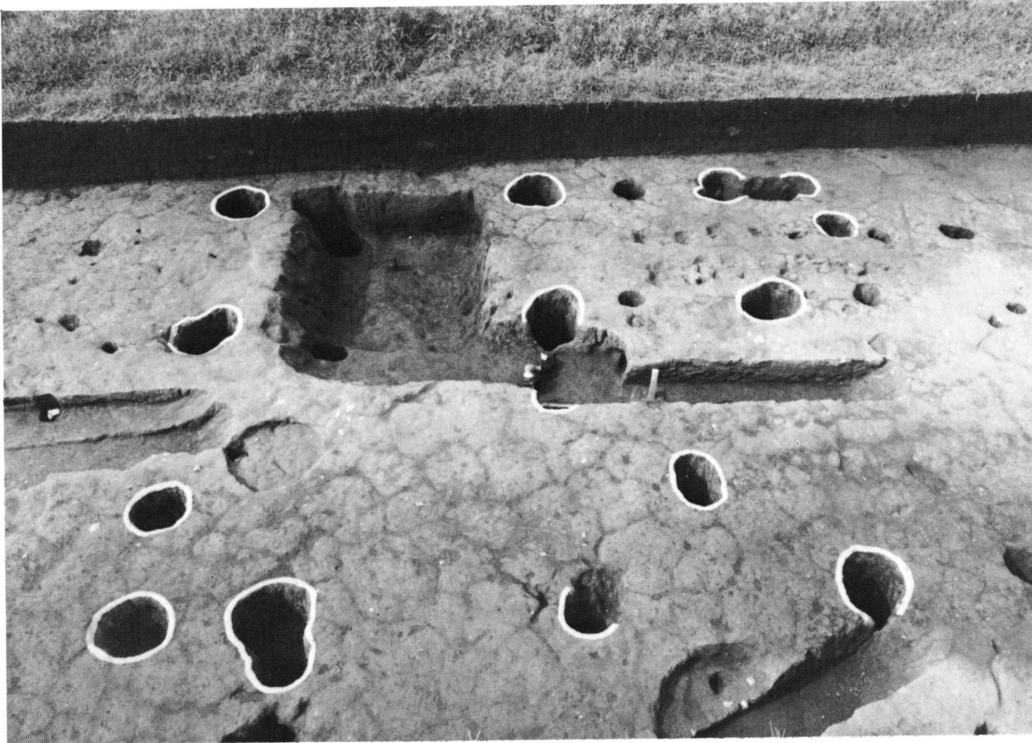
1. 近世土壙 3号 (集石)



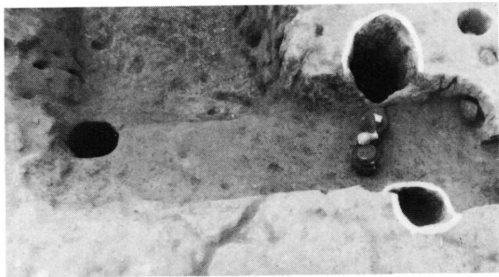
1. 側道拡張区遠景 (南から)



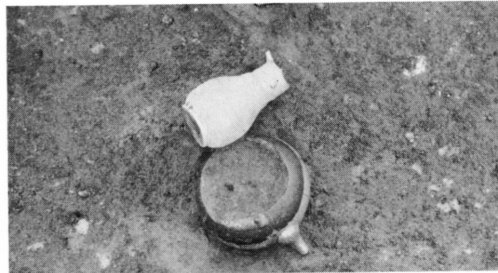
2. 掘立柱建物跡 2 全景 (南から)



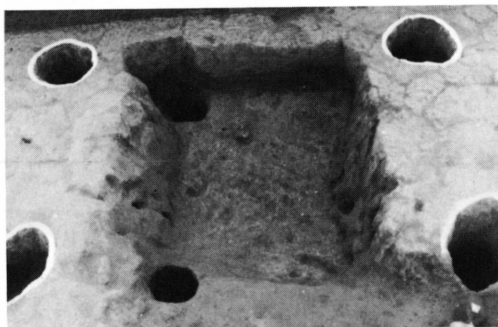
1. 掘立柱建物跡 2 (東から)



2. 近世土壙 5号



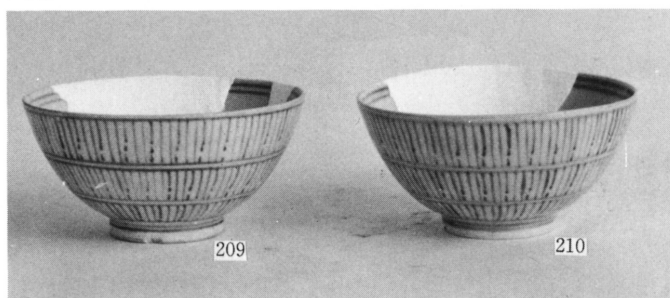
3. 土壙 5号遺物出土状態



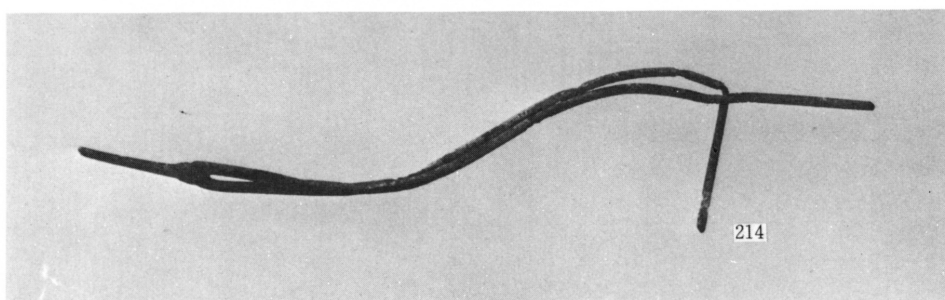
4. 土壙 6号



5. 土壙 6号埋土状況



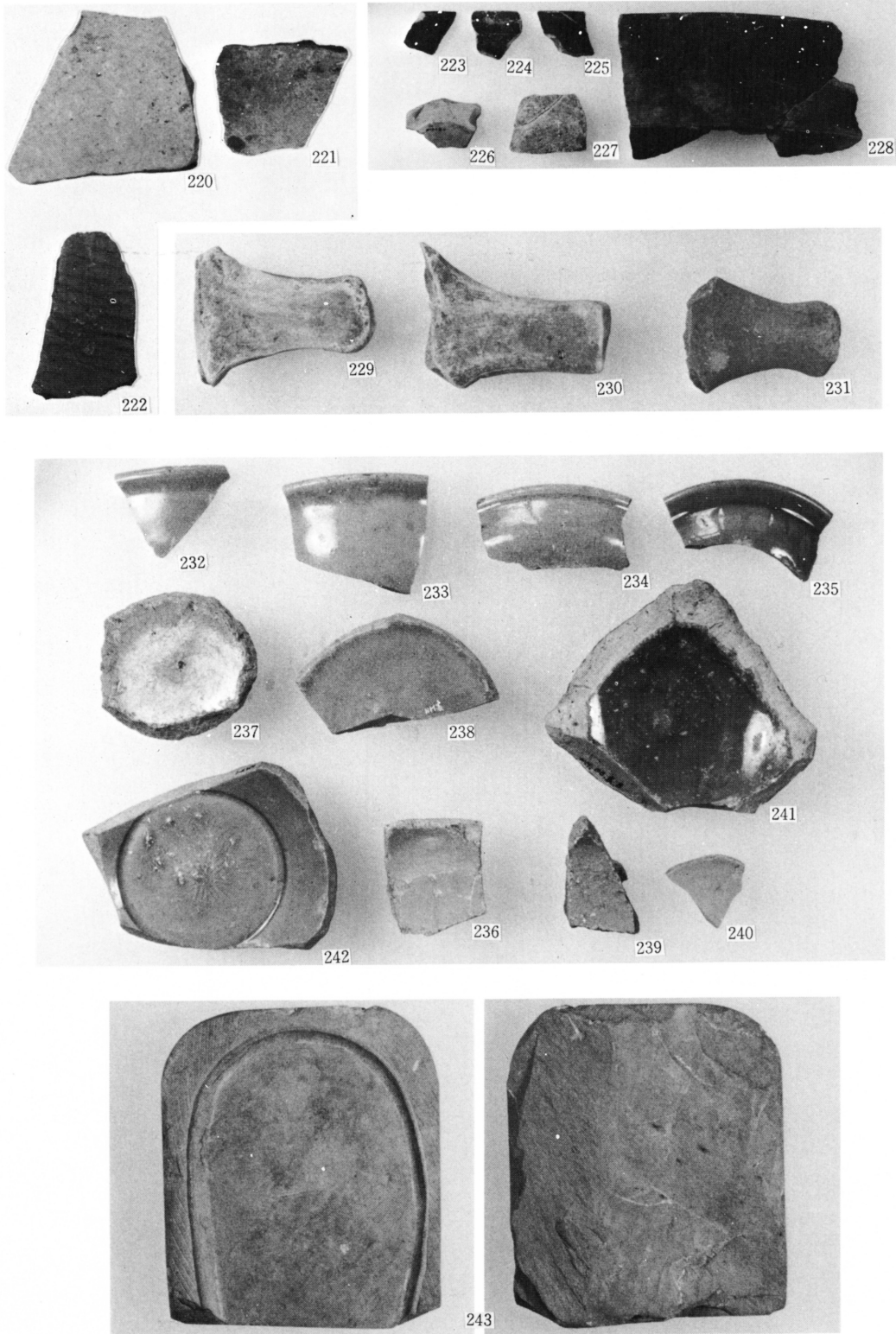
1. 土壙1号・2号出土遺物



2. 土壙4号出土遺物



3. 土壙5号・6号出土遺物



1. 中世・近世出土遺物

例 言

1. この報告書は、一般国道220号鹿屋バイパス建設に伴う大浦・郷之原地区の発掘調査の「川ノ上遺跡」の調査報告書である。
2. この報告書は、鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(48)の第3分冊「川ノ上遺跡」である。
3. 川ノ上遺跡は、鹿屋市大浦町(旧字名川ノ上)に所在する。
4. 発掘調査は、建設省九州建設局大隅工事事務所からの受託事業として鹿児島県教育委員会が実施した。
5. 発掘調査は、昭和61年9月16日～10月15日に実施した。整理作業は、昭和63年度に実施した。
6. 発掘調査において、鹿屋市教育委員会や大浦町振興会の協力・援助を得た。
7. 本書で用いたレベル数値は、すべて海拔高である。
8. 現地調査に関する実測及び写真撮影は、調査担当者(新東晃一・前迫亮一)で行った。
本書の執筆は、主として新東がこれにあたり、供養塚について河野治雄(南九州古石塔研究会)が執筆した。
9. 本書の編集は、鹿児島県教育庁文化課で行い、新東が担当した。

本文目次

第Ⅰ章 川ノ上遺跡の調査	101
第1節 川ノ上遺跡の概要	101
第2節 川ノ上遺跡の層位	105
第Ⅱ章 供養塚の調査	106
第1節 調査の概要	106
第2節 供養塚について	108

挿図目次

第1図 川ノ上遺跡の地形図とグリッド配置図	102
第2図 川ノ上遺跡断面実測図	103~104
第3図 川ノ上遺跡の層位と基本的層位	105
第4図 供養塚1号実測図	106
第5図 供養塚の基部実測図と芋穴図	107
第6図 供養塚石塔	109

図版目次

図版1	1. 供養塚1号全形(南から)	111
	2. 供養塚1号の石柱調査風景	111
	3. 供養塚2号全形(北から)	111
	4. 供養塚1号の調査風景	111
	5. 供養塚1号の塚断面図(南から)	111
図版2	1. 供養塚1号の塚断面遠景(南から)	112
	2. 供養塚1号の塚断面図遠景(西から)	112
	3. 供養塚1号の完掘状態(南から)	112
	4. 供養塚1号の石柱	112

第 I 章 川ノ上遺跡の調査

第 1 節 川ノ上遺跡の概要

1 調査の経緯

川ノ上遺跡は、大浦町の南側のヤツテ状に延びた台地の最西端で南に延びる小台地上の先端に位置する。地続きで東端に中ノ丸遺跡が位置している。この小台地上のほぼ中央に、供養塚と称される塚が存在していた。

昭和59年度の分布調査では、この小台地の北側の畑地に遺物の散布がみられた。そして、この供養塚の存在する小台地にも遺跡の可能性が想定されたが、この小台地は杉植林地のため確認調査は不可能であった。建設省大隅工事事務所と鹿児島県教育委員会と協議の結果、杉植林地部分は供養塚の発掘調査の時点で確認調査を行い、畑地のみを確認調査を実施することになった。そして、この部分を含めて第 1 地点とした。

建設省大隅工事事務所と鹿児島県教育委員会との協議の結果、昭和60年 4 月確認調査を実施し、その後昭和60年10月以降供養塚とその周辺の確認調査を実施することになった。畑地部分の確認調査の結果、基盤層の入戸火砕流堆積物まで掘り下げたが、この部分には遺跡は確認調査されなかった。

2 発掘調査の経過

供養塚とその周辺の確認調査は、昭和61年 9 月16日から10月15日の間に実施した。供養塚が主体となるため、供養塚を中心にN-49° -Eを主軸に10m×10mのグリッド網を調査対象区域に被せ設定した。東側から1～4と南側からA～Dとして、各グリッドはA 1区——A 4区、D 1区——D 4区などと呼称することにした。

3 発掘調査の成果

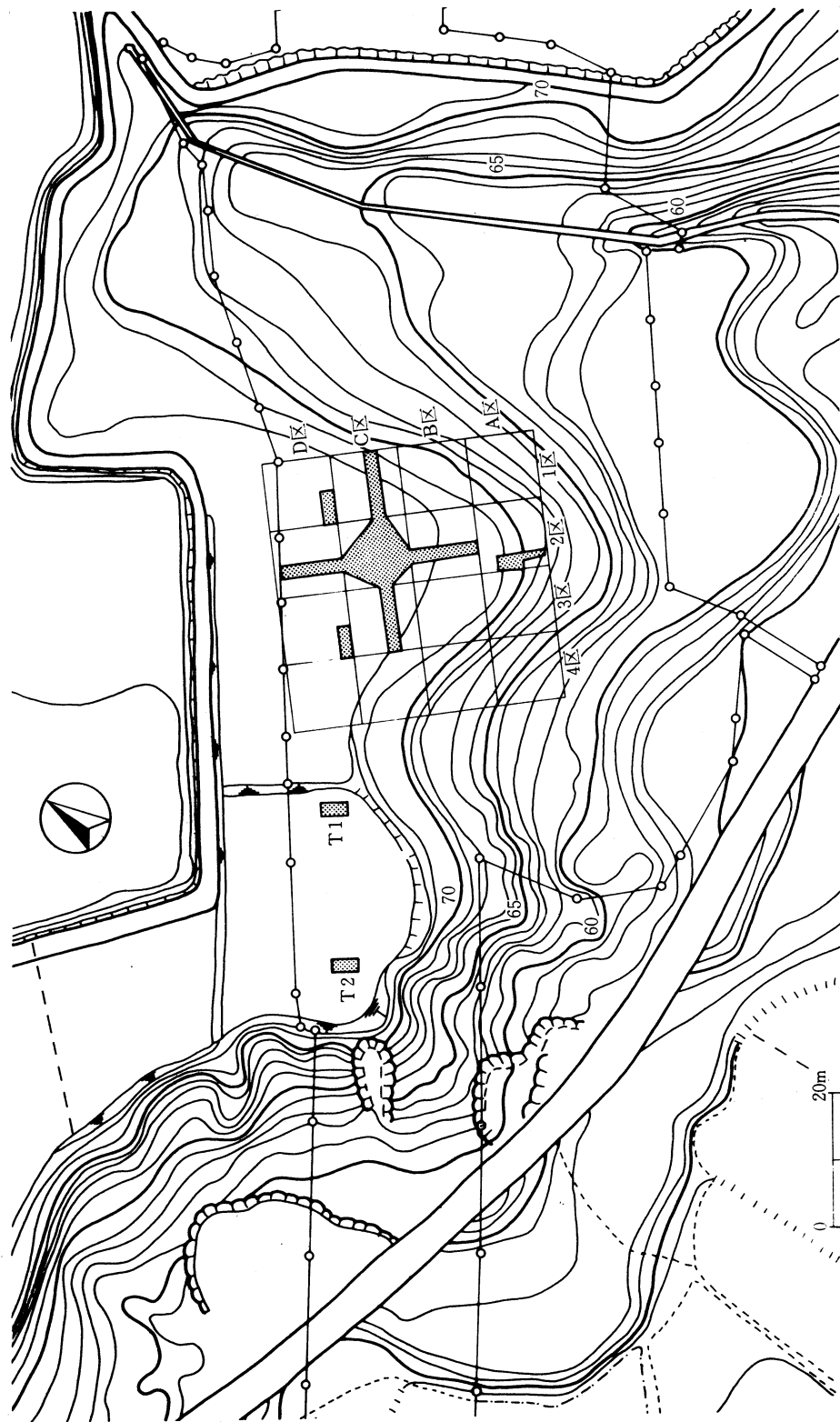
発掘調査は、供養塚周辺の確認調査と供養塚の調査を行った。

確認調査は、供養塚を中心にB～D 2区方向とC 1～3区方向の十字に幅 2 m のトレンチを設定し、また、D 1区とD 3区に 2 m × 5 m の 2 本のトレンチを設定した。

確認調査の結果、基盤層の入戸火砕流堆積物まで掘り下げたが、この小台地上には遺跡は存在しなかった。

供養塚の発掘調査は、円墳に似た形状のため古墳の調査と同じ方法で行った。供養塚調査のため周辺を伐採し精査した結果、この供養塚の南西方向の約20mの位置に新たな供養塚が発見された。盛土丘は痕跡を残す程度であるが、石柱を備えたものであった。そのため、最初のもを供養塚 1 号とし、後に発見されたものを 2 号として調査を開始した。

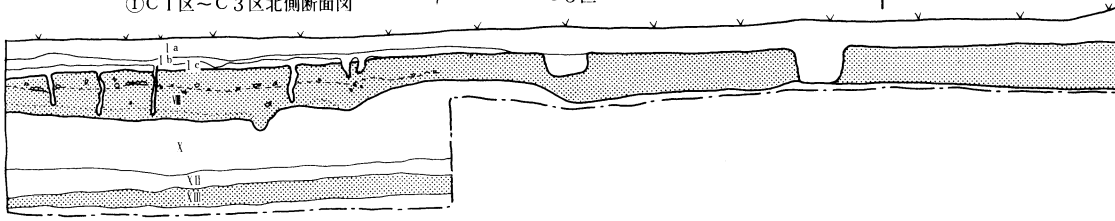
供養塚 1 号は、直径は略南北4.25m、略東西4.20mを測り、高さは約 1.4m の盛土円丘である。盛土中には遺構・遺物は検出されなかったが、円丘頂には高さ85cmの石柱が立てられてい



第1図 川ノ上遺跡の地形図とグリッド配置図

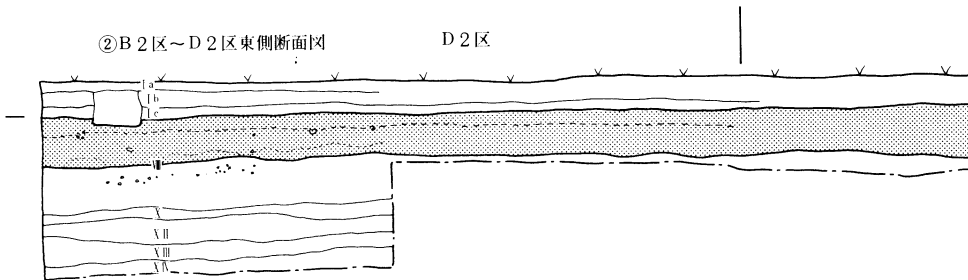
①C1区~C3区北側断面図

C3区

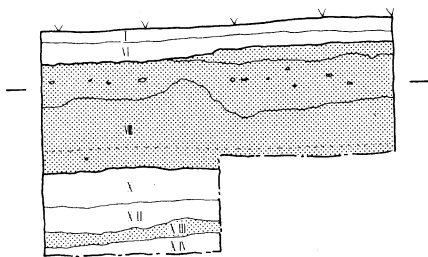


②B2区~D2区東側断面図

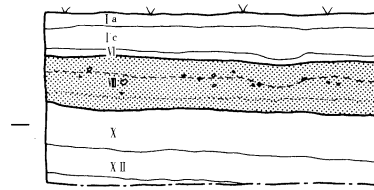
D2区



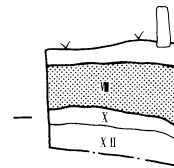
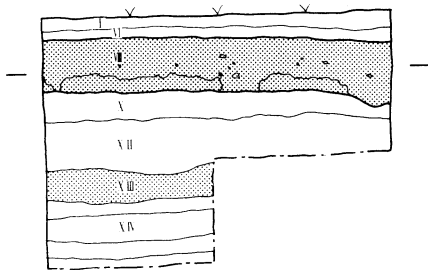
③1トレンチ西側断面図



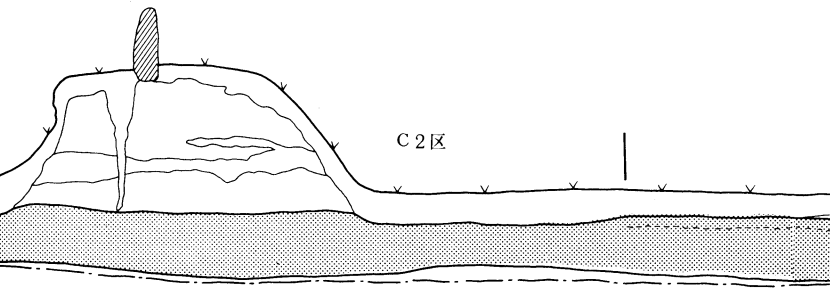
⑤D1区北側断面図



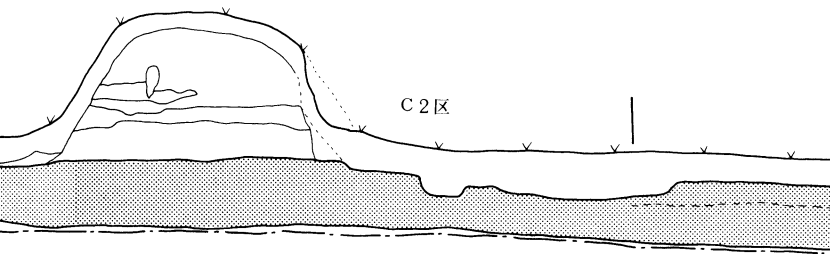
④2トレンチ西側断面図



⑥A2区東側

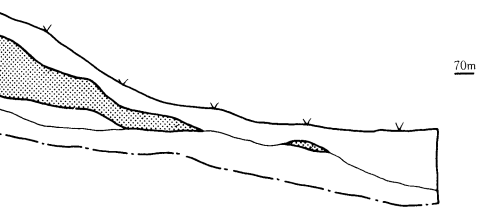
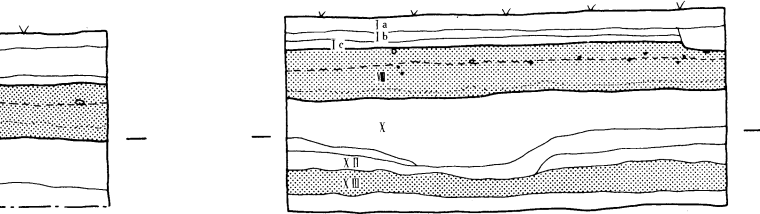


C2区



C2区

⑦D3区北側断面図



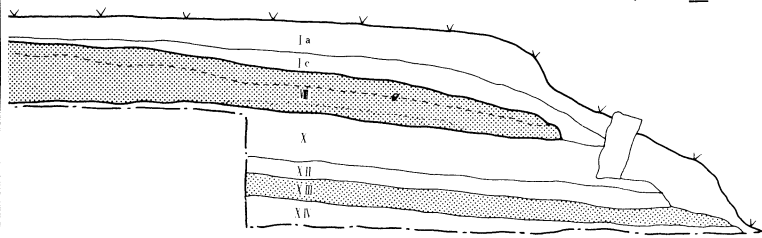
70m

断面図

第2図 川ノ上遺跡断面実測図

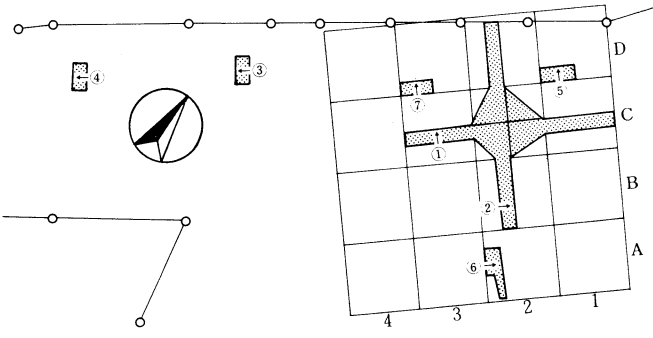
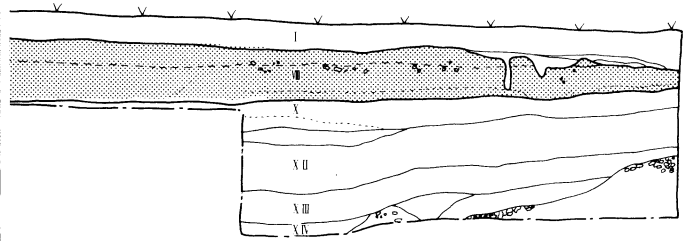
C 1区

71m



B 2区

11m



た。石柱側面には墨書が確認されるが、肉眼では判読不可能である。

供養塚2号は、台地の南向きの傾斜地に石柱だけが立てられ、塚状の盛土は確認されなかった。

第2節 遺跡の層位

川ノ上遺跡の散布地の本体は用地外の北側に広がる広い台地上にあり、その末端の一部がトレンチ1、2にあたる。トレンチ1、2は、昭和60年度に確認調査で実施したものである。その結果、XI層の黄褐色軽石粒混暗褐色土層（薩摩火山灰）は欠如するが他の層位は比較的正常な堆積を示している。しかし、遺物包含層は確認されていない。供養塚の所在する地点の確認調査は、植栽のため供養塚の調査に伴って実施した。その結果、遺物包含層は確認されず川ノ上遺跡はこの地点までは広がっていないことが確認された。

川ノ上遺跡の層位は、耕作土直下にII層（黒色土層）III層（黒褐色土層）が順次堆積している。III層は、弥生時代に相当するがこの地域では遺物は確認されていない。

続いてV層の堆積がみられるが、この地域ではIV層の黄白色土層は存在していない。V層は縄文時代晩期に該当する層であるが遺物は確認されていない。

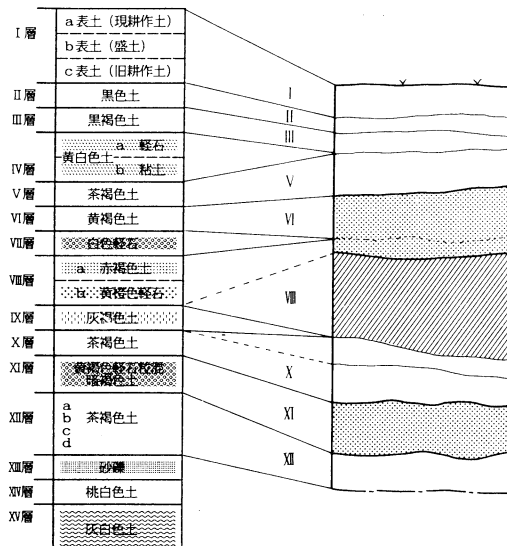
VI層からVIII層は、約80cmの厚い堆積層をなし、いわゆるアカホヤ火山灰に同定される。これらの層は、中ノ丸遺跡では3層に細分される。

最上層はVI層の黄褐色土層であり、アカホヤ火山灰の二次堆積層で縄文時代前期から後期の包含層を形成する層に該当するが本遺跡では遺物は確認されていない。その下位にはVII層に比定される白色軽石が遊飛した状態で確認される。そしてその下層には、VIII層に対比される暗茶褐色の砂礫層が堆積している。このVIII層に対比される暗茶褐色砂礫層は、他の地点では見られない形状である。

続いてX層が堆積しているが、若干粘質帯びた上層と粘質を帯びない2層に細分される。このX層は縄文時代早期包含層に該当するが、遺物は確認されていない。

XI層は黄褐色軽石粒混暗褐色土層で、薩摩火山灰に比定される。この層は、この地点でも平坦面などの安定したところしか確認されていない。

続いてXII層の茶褐色土層が堆積し、以下、XIV層の桃白色土層（ヌレシラス）へと続く。



第3図 川ノ上遺跡の層位と基本的層序

第Ⅱ章 供養塚の調査

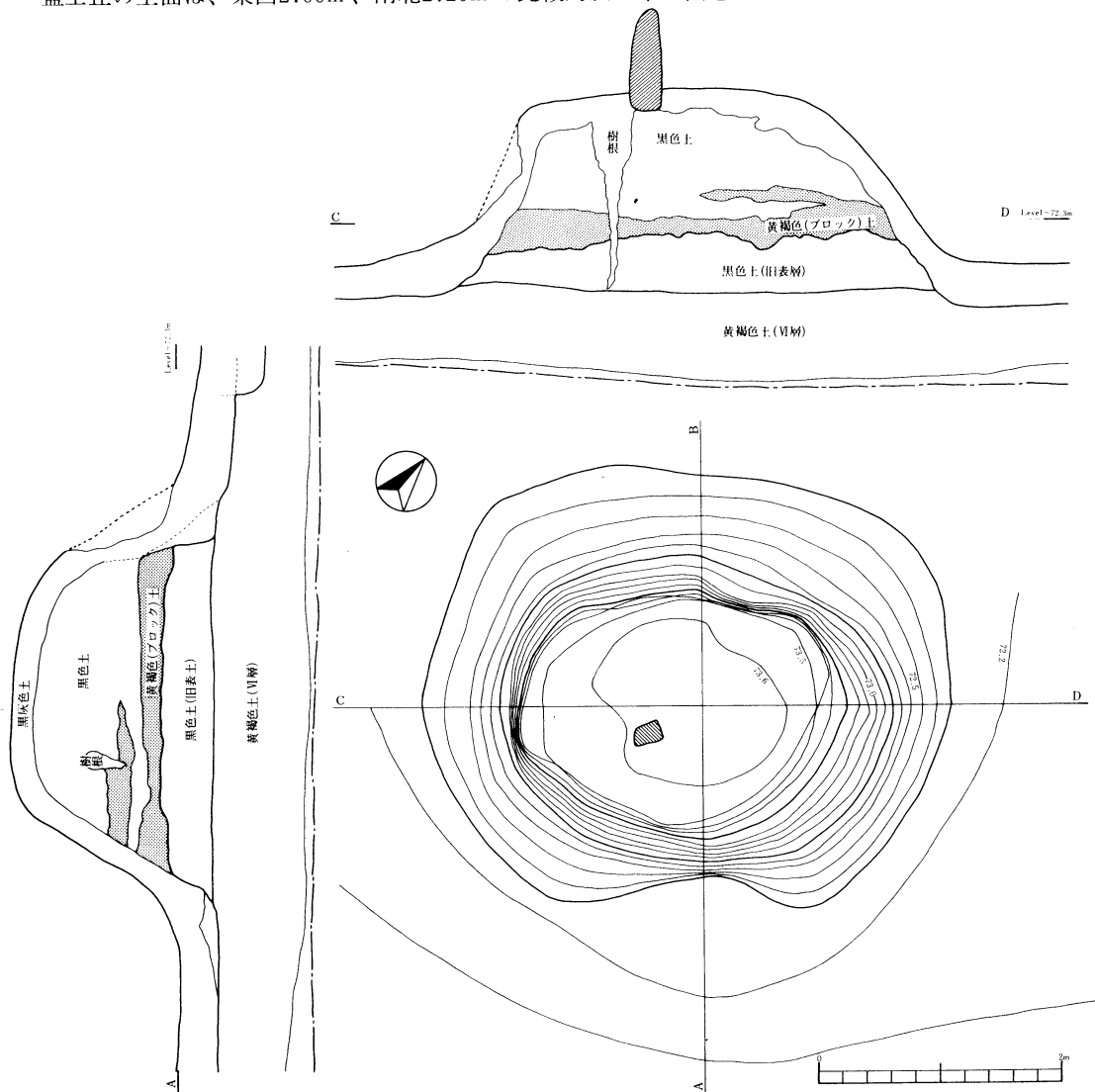
第1節 調査の概要

1 調査の概要

供養塚は、C2区とA2区に所在し、C2区のもの供養塚1号、A2区を供養塚2号と呼称することにした。1号と2号は、約20mの距離に離れている。1号は台地の中央に所在し盛土丘を残しているが、2号は台地の先端に位置しほとんど盛土丘は残存せず石柱だけ存在するものである。

2 供養塚1号 (第4図・第5図)

供養塚1号は平坦地のほぼ中央に所在し、盛土丘の規模は東西4.25m、南北4.20mを測る。盛土丘の上面は、東西2.00m、南北2.20mの比較的広い平坦面をなす。そして、その平坦面の



第4図 供養塚1号 実測図
-106-

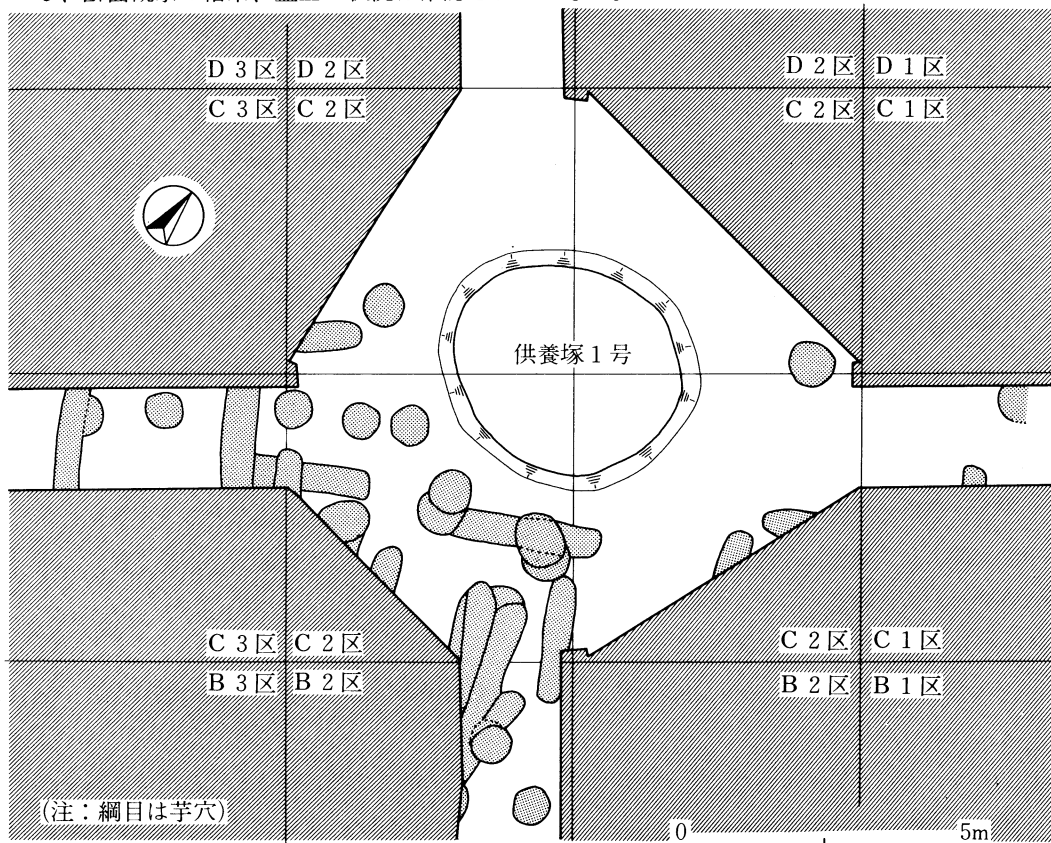
北から約1.50mで南から約0.70mのところには石柱は立てられており、真中央には位置しない。盛土丘の比高は、1.37mを測る。また、東南側が若干崩壊している。

盛土丘は、円墳と同様の調査を試みたが、盛土内部には埋葬施設などの遺構は確認されなかった。盛土丘の断面を観察すると、次のような構築が確認される。

まず、旧表土が40cmの厚さに確認され、その直下はⅥ層のアカホヤ火山灰の二次堆積層となっている。そして、盛土丘は、このⅥ層を若干掘り下げる状態で整形して作り始めている。このⅥ層の整形痕跡は、北東-南西は4.20m、北西-東南が3.50mを測る若干楕円形を呈したプランをもつ。次に、旧表土直上にはⅥ層（アカホヤ火山灰層）のブロック状混土を15cm～20cmの厚さに盛土している。さらに上部には10cm程度の黒色土が盛られ、その上には再びⅥ層ブロック状混土が15cm～20cm盛られている部分も存在する。しかし、比較的堅いⅥ層ブロック状混土と比較的柔らかい黒色土層とを交互に版築状に盛土したものではないが、これに近い状態での規則的な盛土の手法が取られたことが看取される。

3 供養塚2号 (第2図)

供養塚2号は、供養塚1号から略南の20mの距離の台地端部に位置する。55cm×25cmの石柱が立てられており、さらに石柱を中心に1.5mの範囲の表土の僅かな高まりが見られる。しかし、断面観察の結果、盛土の状況は確認されていない。



第5図 供養塚の基部実測図と芋穴図

第2節 供養塚について

河野治雄

(南九州古石塔研究会)

一、調査日 昭和61年9月18日～19日

二、場所 鹿屋市大浦・郷之原遺跡調査地域内

三、名称 伝「供養塚」と石碑(供養碑)

四、調査概要

(1) 現地での状況 現地は標高70m程の舌状台地で、旧状は既がないが周囲の状況から杉の植地であったことがわかる。植林杉は17・8年～20年生であり、それ以前は畑耕作が行なわれていたということである。

台地の北・東・南は10数mの曲折した崖を形成、東南崖下には松橋川(支流か)東南に流下する。

「供養塚」はこの台地の中央よりやや北側に盛土状に堆積され、その頂部に「供養塔」を建てている。(1号)この「供養塚」の東側崖際に短い(下方は欠損したと思われる)同じような人工石が僅かな盛上り状の地形の上に建っている(2号)。明らかな「塚」はない。

(2) 名称 調査対象となった「供養塚」には特別の名称は付けられていない。

(3) 「供養塚」の現状 「供養塚」(以下「塚」とよぶ)は、台形状で次の大きさをもっている。

「塚」上方の巾凡そ200cm～220cm程

「塚」高さ凡そ140cmほど

「塚」底部の巾凡そ450cmほど

「塚」上には舟形の「供養石」(赤色をした石で安山岩と推定)が建立されている。(之については後述する)

「塚」盛上の状況はその一部を調査した結果は、上方部分30cmほどは黒色火山岩で、その下方は黒褐色土質を黒色火山炭と混じた層をなしていた。人工的に盛土したことが推定された。開土して調査した盛土の部分には埋葬物らしいものはなかった。盛土した地下部分は未調査のため、調査の結果をまちたい。

(4) 「塚」上の「供養石(塔)」について

「供養石(塔)」は「塚」上の一基(完形)と東側崖際に建っていた一基(但し半壊と推定)があった。

「塚」上の一基は完形で、明らかに舟形に加工したものである。調査した結果は、高さが80cm、上部は欠けたと思われるが巾5cm、中央部の最大巾22cm、下部は21cm、厚さわ上部で

8 cm、下方が厚く16cm程である。一面を磨き、その面に供養の趣旨とも考えられる墨書銘が3行～4行に誌されていることが確認されたが銘文は消滅甚だしく僅かに数字を確認（推定）するにとどまった。早い時期に確認記録されているものがあればと考えるが今後の調査課題の一つである。「生」・「佛」等と推定されるものである。之だけでは趣旨の記述か経偈かは不明である。この「供養石（塔）」は、墨書銘のある面をやや東南に向けて建てられていた。また、この墨書銘から「年代」を推定する文字は確認されなかった。側面にも認められない。

次にこの「塚」の東側崖際に建っていた半壊状の三角状の石は加工されたあとが見られ高さ46cm、巾上方で9 cm、下方で23cm、厚さ18cmであるが、石面に墨書・刻字などの痕跡は認められないし明らかに築かれたと思われる「塚」はない。どの様に使用されたかは不明である。然し「供養塚」と無関係なものとは考えられない。

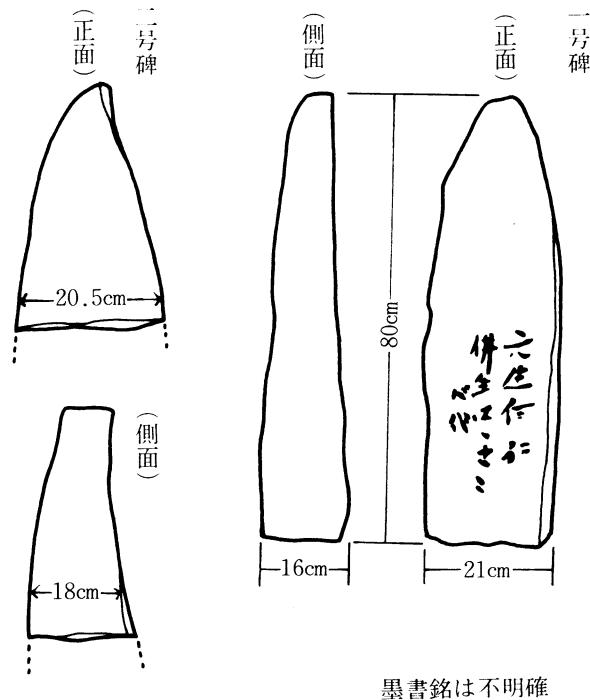
「供養塚」及び「塚」上の「供養石」については別添資料の①②参照されたい。左に「供養石」を図示しておきたい。なお墨書銘については別添資料③を参照されたい。

以上が今回調査した「供養塚」の調査内容の概略であるが調査当日は雨天の為その雨の止んだ合間を見ての作業や調査であった為調査は十分とはいえない点がある。また現在も調査は継続中であるので今後

の調査の結果をまとめて検討することが必要である。それについて次に今後の調査の中で必要と思われることを要望として記しておきたい。

五、今後の処置

- (1) 「供養塔」（1号）の墨書文字を早急に撮影し記録しておくこと。確認された時期に記録しておかないと更に磨消して益々不明となり解読が困難となるおそれがある。この文字が解明出来ることは「供養塚」或は「供養塔」の性格・建立の意味などが理解出来る重要な「歴史資料」だからであ



第6図 供養塚石塔

る。

② 「供養塚」の解明（盛土部分及びその地下部分）をするにあたっては、出土遺物・遺構の有無について十分な調査を望みたい。

(3) 「供養塚」に関する直接の文献は見当たらないので、伝承などによる収集をしていただきたい。（調査時に作業員の一人から「イノシシのキバを埋めた」との話があり、狩猟に関する「供養塚」かとも考えられるものである。土地の所有者（旧地主）・村の古老や村民に語り継がれている何らかの伝承は無いかを究明することも必要と考える。

「供養塚」などは民俗学的要素や仏教考古学的要素を含んでいると思われるのでそれらを念頭におくべきであろう。

(4) 次に全ての調査がすんだ後にこの「供養塚」をどのように処理するかを検討しておくべきであろう。

「供養塚」として位置をかえて再現するのか、或はこのまま記録にとどめて遺物資料としてどこかに保管しておくのかなどは重要な検討事項ではないかと考えている。

六、参考となりうるか否か断定できないが、調査の合間を見て遺跡地の周辺の調査をしたので2、3付記しておきたい。

- (1) 大浦村の墓場の墓地の中に江戸期の古墓が残されており、その中に僧侶の墓が数基あった。寛政10年（1798）「^礼権大僧都圓天院法師」。天保10年（1839）「^礼権大僧都圓長坊不生位」などと銘があった。これは明らかに修験者（山伏）の墓塔であり、大浦には当時（江戸時代）修験者の居付いた場所があったと考えられる。「供養塚」や「供養塔」の設置については往々にしてこれらの修験者（山伏）が密接に関与していることを念頭におくことも必要である。
- (2) 大浦村には「小川観音」といって「観音信仰」の場所があり、また「小川」には四国から勧請の「長谷観音」もあったという記録がある。（鹿屋市誌、三国名勝図会）
- (3) 郷之原の山麓の岩壁には「南無観世音菩薩」と彫った信仰の場所があったという記録もある。（鹿屋市誌）
- (4) 同じく郷之原の村はずれ（石切場＝碎石場の傍）に「地藏堂」とよばれる古い信仰の堂宇がある。その庭には二十五基程の供養塔群（小型の宝塔、五輪塔群）が整理されている。その形態から戦国期のものでと推定されるが、一説には禰寝氏に関するものかと伝えられる。
- (5) また、少し距たりはあるが遺跡の南の方に（鹿屋特攻隊記念碑の東）「久恵城」という城跡があったという。正平年間南朝方の武将が居たということで、これをめぐる攻防があったと伝えられ、この攻防に関係もあるのではとの話しもあった。然し年代のへだたりや聞き得た伝承から関係はないように思われた。

（昭和61年9月22日）



1. 供養塚1号全形 (南から)



2. 供養塚1号の石柱調査風景



3. 供養塚2号全形 (北から)



4. 供養塚1号の調査風景



5. 供養塚1号の塚断面 (南から)



1. 供養塚1号の塚断面遠景（南から）



2. 供養塚1号の塚断面遠景（西から）



3. 供養塚1号の完掘状態（南から）



4. 供養塚1号の石柱